

向日庵

2



はしがき

NPO 法人「向日庵」の前身にあたる研究会「寿岳文章一家の業績を調査研究する会」は7回にわたる講演会、研究会を催し、その成果として小冊子『向日庵』を2018年3月に発行しました。

その後、「調査研究会」はNPO 法人「向日庵」に引き継がれ、寿岳一家に関する研究発表会、講演会を7回にわたり開催できました。晴れて今回、これらの活動報告を講演録『向日庵 2』としてまとめることができた次第です。

本書には、寿岳文章と河井寛次郎の交流、及び民藝協会設立をめぐる和紙を中心とした文化活動などが記されています。若き日から寿岳文章が師として私淑した新村出との生涯にわたる人間的交流、昭和初期の向日市の知的環境もまた、十全に紹介されました。

本書には数多くの和紙についての論考が収められていますが、文章が夫人とともに生涯にわたり取り組んだ和紙に関するリサーチは、和紙文化の国際化に寄与した事実もまた照射しているのではないのでしょうか。

NPO 法人「向日庵」は寿岳一家が発信する文化的業績に注目し、多様な側面をご報告していく所存です。皆様、どうか私たちの活動を今後とも見守り、ご支援くださいますよう、衷心からお願い申し上げます。

桜の開花をまつ日

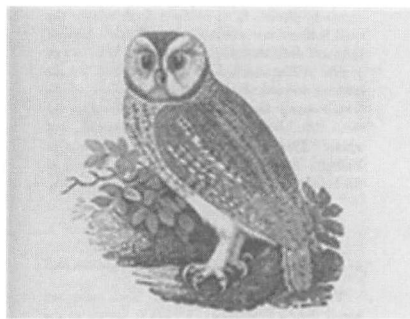
特定非営利活動法人向日庵 副理事長 中村隆一



目 次

はしがき

- 【設立記念講演】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
文化遺産としての向日庵 ―過去を見つめ、未来を見ずえる「開かれた場」―
甲南大学教授 中島俊郎
(2017年4月30日 於：西向日コミュニティーセンター)
- 寿岳文章からはじまる杉原紙の里・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
多可町立那珂ふれあい館館長 安平勝利
(2017年9月3日 於：向日市寺戸公民館)
- 寿岳文章の和紙研究と寿岳文庫の資料について・・・・・・・・・・・・・・26
杉原紙振興ボランティアの会代表 山仲進
(2017年9月3日 於：向日市寺戸公民館)
- 正倉院の紙と昭和の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
公益財団法人紙の博物館 前学芸部長 辻本直彦
(2017年9月3日 於：向日市寺戸公民館)
- 和紙の調査分析に秀でた人物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
東京都市大学名誉教授（文学博士）河野徳吉
(2017年11月4日 於：長岡京市立中央公民館)



河井寛次郎著 詞編「いのちの窓」に依り寛次郎の思い、願いに迫る・・・・・・・・ 51

—柳先生と民藝運動とも絡めて—

河井寛次郎記念館館長 河井敏孝

(2018年5月20日 於：キャンパスプラザ京都)

寿岳文章の生きた軌跡と新村出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61

新村出記念財団重山文庫 新村恭

(2018年9月29日 於：長岡京市中央生涯学習センター)

昭和初期の向日町と文化人・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77

向日市文化資料館館長 玉城玲子

(2018年12月15日 於：長岡京市立中央公民館)

【会員研究発表】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83

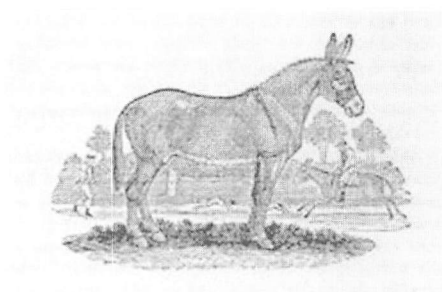
『和紙研究』解説

京都工芸繊維大学非常勤講師 紙漉き師 田村正

(2018年12月15日 於：長岡京市立中央公民館)

あとがき

挿絵 Thomas Bewick (1753-1828)



「英国農村の風物を余白挿絵（いわゆるカット）風に点出する場合、他のどんな版画家の作品よりもビューイックがふさわしく、打ってつけであることを、私はギルバート・ホワイトの『セルボン博物誌』の邦語訳を岩波文庫に入れるに際し、当時英国文化使節として日本に来ていたエドモンド・ブランデンとも検討の上、結論づけた思い出がある」

寿岳文章

【設立記念講演】

文化遺産としての向日庵

— 過去を見つめ、未来を見すえる「開かれた場」 —

甲南大学文学部教授 中島 俊郎

壽岳文章先生は常々、ものごとを観察するにはふたつの見方があるといっておられました。対象を巨視的に見る視線と、微視的に注視する視座—すなわち望遠鏡ではるか彼方を見るような見方と、手前にひきつけ肉眼でもって凝視する微視的に見るといった双方の見方を自在に意識的に使いこなせる重要性を説かれています。対象を立体的に、かつ具体的に把握するため、そうした両視座が必要であるというわけです。何ごとを観察するにしてもふたつの視座をたえずそなえておかななくてはいけないというのが先生の教えでした。

向日市の歴史的展開

今、私どもの法人はどのような意義をもつのか、なぜ設立しなければいけないのでしょうか。ここに「文化遺産としての向日庵」という演題がついています。当地、向日市のことを多少たりとも知らなければいけないと考え、壽岳先生の言われる巨視的な見方ではありませんが、幸い『向日市史』という地域史が当時の民秋市長のもとで上下2巻にわたり編纂されています。その「発刊の辞」が、簡にして要を得ていますので引用しましょう—

向日市は、今から1200年前、宮都—長岡京—が営まれた王城の地であります。江戸時代に入って、西国街道沿いに商工業が発達し、乙訓郡内の政治・経済・文化の中心として栄えました。その後も、京都と大阪を結ぶ交通の要衝として発達し、とくに近年は、住宅都市として変貌を遂げているのであります。このような向日市の歴史的な発展の足どりを明らかにして、これを後世の人々に正しく、かつ詳しく伝えることは、現在に生きる私たちの責務であります。

(向日市長、民秋徳夫「発刊のことば」『向日市史』上巻)

(下線部は引用者による、以下すべて同じ)

このように『市史』をひもといていきますと、長岡京から平安京に移るわずか10年間の

都ですが、律令制度のもと、どのような生活が営まれていたのか、生活史としてもすぐれた記述が多く書かれていて、私たちは当時の生活の営みを理解できるわけであります。翻ってみれば、ここ乙訓は日本史そのものと言っていいくらいの歩みを形づくっている土地である、と言ってもいいのではないのでしょうか。まことに豊かな歴史があふれている地域であります。

弥生時代から長岡京へ、そして今日に至るまで歴史は延々と流れていくわけですが、そうしたなかで私たちが集って今、話題にしている向日庵の背景として考えられる、「住宅都市としての変貌」云々という箇所が『市史』に記述されています。今日、郊外都市の文化史、建築史というテーマは世界的に概観してみても学際的で多岐にわたる研究対象となっています。

ここに神戸から持参しました大部な英語で書かれた『構想されたパラダイス—田園都市と近代都市—』(2013年)によりますと、この文献は研究の動向をまとめたものでしかありませんが、郊外都市は人間の手で計画され造られたパラダイス(天国)、すなわちキリスト教の国の人たちの考えによりますと、都市は神の手により造られしもの、しかし郊外都市は人間がつくったパラダイスなのだという視座が展開されています。日本の例として東京の田園調布、大阪の千里ヶ丘などが詳しく紹介されています。そして、ヨーロッパ、ロシア、北アメリカなど世界的な知見のもと、郊外住宅の諸例が大いに議論されています。そうした郊外都市の中に位置する向日庵はいま文化的な検討材料として、どのような分野からもリサーチ対象になり得るものであるという前提を、私たちは忘れてはならないと思います。昭和初期に郊外都市として発展を遂げていく推移のなかに向日庵はあったのです。おのずと、こうした視座には微視的、巨視的な両アプローチが必要となってきます。

他方、『市史』によりますと、向日市の願徳寺(宝菩提院)に元あった薬師仏壇像は弥勒菩薩像で有名な太秦広隆寺に移されて広隆寺の本尊として祀られています。こうした歴史の流れを注目しますと、五百年、千年という時間のスパンで文化を巨視的に、かつ微視的に見なくてはいけない土地柄がよく理解できます。私たちが生きている現在、つまり2017年ですが、千年後の3000年の未来から、逆に私たち向日の郊外都市文化というものを見たとき、向日庵がどのような意味をもつのか、そうした壮大な視座を忘れることなく、今日は「向日庵」について、ご一緒に検討していきたいと考える次第です。

向日庵の人々

本日、ご出席して下さっている方々のなかには、向日庵のこと、そこに住み生活をされていたご家族四人についてご存知で親交を深めておられた方も多々いらっしゃると思います。当主の文章先生をはじめとする四人のご家族が住まわれていましたが、四人それぞれを個としてみても、このご家族はゆうに研究対象となりえて、それぞれの分野において研究者が対峙し乗り越えて行かねばならない対象であります。

壽岳文章先生は、日本の書誌学の嚆矢ともいえる『ウィリアム・ブレイク書誌』を作成されました。そして書誌学の知見が英文学研究と連携を保ちつつ、やがて和紙研究の方へも進んでいかれ一家をなします。そして最後は畢生の翻訳、ルネサンスの傑作であるダンテ『神曲』を訳されて生涯を終えられました。

夫人であるしづ（静子）さんは、不幸な生い立ちを創作の糧として早くから、（昭和初期に、芥川龍之介全集とともに岩波書店の宣伝に掲載されていたのが非常に印象的ですが）、『朝』（昭和2年）という自伝小説でよく知られています。そして後年には『歳月を美しく』という創作集もあります。壽岳文章先生が教えられた英語力をもとにして、ハドソン、ジェフリーズといったエコロジーを主調とするようなイギリス文学の翻訳を数多くなされ、これらは古典として岩波文庫に入っていて今日でも広くの読者をあつめています。

そして壽岳章子さん、この方は壽岳家を代表するようなスポークスマンとして活躍されました。ご専門は日本語学でしたが、その枠にとらわれず、女性学からいわゆる世間知に溶けやすい、ことばを媒介にした歴史、ジェンダー、また京都の町家の暮らし、方言などに関する数多くの著述を通じて、私たちの蒙をひらいてくださいました。今日、古都、京都で話題になっています「町家保存」はつとに章子先生が力説されていたところで、透徹した先見性には驚かされます。

京都大学を出て、東京大学天文台で研究されていた壽岳潤先生は、『星座をみる楽しみ』、『宇宙論はいま』などのご著書をお出しになっているばかりか、発見した星にはご自身の名前までついています。アメリカに留学され、その後、数え切れないくらいの英語論文を国際的学会誌に公刊されておられます。芯からの科学者で、俗信となっているような超自然現象を科学的に検証しようとされ、「懐疑」という意味を誌名にした『スケプティクス』という国際的雑誌を刊行され、科学知の啓蒙に力を注がれました。

今、述べましたように、個々の業績は理解できるのですが、では向日庵という全体的なものとなれば、何が浮かんでくるのか。何を私たちに訴えようとしているのか。冷静に多大な業績をつらつら見るに、この四人が少なくとも文字を媒介にして、「ことば」でもって私たちに何かを伝えようとしたといえるのではないのでしょうか。和紙研究、英文学、天文学、言語学から、日本文学などとまったく方向は異なりますが、その筆になり訴えてきた言葉は反戦、非戦を声高にさけび、自然との共存、また相互扶助の精神を私たちに滔々と説いてくれました。今日でもそうした文字はいささかも古びてはいません。

ここにおられるほとんどの方は向日庵の建物をご存知かと思いますが、多くの方がその中へ入った経験はないのでは、と思われまます。潤先生の追悼集からとらせていただいた写真をご覧ください。最初にある写真が潤先生にとって、青年期まで過ごされた住居、向日庵です。ここで写真というヴァーチャル空間をざっと一緒に歩いていきますと、向日庵の四人がどのように暮らして、何を考えて、何をみつめてきたのか、今改めて再検討を迫られているようです。

ここに「私たちの歩んできた道」という短い一文がありますが、これは日本文学史上でも

類例がないと思われるのですが、先生は夫婦を個とした著作集を出されました。『壽岳文章・しづ著作集』全6巻を紹介するために自らお書きになった一文ですが、ここにおふたりの人生観が要約されているゆえに、意味深い一文と言えましょう。

この夫婦は、いつも自分の目で見、自分の目でたしかめて、媚びず、臆せず、正しいと信ずる一すじの道をこつこつと歩み続けてきたようである・・・昔のかしこい人は、自分のうちにささやく静かな小さな声を道標として、人生の航路を歩んだというが、この夫婦も、自分たちの生活信条にできるだけ純粹であろうとした。

(『壽岳文章・しづ著作集』案内文)

ここで説かれている「自分のうちにささやく静かな小さな声」、これはどのような声なのでしょう？これは私がことさら規定してしまうのではなく、ここにおられる皆さまがひとり一人考えるべき「ことば」ではないでしょうか。そのため、今日、私の話は示唆するにとどまるだけではないか、と思います。でも同時に、それでいいのだと思うのです。個人の生き方は押しつけるものではないからです。では、生きることについて、どのような発言がなされたか、具体的に検討していきましょう。

壽岳文章「洋の東西を問わぬ人の縁」

朝日新聞の同じ欄に、親子がそろって掲載されたという珍しい例がここにあります。その一文というのは、1990（平成2）年3月に載りました「自分と出会う」という壽岳文章先生の記事と、ほぼ10年後、1999（平成11）年2月に載った潤先生の記事であります。これを対照していくと、面白いことがわかってきます。ハーバード大学の理事であるケラーという著名なドン・キホーテ収集家がいるのですが、そのケラーからの依頼が先生のもとに届きます。これは、名作『ドン・キホーテ』を世界規模で収集して、書誌を編纂しようという壮大な計画でありました。日本におけるドン・キホーテ文献を蒐集して欲しいという依頼が文章先生のところへ舞いこんだわけでありました。ところが依頼は書誌だけではありませんでした。つまり美しい挿絵の入った和製の『ドン・キホーテ』制作依頼まで加わったのであります。

貴国人は古来絵画芸術にすぐれているのに、現行の貴国絵入り本に見るべきものが一つもないのは残念だ。こうなれば万事君に任すから、君が適当と思う現代の日本画家の、われらの親愛なる騎士（ドン・キホーテのこと）の名をはずかしめない作画がほしい、と言う。柳宗悦や河井寛次郎とも相談の末、白羽の矢を芹沢銈介に立てた。染色家の天分に恵まれた芹沢に不可能なはずはない。

ここで言及されている名前は民芸運動の中心的な指導者で、壽岳先生も自らこの運動の最先端に立たれたわけですが、このように先生の日常環境のなかで、何ら違和感もなく民芸の世界に生息しておられたことが伺われます。しかし、そうしたこと以上に、ケラーとのつき合いが、どのような性質であったのか、が語られている興味深い一節に私たちは遭遇します――

…なくて困っている物質があれば遠慮なくいつてよこせと次信にあったので、私の靴型を紙にとって送ったら、ボストンのチャイナタウンでやっと見つけたのがこれだ、と何足か送ってくれた親切も忘れない。京都大学で天文学を専攻した息子が戦後最初のフルブライト留学生としてミシガン大学に入ったと知るなり、所定の学費だけでは不自由だろうと月々若干の金員を送金してくれた。(壽岳先生らしいのは次のことばです) 洋の東西を言あげしないこの種の出会いをこそ、私は妙好趣と呼びたい。

(朝日新聞 1990年3月12日「自分と出会う」)

この「妙好趣」という言葉に先生の考え方が窺われます。「妙好人」とは浄土真宗で在野にある俗信徒のことを指しますが、「趣」も浄土真宗では死後における存在の状態を意味します。この言葉を先生はどのような意味をこめられたのか、深く考えさせられるところがあります。

そもそも先生の考え方にはたえず、仏教、浄土真宗、ブレイクが並置されていて、そうした先賢が書かれた行間を自由に行ったり来たりされるのです。たとえば、先生がまだ京都大学に籍をおいている頃に書かれた文章が載っている英語の学習雑誌『英語研究』(大正13年)をみますと、「ウィリアム・ブレイク 法悦のうた」(壽岳紫朗)とあります。「法悦」という言葉、「紫朗」というペンネームはブレイク本来の世界から大きく逸脱していると思われるのですが、よくよく考えてみると納得させられます。

先生は海外の学者の説を模倣・紹介に終始する英文学研究の在り方に疑問を感じておられました。柳宗悦と先生のブレイク研究は学説の模倣をことさら避けようとする傾向がありました。そのために最初は大いに誤解されましたわけです。つまり仏教の教義とキリスト教圏の教義が一致するわけではない、というわけです。確かに表面的にはそうでありましょう。しかし、その文章の冒頭を見ますとブレイクの顔のことが書いてあります。「ブレイクの顔にはどこか、わが国の古代の芸術家が木彫りした明王や菩薩の面影が似通う」という一文があるのですが、つまりたえず仏教文化においてロマン派の巨匠とを相対化して先生は見ていたことが、よく理解できるのです。あくまでも自己本位の立場は崩されませんでした。

壽岳潤「報われることの無い研究を続けて」

文章先生のこうした言葉を受けて10年後に壽岳潤先生のほうは「報われることの無い研

究を続けて」という文を、同じ欄に書かれています。こうした一文から向日庵ではどのような教育がなされていたのか、どのような人間と交渉があったのか、という内実がよく伝わってきます。

私は、小学生のころから星空に関心を持った。当時、大阪の四ツ橋にできたばかりのプラネタリウムに月替わりのテーマを毎回聞くために、一年以上、京都から通い続けた。原田三夫著の『子供の天文学』（太陽系の話をしている啓蒙書—引用者）と山本一清編の『天文学講座』が現在の私の天文学に関する知識の基本を形成したと思っている。

人文学者・英文学者であられた文章先生が、わが子に対しては、人文系に行けとかそのような助言は一切なさらず、理科系の天文学へ自由に進ませます。しかし、つらつら考えると、ウィリアム・ブレイクと天文学は関係が無いのかといえば、これまた表裏一体をなしていることが分かってきます。星を一方は理知的に、他方は感情的に見ていたのかもしれませんが。潤先生は文章の最後に以下のような言葉を述べられています。

「あなたは宇宙人の存在を信じますか」と尋ねる人をよく見かけるが、科学は信ずる、信じない、の問題ではない。意味のある設問を科学的に判断できることが分かった場合、それを追究するのが科学である。ちなみに、昔、ソクラテスは天文学の有用性よりも、その非実益性の重要性を説いたが、時の政治家は危険思想としてかれを排除したのだ。

（朝日新聞 1999年2月16日「自分と出会う」）

これは学者として毅然とした、並々ならぬ自信にあふれた「ことば」だと思います。壽岳潤先生は学者として発信をしたばかりか、いわゆる専門家とアマチュアとの架橋をたえず考えられていました。

では、このような一家が生み出した、つまり全体としての向日庵ですが、私たちの設立趣旨書に次のような一文があります——「向日庵は戦後の駐日英国大使・ジョン・ピルチャー……など海外からも多くの著名人が訪れる民間の国際交流の場でもありました」と。敗戦国の民間人の家に、戦勝国の英国大使がやって来る、この文言でしたらそのように読めます。しかし、私たちが解明しなければならないのはこの先なのです。

ピルチャーはケンブリッジ大学を出て、すぐに日本にあった英国大使館の通訳部門に応募します。その2年後、京都に移り日本の仏教を知るために、相国寺で2年間修業します。もっとも得意としたのは京都弁をあやつるという大変な親日家でもありました。つまり、この向日庵へピルチャーがきたということは、ウィリアム・ブレイクを話題にしたということもあるでしょうが、もっと大切なことは、壽岳文章先生と仏教に関する知見を分かち合ったという事実です。こうした共通の知見のうえに立って、時事問題から生活にまでわたる問題を語り合っていたのです。つまりこのピルチャーは英国大使で、日本、英国両国の橋渡しを

した人であります。こうした文化の読み換え、解釈という営為を考えていきますと、翻訳こそ文化の架橋作業なのです。では、次に翻訳という視点から壽岳家の人々を考えていきましょう。

翻訳の周辺

若き壽岳潤先生と父、文章との間でどのような交渉があったのか、それが、いかに現代的な意味をもつのかを、ここでその一端をお伝えしておきたいと思います。

戦後父はギルバート・ホワイトの『セルボーン博物誌』を岩波文庫のために翻訳しましたが、その索引の製作を私が引き受けました。父は索引の重要性を強調していましたが、私もそう思います……。

情報を伝えるための書籍の形態はほとんどかわっていきませんが、紙を使った本の形態は永遠に（人類の歴史で）不滅だと信じます。父が日本に定着させようとした造本の思想が、どなたかに引きつがれてゆくことを望みます。

（壽岳潤「父の思い出」『壽岳潤追悼集 地上の星座』）

今日、私たちはこの索引（インデックス）の大切さが目にみえる形で、日常生活に溶け込んでいます。それはインターネットの情報検索です。単語を見出しとして検索していくと、その内容を知ることがすぐにできます。つまり「目次」と「索引」は表玄関、裏玄関という以上に、どちらも相当な重要性があるのです。壽岳先生は索引がもつ重要性を痛いほどお知りになっていて、名著が翻訳されても、索引をつけようとしないう日本の出版界の悪しき慣習をよく嘆いておられました。潤先生の達意の英文を拝読しますと、父上からどれほどの恩恵を受けたのか、想像をついふくらませてしまいます。書齋にある書物を自由に使わせてもらうだけでも、子供には計り知れない勉学の機会となるのです。潤先生はあの森林のような書齋でどれほどの知見をはぐくまれたのでしょうか。

エコロジーの系譜

文章先生が訳されたギルバート・ホワイトの名著『セルボーン博物誌』の中に、英国詩人エドモンド・ブランデンが序文を書いています。ブランデンは東京大学の英文科教授で、多くの教え子から崇拜された教師でありました。そのブランデンは大変な酒好きで、壽岳先生から近くにサントリー醸造所があるから飛んでこい、という誘いに惹きつけられ向日庵を訪れたという逸話を残しています。ブランデンは原爆ドームの石碑に平和を祈る詩文を捧げますが、訳詩をつけたのが文章先生であります。博物誌の名著とうたわれる『セルボーン博物誌』に寄せられたブランデンの「序文」を文章先生がみごとに訳されています——

今また私は、ホワイト畢生のこの名著の、壽岳文章教授の手になった翻訳のよこび迎えられるのを、重ねてうれしいことに思う。これは、訳者の持つセルボーン風の親和感（自然への敬愛、一体感—引用者）や読書域（ブレイクにはじまる先生の専門とするロマン主義の知見—引用者）からみて、訳者にとってはこの上もなく打ってつけの企てである。私は彼が（壽岳先生—引用者）ホワイトに新しい読者圏を与えてくれたことを、心からの喜びとする。なぜなら、ホワイトの示す態度の重要さは、ただ、文学の世界だけにとどまるものではない。

古典が最適の訳者をえて古典としてよみがえる瞬間です。そして、最後に、この名著が何を訴えているのか、ブランデンの手によって説かれています。この結句は、人類の未来に対するひとつの託宣とも受け止めることができます。

今後人類が生き残ってゆくかどうかは、ひとえに爾余の自然に対するこの態度にかかっていると一言いっても言いすぎではないのである。

（エドモンド・ブランデン「序文」壽岳文章訳『セルボーン博物誌』）

私たち日本人の先祖は、一寸の虫にも五分の魂が宿るといって、生命を慈しみました。ところが、いつしか日本は産業大国になって生きとし生けるものを尊ぶ自然観を捨ててしまい、公害をもたらすような産業の邁進をはかっていき、はかり知れない代償を後世が支払うようになってしまいました。これを大きな教訓にしなくてははいけません。

しづ夫人とハドソン

さて、英語を通じて翻訳による文化の橋渡しがよく具現化されるのは、夫人の翻訳を通じてであります。夫人は大学などに行かずに文章先生から直接に英語を学ばれたと聞いています。では、しづ夫人はどのような作品を翻訳されたのでしょうか、またその意義はどこにあるのでしょうか。しづ夫人はこの向日町の竹林を愛でて、何度も何度もその美しさ、雄勁なしなやかさをお書きになっています。そうした一文を読むにつけ、私たちは向日庵の人たちが、いかなる自然観でいたのかがよく理解できます。

W. H. ハドソンの『はるかな国 とおい昔』は今日でも版を重ねている名著中の名著であります。然るべき訳者をえて、原作がどのようによみがえるのか、典型的な例をここにみる思いです。巻末にあるハドソンの文章は以下のごとく訳されています。漢字とひらがなの割合の絶妙さがひとつのリズムを奏でて、読者を思わず引き込みます。凡百の訳者ではこのようにはならず、表面をなぞらえるだけで終始してしまいます。

自然との交わりがもたらす幸福は、決して失われるものではなく、私がお話しした、あの機能のおかげで、私の心に及ぼす力を、だんだんと増し加え、再び私のものとなるのでした。(一度自然のもとで感化されたら、私たちが逆に養育されていくのだー引用者)だから、長い長い間、自然との交わりを断たれて、ロンドンに住み、貧しく、友もなく、病気がちの日々を送らねばならなかった私の最悪の時代さえ、なお、生きていないよりは、生きているほうが、ずっとずっと、はるかによいと、私はいつも感じる事ができたのです。

(ハドソン、壽岳しづ訳『はるかな国 とおい昔』)

自然はかくのごとく生きる力となり、自然は感化力を私たち人間に及ぼしていくわけです。多くの歳月を超えて、初版から版を何度も重ねていき、今日でも岩波文庫のラインアップとして輝いているという事実は、いくばくか誇りとしてもいいのではないのでしょうか。

壽岳文章と戦争

しかしこのような自然というものが、もっとも相対化された姿で示されるのは、言うまでもなく戦争であります。戦争という未曾有の出来事に、壽岳先生はどのように向き合ったのでしょうか。

1936(昭和11)年7月7日、日華事変が起りました。その年に神戸女学院・関西学院大学の共催というかたちで、日本英文学会が開催されました。これは英文学者、英語教育者がつどう学会で1,000名くらい会員を擁していて年一回、研究発表と総会を開くわけですが、その折の所感を記した先生の一文が残っています。

私自身の関与したものでは、第二次世界大戦の危機が刻々と日本へも迫った年次に、関西学院大学で大会が持たれたとき、英語聖書の各版を集めて展示し、隣の神戸女学院でも協賛の形で珍しい讚美歌集を出してもらった。その目録を作ったのは私だが、聖書を選んだことに平和への願いをこめての、一つの resistance でもあった。ところが、身をキリスト教プロテスタント系の学校に置きながら、同時に大会の名において、英米二国に対し、日本の国策の正しさを声明する決議文を送ってはどうか、などと言い出す会員もあり、私をうんざりさせた。

(壽岳文章「思い出を一つ二つ」『日本英文学会 五十年小史』)

こうした参戦を是認するような発言をまえにして、何のための学問かと先生はいぶかしく思われたはずです。そして、1942(昭和17)年、すでに戦時下になっていますが、石田憲次という壽岳先生がいたく尊敬していた京都大学の英文学科主任教授は、昭和17年の英文学会の挨拶のなかで、次のような発言をしています。

戦時下における英語英文学者は、かの潜水夫が水中深く潜って真珠をとって来て人に示す態度、僧侶が俗縁を断って精進する意気込みをこそ堅持すべきであり、之に対し世人は寛大な眼で我々の研究の成果を待つ態度こそ望ましい。

(石田憲次「昭和 17 年英文学会会長挨拶」『日本英文学会 五十年小史』)

研究者は世俗から離れた存在で、特権的な位置にあり傍観するだけで眼下におこなわれている戦争を非難するような態度は微塵もうかがえません。これはきわめて尊大な態度だと思います。机上の空論も甚だしいと思うのですが、壽岳先生は書籍展示という沈黙に近いレジスタンスを示されました。こうした反戦の形もあるのです。向日庵私家版もそうですが、先生は愛する書籍を通じて反戦をとなえました。だが、それは先生を戦時中、ある意味で非常に孤立化させていく一面ではなかったかと想像します。

壽岳文章「民芸品と平和の問題」

戦争という緊急の問題を民芸運動の関連で見えていきますと、「民芸品と平和の問題」という一文が書かれています。人間が生きるうえで何を第一義にしなければならないかという意味で、きわめて重要なので全体を読んでみましょう。

そこで私は言いたい。民芸運動は、それを支える堅固な土台として、平和を守りぬく強い信念に徹しなくては、本物にならないのではないかと。日本が再軍備を始めても、それは一向苦にならないで、いわゆる民芸品をせっせと集める人。戦争を必要悪だと認め民芸品の蒐集に何の矛盾も感じない人。そういう人は、徹底した民芸運動には無縁であるばかりでなく、民芸の理念を混乱にみちびく実証者の役目さえはたすことになるだろう。さらに一步進めていえば、民芸品の美しさはわからなくても、全身全霊を平和の確立にささげている人があれば、私はその人を、民芸品の美しさはわかっても、平和の確立に無関心な人よりも、はるかに高く評価し、はるかに深く尊敬する。

(壽岳文章「民芸品と平和の問題」『柳宗悦と共に』)

こうした問題と関連するのですが、文章先生は「向日庵版」というプライベート・プレスを起こされていましたが、戦後落ち着いてきて、紙の配給も潤沢になり、経済状態が復興した頃に書かれた文章があります。1951 (昭和 26) 年に『日本古書通信』という愛書家の人たちが読む雑誌に投稿された一文です。ここでも趣味性におぼれてしまい、生きる目的に何ら関心をむけない人々を糾弾しています。

最後に、私は日本の愛書家と称する人々に、絶望を、否、ときには憎悪すら覚える。彼

らは、一般に蒐集家のもつ共通の弱点から免疫でない。人生において何がもっとも大切であるかの反省は、棄にたくも見出せないようなタイプが、この蒐集家人種には多い。美しい書物を数多く集めることは、無邪気な道楽で、何もさしつかえないではないかと言われればそれまで、それにとやかく干渉するつもりは毛頭はもっていない。ただしかれらを軽蔑することは、私の自由である。私の軽蔑する人種が大部分を占めている愛書家を目あてに、私版を出すことに意義を認めないのも、また私の自由である。これをもって向日庵私版を復興しないことの弁とする。

(壽岳文章「なぜ向日庵私版を復興しないか」『日本古書通信』1951年)

戦後日本に起ってきた、戦争に対する無反省な態度を先生は非常に訝しく思っておられました。ほとんど愛書家の手に渡ってしまうような私家版の存在を認めることはできない、とよくこぼされていましたが、「向日庵本が書店のショーウィンドーで麗々しく飾られていた」という話を聞くのを、もっとも嫌悪されていました。

向日庵の人たちは、「ことば」を媒介に伝えることを、非常に大切にしている人たちでありました。だから壽岳家の人々は「ことば」というものが、戦争に関与する危険性に対して、きわめて敏感でありました。

壽岳章子と言葉

壽岳章子先生には、『日本語の裏方』というエッセイ集のなかに印象深い文章があります。日本の文学者の多くが「大東亜戦争」を賛美しました。「大和魂」でもって高揚し、挙国一致を礼賛してやまず、散って英霊となるのが、日本国民の務めであるということがまことしやかに謳われていました。高村光太郎、武者小路実篤なども愛国心あふれる詩や文章をものしました。作家、文学者が戦争に加担した現実を踏まえて、章子先生は思慮のない情緒への耽溺がいかに危険ものであるのか、といった警告を発しています。

戦争の性格がどのようなものであれ、戦争遂行のためには、「詩」の持つ感化性が大変必要である。兵士は辞世をよみ、銃後の世界ではまた戦争文学の大きな部門として、和歌の類が華やかな振舞いをみせた。愛国百人一首が定められたり、著名作家による文集が出版されたりした。現在の歴史的視点から見れば、甚だ大きく深刻な問題を負っているいわゆる大東亜戦争というものが、どのように甘くごまかされたか、情緒が一人歩きする時、いかにお人よしで無防備であるか、そしてなぜそれ故に罪さえ犯してしまうのかということが、ありありとわかる資料に、それぞれがなっている。

日本文学に潜在する「滅びの美学」というものを、じつに危険なものだと、戒めているわけでありました。最初この本は講談社から出ました。そして10年後、需要があったのか、も

う一度、創拓社から出るわけです。その時に書き添えられた「あとがき」が非常に印象深いので、一緒に検討してみたいと思います。

もともと、歳月の経過が現在の私の思考に何の変化も起こさなかったと言い切れもしない。たとえば本書中の佐藤春夫（軍国主義を賛美して、南方へ出征していく兵士たちを鼓舞する和歌を作り、麗々しくこうした本を出版したことに、章子先生は強い怒りを覚えた一引用者）への言及などは、少し手厳しすぎたなどとは現在思っている。彼自身の戦争中のいらだち、怒りなどを知る機会があって、要するに佐藤春夫はいささかお人好しだったのだと思う。しかし、軽々に言っただけでは、してはならぬことが人生にはあるのだとの思いもまたいっそう近頃の私には強いのである。それゆえに、敢えて手を加えず、原形のままにした。いずれにせよ、再びこの書を世に問うことができ私には嬉しい。私の「裏方」好きはますますその度を加えているからである。

（壽岳章子『日本語の裏方』創拓社版「あとがき」）

こうした言葉を通じての発言、メッセージというものが、向日庵の中から、親子二代にわたり強く発信され、父娘の発言が共鳴し時代の声になっていったのです。お二人が共著で出された幾冊かの本にはほのぼのとした親子の情愛のなかに、何か強靱なゆずらない姿勢を垣間見ることができます。

「向日庵」の意義—建築と思索—そして未来をつくる

では最後に、向日庵が発した内容と、それを包む建築との関連に移っていきましょう。つまり向日庵が建築史から見て、これまで話してきたことと、どのような接点をもつのかという問題を検討していきましょう。

向日庵は先ほど言及した郊外住宅運動の一環にあり、そこでは住宅改良、とりわけ女性の場である台所の改良が、声高に要求されていました。西双岡住宅展覧会が催され、「1500円で瀟洒な住宅を」と銘うたれた惹句が衆人の関心を集めました。会場に住宅が三軒、熊倉工務店から出品されていますが、当時の目録をみますと、向日庵とよく似た住宅も展示されています。ここに熊倉工務店の熊倉吉太良の建築に対する見解が紹介されている文章がありますのでご覧ください。

熊倉吉太良は、後に「思いますに室温の調節、換気、照明、日照など何れも機械文明に頼り過ぎ、自然に逆らう人間生活の本質を忘れたかのような、見せる家、見る家が増えつつ在ることは悲しいことです。匠の道に今こそ温故知新、不易流行の不易、すなわち伝統を生かし流行を即ち現代性を生かし盛りあげることに思いを寄せ、技と徳を磨きつつ在る棟梁たちとその後継を目指す若人たちの御健闘を祈るものであります。」と語

っている。吉太良の「自然に逆らう」ことのない住宅への志は、科学的な目で日本の自然に適した住宅を模索する藤井（藤井厚二引用者）の姿勢から大きな影響を受けたものであった。吉太良は、戦後京都民芸協会の会員となった程、民芸を愛好していた。吉太良と民芸との出会いはどのようなものだったのだろうか…。向日町（現、向日市）の壽岳邸は向日庵と名付けられ、壽岳の私版本製作の本拠地となった。壽岳邸は、真壁造の和風の外観を現している。

（石川祐一『近代建築の夜明け 京都・熊倉工務店一洋風住宅建築の歴史』）

自然と共生していこうとする建築家の姿を壽岳一家のそれと重ねることができるわけですが、通気性がすぐれた家屋というような矮小化した姿で向日庵をとらえるのではなく、「自然」との共生という大きな環境論の枠組でとらえるべきであると信じます。柳宗悦は、河上肇とともに壽岳先生にもっとも影響力を与えた人物です。反戦、非戦に対する強い思いも共通しています。この30年、柳自身が研究対象として、もっとも過酷な局面に立たされました。ひと昔まえは、ひたすら、柳を賛美する方向で評価は進んでいましたが、その反動か、逆に柳批判からはじめなければならないような情勢が少なからず続きました。しかし、そうした渦中に壽岳先生の向日庵をおいてみますと、私たちはその民芸運動研究にまつわる議論、論争、批判そして、研究の進捗から多様な知見をえることができます。たとえばイギリスのクラフト運動がはらんでいた諸問題と重なってくる部分も無視しえませんが、コブデン＝サンダースンが私家版制作で突き当たった問題を向日庵本もかかえもっています。今後はこうした諸議論が盛んになってきて、壽岳家がはらむ問題はより活性化されていくでしょう。またそのような議論が起こらなければいけないでしょう。

先ほどお配りした資料の裏面をご覧ください。向日庵には民芸の調度品が多くあります。しかし、私はここで誤解を恐れずに申し上げますと、向日庵をこの民芸調の、倉敷にあるような民芸館、また駒場にある日本民芸館を模倣するような施設にしてはいけないと思います。もう一歩進めて言いますと、先生と民芸のつながりを否定しようとするのではなく、むしろ逆ですが、先生が棚の上に民芸の壺をおいた、皿を置いた、そのお気持ちはどうなものであるか、昨今の言葉で言えば、あえて「忖度する」ことが、私たちの大きな仕事だと思います。高名な芸術家の作品が構えることなく置かれているのですが、作品そのものに何を探り、何を先生が求めていたのか、といった根本的な問題を問わなければ意味がありません。また、そうした態度をもたずして先生が発した問いとは対峙できないと考えるわけです。

たとえば、向日庵では句会をはじめブレイク詩をめぐる読書会、ハドソン作品の輪読会、和紙の創作教室、翻訳ワークショップや天文学講話など、多彩な催しが展開されることが可能でしょう。しかし、民芸調のつくり敷かれた畳の隅から何かが湧き上がってきてくる気配を感じます。最初に申し上げた「自分のうちにささやく静かな小さな声」、この小さな声はか細いがゆえに容易に消えてしまいます。そして、わかりやすいものだけが残ってしまうでしょう。だが、文化史の追究、営みはこの消えてしまうか細き跡をたどっていき、その跡

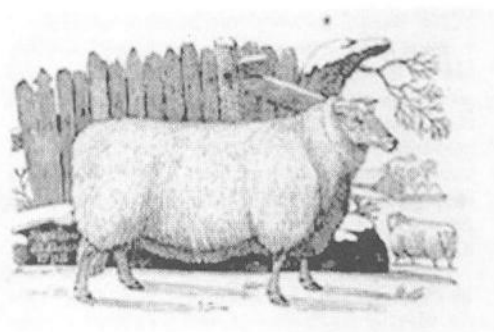
を未来に継いでゆくことこそが、大いなる仕事となってくるのではないのでしょうか。

つまり壽岳一家がお住まいになっていた向日庵は、動態保存と同時に発信の場であらねばならないと信じています。ここに出席して下さっている皆様が向日庵の中に入って、「自分の内にささやく静かな小さな声」に耳を傾けて、それぞれが「自分の声」で発信する、それが、私たちに託された、壽岳先生から継承する一つの、紡ぎだされた向日庵の糸ではないのでしょうか。そして、この糸を次の世代に継承していくことこそが、『向日市史』にうたわれていた精神にほかならないのではないかと私は考える次第であります。

私の拙い話を長時間にわたり、ご静聴いただきありがとうございました。

追記

上記の講演録は、詳しい注、必要な修正・加筆のうえ、甲南大学総合研究所から2018年1月に発行された『甲南リベラリズムの源流を求めて』（甲南大学総合研究所叢書132号）に所収されている。



寿岳文章からはじまる杉原紙の里

多可町立那珂ふれあい館館長 安平 勝利

私は、兵庫県多可町で文化財のいろいろな調査を担当していますが、特別和紙に詳しいわけではありません。ただ昨今、ユネスコで和紙が世界遺産に登録された事もあり、あらためて町内でも和紙を見直そうという動きが出てきました。

私どもの町は、杉原紙を発祥した町で、もう一度杉原紙を見直そうと現在再調査を行っています。そのももとのきっかけとなったのは、今日お話しする寿岳先生です。寿岳先生がはじまりで、多可町の杉原紙がはじまっています。そのことを少しお話しさせていただきます。

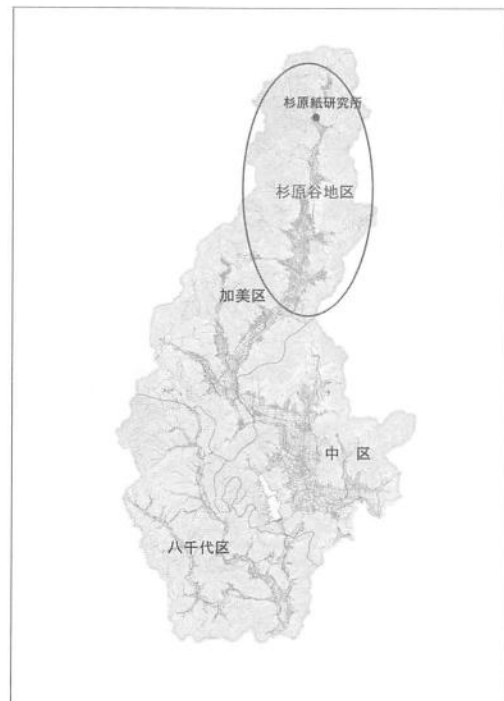


多可町位置図

1. 兵庫県多可郡多可町

兵庫県多可町は、兵庫県の真ん中に位置し、とりたてては何もありませんが、まわりは自然がいっぱいで、町の80%は山です。播磨の北側、但馬・丹波と境を接している播磨最北端に位置しています。人口は21,461人、7,531世帯(平成29・7・1現在)の田舎の町ですが、それぞれの町から高い文化を生みだしていることが、合併して初めてわかりました。旧中町は日本酒の「山田錦」の発祥の地、旧八千代町の野間谷村は今日の「敬老の日」が最初にはじまった地で、旧加美町は杉原紙の発祥地。こうしてみると日本の食文化、精神文化、和紙文化という日本の伝統文化に大きな影響を与えた異なる三文化の発祥の地で、この三つの町が合併して2005(平成17)年に多可町となりました。

杉原紙の発祥の地は、加美区の杉原谷地区で、



杉原谷地区位置図

平安時代には藤原摂関家の荘園である梶原庄であることがわかっています。杉原紙はずっとこの地で漉かれて盛んになっていくのですが、中世期には、杉原谷地区だけでなく、中区・八千代区からもたくさんの紙を貢納しているので、多可町全体でかなりの紙を生産、出荷していたことがわかっています。



杉原紙の里

地図の赤い点のところに、現在でも杉原紙を漉いている杉原紙研究所が設立されています。紙漉きをしている建物と、体験学習や特産品販売を行っている建物がありまして、手前の黒の建物が寿岳先生に寄贈いただいた資料を展示している「寿岳文庫」です。これらが一つにまとまって、杉原紙の里の拠点となっています。

2. 杉原紙

杉原紙について簡単にお話します。

杉原紙についての記述は、たくさんの文献に出てきますが、「梶原紙」「杉原紙」更に変化して「すいはら」など、愛称も含めていろいろな呼び名があります。

杉原紙が最初に歴史上の資料に出てくるのは平安時代後半です。関白藤原忠実が日記『殿暦』の中で、永久4（1116）年の条に「梶原庄紙」と記載していて、これが歴史文献の中では一番初めにでてきます。以後、現代まで脈々と杉原紙は続いています。時代によって紙質は変わっていきますし、またある時期には途絶えたこともあります。かろうじて紙漉きをやっていた人の記憶をもとに復活させて、現在まで約900年間も長く続いています。いわば「超お化けロングヒット商品」で、これだけ長く需要が求められてしている商品はないのではないかと思っています。

中世から近世の文献の中をみていくと、杉原というのはたくさん出てきており、日本の産地名のついた紙の中では一番多く出てきます。使われている層も、貴族からはじまり、武家・寺院など、公験文書（公文書）、書状文書、印刷料紙として、また贈答品、土産物として幅広い層にたくさん使われています。贈答用の一束一本という、紙を贈る時のスタイルがあるのですが、このスタイルも杉原紙からはじまったといわれています。

江戸時代になると、井原西鶴、近松門左衛門の文芸作品の中にも「すいはら」が使われています。当時の人はそれを読むと、「すいはら」と出てくるとこんな紙だなと分かるく



一束一本

らいに普及していたようです。ちなみに、「ホッチキス」はもともとステープラーが商品名ですが、ホッチキス社が創った商品のステープラーの人気が出て広がったため、ホッチキスと呼ばれるようになったのですが、同じように、「すいはら」「すぎはら」も、固有名詞から普通名詞に変わっていくようになって、和紙の代名詞のような使われ方がされます。そうすると、他の地域でも杉原紙をまねして製作するようになるので、室町後半になると、発祥の地、杉原谷だけでなく、各地で〇〇（産地名）杉原紙がつくられるようになりました。

このように、杉原紙は広く普及していきますが、あまりに広がりすぎて、どんな紙かなかなか定義しにくい紙、実態がつかみにくい紙にもなってしまいます。大正期になると「まぼろしの紙」と言われ、どこでつくられはじめたかすらわからなくなったようです。

明治期になりますと、洋紙の流入、産業構造の変化によって、手漉き和紙が衰退して紙漉きをする人がいなくなってしまいました。その後、昭和45年に杉原紙は復活を遂げますが、途絶えてから復元するまでに寿岳先生に深く関わっていただきました。その後の流れをみますと、資料にありますように、昭和47年、杉原紙研究所設立、昭和58年、兵庫県重要無形文化財に指定、平成5年、兵庫県伝統的工芸品となり、現在でも杉原紙は杉原紙研究所で漉かれているというのが杉原紙の大まかな流れです。

3. 杉原紙研究史

本題の杉原紙の里、杉原紙のはじまりについての研究史になります。

まず大正期以前の時代には、杉原紙のはじまりは鎌倉時代だと考えられていました。その理由は高野山の文書（『高野版印板目録』正安2（1300）年の中に「印刷に使う料紙は梶原紙」という記載があります。

もう一つは、鎌倉時代の『鎌倉年代記』の中に、「承久元年（1219）から杉原紙が流布し始めた」とあります。この二つの文献をもとにして、大正期以前には、杉原紙は鎌倉時代からつくられはじめたと考えられていました。

では、どこでつくられはじめたと考えられていたか。当時の段階では、はっきりした資料はまだ発見されていませんが、もともと南北朝、室町、江戸時代に書かれた地誌、辞書類の中に「播磨梶原で作られた紙」、あるいは「播州杉原村より始まった紙」という記録があり、播磨の国の「多可郡杉原谷より生まれた」ということが書いてあります。ただそれらが編纂されたのは南北朝期以降のことで、鎌倉時代に実際につくられていたという直接的な記述はありませんでしたので、決定的な資料にはなりません。したがって、当時はもう一つの説がありました。美濃国揖斐郡に東杉原というところがあり、ここが発祥地という説です。根拠として美濃はもともと古代より優秀な紙の生産地で、播磨は二番目くらいです。この美濃紙の主生産地、垂井に近いところに杉原というところがあります。美濃は古代より製紙が盛んで、官営製紙所もあったので、杉原紙はそこでつくられたのではないかという説でした。

次に大正を過ぎて昭和に入りまして、紙の研究が本格的になります。寿岳先生もそうです

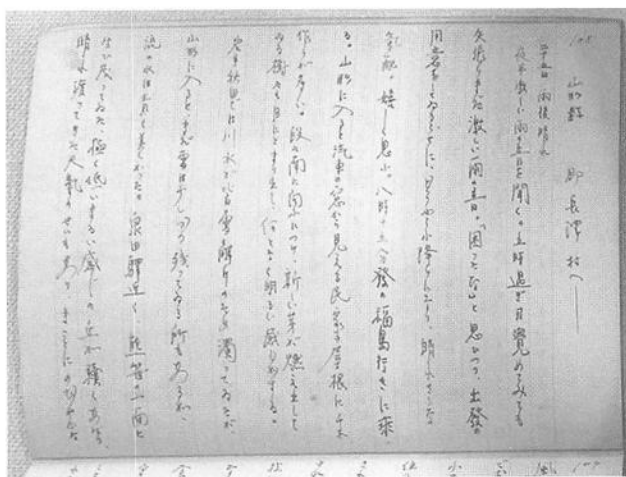
し、新村先生、堀部先生などが日本の和紙研究の先駆者になり、この先生方が活躍されるのが昭和の初期以降です。

昭和 11 (1936) 年、小野晃嗣 (1904-1942) 先生という歴史学者が「中世に於ける製糸業と紙商業 (上)」という論文を『歴史地理』67 巻 4 号に投稿されました。これは紙だけでなく、いろいろな中世の流通について述べられている論文ですが、その中で中世期に播磨が杉原紙の主産地であろうと唱えられています。播磨の中でも多可郡杉原谷が、杉原紙の原産地ではないかと提唱されています。直接的な根拠資料は、まだこの時代には発見されていませんでしたので、先述のように鎌倉時代くらいに始まり、美濃の杉原か播磨の杉原かもわからないという時代にこの論を唱えられます。

翌年、昭和 12-14 年 (1937-1939)、寿岳先生と奥様、静子 (しづ) さんが、全国の紙漉産地をまわられます。その成果が『紙漉村旅日記』(昭和 18 年) にまとめられています。その時に、百カ所以上の産地をまわられ、集められたサンプル資料が、先ほど紹介した寿岳文庫の中に大切に保管されています。先生方は、紙漉場をまわられるとその日に取材したことを、その日のうちに整理されています。その時の日記やメモも残っています。この記録をまとめたものが『紙漉村旅日記』です。

その後、昭和 15 年 (1940) 8 月 2 日から 3 日にかけて、寿岳先生と新村先生が杉原谷村へ来られます。その様子が『和紙研究』第 7 号に掲載されています。新村先生はこの時「杉原紙源流考 (上)」をこの和紙研究に載せられます。そこで、この段階では、まだ高野山の文書や『鎌倉年代記』の資料しかありませんが、この辺の拠出資料を研究され、その中で杉原紙がどこでつくられたかを検証され、播州杉原谷で作られた可能性が強いということを論文に書かれました。

一方寿岳先生は同じ『和紙研究』の中で、「杉原谷紀行」という紀行文を掲載されます。この中では、多分、この地に来られて、ここで杉原紙がつけられたと体感されたのだですね。



調査メモと『紙漉村旅日記』向日庵本 (昭和 18 年)

一番大きいのは研究者の勘でしょう。「杉原谷紀行」を改めて読んでいただくと、当時の情景が目に浮かぶような表現で、非常に面白いものです。

どんなことが書いてあるかといいますと・・・・・・・・。

まず京都駅で、新村先生と待ち合わせます。「珍しくも洋服の新村先生が、もうプラットフォームに入って、颯爽と、しかもにこやかに歩き廻っておられる」という書き出しではじまり、「汗に苦しめられる夏の旅行を最も不得意とする私の方が、これでは先生のお世話になるかも知れぬ」と続きます。8月2日、7時22分に京都駅を出発されて、播但鉄道で多可郡の鍛冶屋駅に11時30分に来られますが、ガソリンカーに乗って約4時間の旅でした（現在は1時間30分に短縮されました）。駅からハイヤーに乗って杉原谷へ来られ、当時の村長と小学校の校長、郷土史家の藤田貞夫さんの三人に会われます。

ここで、地元でかつて紙漉きをしていた職人の人達に聞き取り調査をされます。このお二人の先生方の来村が、地元に大きな影響を与えます。例えば郷土史家、藤田貞雄さんは、この時、新村、寿岳両氏に会ったことをきっかけに、紙漉きの研究、和紙の研究へと進まれ、杉原紙を深く研究されることとなります。聞き取りをされた紙漉経験者、宇高弥之助さんですが、後に杉原紙を復活させる時、この方の記憶をもとに杉原紙が復活していきます。従って8月2日というのは、多可町にとっても非常に記念すべき日ということになります。

その日は村長の家に泊まれ、翌日は近隣の寺社等をまわり、最後は8時半を過ぎた頃に向日庵に着いたところで、杉原紙紀行は終わっています。

当時先生方が見られたであろう杉原谷の風景を紹介します。

杉原谷は、両側に山が迫って、真ん中に杉原川が流れ、その両側に田んぼがある、山あいの中の小さな谷平野です。主な産業は農業です。先生方が泊まれたのは、もともと大庄屋であった村長の家。この家は今でもきれいに保管されています。翌日行かれたお寺（禅宗）でも、寺に残っていた杉原紙を集められています。さらに地区の神社に行かれて、そこに保管されている室町時代の棟札をみられます。棟札には「梶原本庄」という墨書があります。これが後々、撰関家の荘園、「梶原庄」である一つの根拠になるのですが、このように杉原谷地内を見学されています。

こうしたことを経て、同年に寿岳先生は「杉原谷紀行」、新村先生は「杉原紙源流考」上編を、さらに翌16年に、寿岳先生は『和紙風土記』を出版され、杉原紙は播州多可郡杉原



杉原谷の風景

谷が発祥だろうという説を発表されます。ただし、まだ決定的な資料はこの段階では、出てきていませんでした。

それが出てくるのは、昭和 18 年 (1943)、雑誌『清閑』(第 16 冊)において、堀部正二さんという近衛家の陽明文庫の囑託をされていた方が、『杉原紙割記』という論文を発表されます。これに新しい発見資料を紹介され、杉原谷が杉原紙の発祥地である動かぬ根拠を示されます。発見された資料というのが、まず『殿暦』という関白藤原忠実の日記の中に「相原庄紙」というのが出てくる。それから『兵範記』の紙背文書の中に杉原紙についての記述がみられる。この二つの資料によって、それまで杉原紙のはじまりは鎌倉時代と言っていたのが、平安時代まで遡るとということがわかった。さらに近衛家の荘園目録とか、近衛家関係の文書をつき合わせて考えると、そこで言う「相原庄」は、播磨多可郡の相原庄であることが断定され、杉原谷が杉原紙の発祥の地であると判明したのです。

『殿暦』(資料①)にはどんなことが書いてある

かという、永久 4 年 (1116) の条に、藤原忠実が息子、娘に、藤原家に代々伝わる家宝と一緒に相原庄紙百帖を添えて贈った記されています。なにかの法要があつてその時に、娘の姫君には、先祖伝来の牡丹唐草を施した螺鈿の絢爛な調度品とともに、相原庄紙百帖を与えた。また長男の忠通、この人も後に関白になるのですが、この人にも同じように装飾を施した調度品と一緒に相原庄紙百帖を与えたと記載されています。ですから、少なくとも平安時代の終わり頃には相原庄紙、すなわち後の杉原紙と言われる紙があつたということがわかります。

それからもう一つ、『兵範記』(資料②)で、平信範という人の日記です。昔は、紙は貴重なので、手紙や書状などの裏面は再利用することが多いのですが、その再利用された手紙の文面に杉原紙についての記載がありました。仁安 2 年 (1167) 冬之巻の紙背文書として、「今年の杉原紙の出来はあまり良くなかった。だから半分ほどは返した。ただその中のましなものを選んでお経の料紙に使います」とあります。このように、平安時代の後半期の杉原紙についての記述が新しく発見されました。

さらに近衛家の荘園目録を見ますと、播磨国相原庄は京極殿の領地とあります。京極殿とは、『殿暦』を書いた藤原忠実の祖父・藤原師実に当たる人ですので、少なくとも平安時代



清水西宮神社棟札 (応永 17 年)

の中頃には播磨国梶原庄というのは、藤原摂関家代々世襲の荘園であったということがわかります。これは多可郡杉原谷のことを指しています。また、近衛家のいわゆる家計簿みたいなものですが、『後法興院雑事要録』という書物の中には、梶原本庄や新庄から杉原紙をたくさん近衛家に貢納している記事があります。この辺の資料を勘案して、播磨国杉原谷から杉原紙が生まれたという説を堀部さんは唱えられました。

これはその人物関係図（資料③）です。忠実のお祖父さんの頃から、播磨の梶原庄が、藤原摂関家の荘園であったと書いてある。更には、摂関家三、四代に仕えた家司の日記の中に杉原紙のことが出てくるのです。すなわちこの時代の摂関家周辺の人々の資料の中に、播磨国梶原庄でつくられた梶原庄紙の記事が記載されていることがありまして、杉原紙の発祥は播州杉原谷であるということ、少なくとも平安時代の終わり頃には杉原谷でつくられていた紙であるということが確かめられました。

先ほど申しましたように、堀部氏は『杉原紙割記』を発表されるのですが、没年をみると雑誌『清閑』に発表された翌年に亡くなられています。そのことを御存知だった新村出先生が、改めて『和紙研究』第12号（昭和20年1月）に、堀部氏の『杉原紙割記』の論文を再掲載されます。

こうした研究成果を契機に、戦後の復興していく時代、地元杉原谷でも『杉原紙発祥の地である』という意識が高まり、昭和41年（1966）に『杉原紙発祥之碑』が建立されます。現在、杉原紙研究所の横にその碑があります。この碑は、題字が新村先生、撰文は寿岳先生によるものです。原文ではありませんが、要約を資料につけさせてもらっています（資料④）。そこにはこの杉原谷が杉原紙の発祥の地であるということが簡潔に述べられています。



『杉原紙発祥之碑』

昭和42年（1967）には、寿岳文章先生が、日本の和紙研究のバイブル的存在である『日本の紙』を出版され、この中でも杉原紙について述べられています。昭和45（1970）年、新村先生と寿岳先生から刺激を受けられ杉原紙を研究された藤田貞雄氏は、『播磨の紙の歴史 杉原紙』という本を出されて、今回お話した新村、寿岳、堀部各先生の説をまとめられ、杉原紙の歴史というものを体系化され、簡潔にまとめられておられます。郷土史研究家と言いつつかなり専門的に調査研究された本になっています。杉原紙が播磨の杉原谷で生まれた紙であるという説が確立していきます。地元の住民（加美町）の中にも、杉原紙を発祥したという誇りと、それを途絶えさせてはいけない、継承して保存していこうという意識が高まっていきます。当時の町長の言葉を借りると「小さな町の大きな

文化事業」を行う。そこには住民と行政が一体となって杉原紙を守っていこうという強い意識の広まりがみられます。こうした中で、昭和45年（1970）に杉原紙の技術が復活します。その復活の契機となったのは、やはり寿岳先生や新村先生が杉原谷へ来られて、地元の人と顔を合わせて調査をされたことが始まりとなって、杉原紙の復元へと繋がっていきます。昭和47年（1972）には杉原紙研究所設立、昭和58年（1983）には県重要無形文化財に指定、平成5年（1993）には兵庫県伝統的工芸品に選ばれていきます。

復活後、地域の住民の杉原紙に対する思いや誇りから、楮の一軒一株運動、「一軒に一本楮を植えよう」という運動がはじまり、小学校の卒業証書は研究所に行って自分で漉いた和紙でつくる活動が行われていきます。

平成8年（1996）には寿岳先生の長女の寿岳章子氏に、杉原紙研究所の名誉館長を務めていただくことになり、それがきっかけで、寿岳先生のたくさんの和紙関係の資料を寄贈いただきました。これらの資料は『寿岳文庫』として、平成12年（2000）に設立された『和紙博物館』において大切に保管されています。

ですから、杉原紙のお話をする際には、多可町は寿岳先生とは切っても切れない間柄になっています。現在では、杉原紙は、中学校の社会の教科書にも載っていますし、模擬試験にも登場したりしています。

近年、和紙技術がユネスコの世界文化遺産に認定されまして和紙が注目されていますが、多可町でも、あらためて地元発祥の杉原紙への思いが強くなっています。2020年には杉原紙復活50周年を迎えます。

昨年度から、寿岳先生や新村先生、藤田氏の研究以来、あまり進まず止まっていた杉原紙の研究に新しい手法を取り入れて、もう一度、技術や歴史を再検討しようと、杉原紙総合調査委員会というのを立ち上げて調査を行っています。その中では新たな成果も少しずつ出始めています。それらは杉原紙が日本の紙文化に非常に大きな影響を与えてきたことを示しています。平安時代からずっと続いている紙の名は『杉原紙』しかない。この杉原紙に着目された新村・寿岳両先生の研究があって、現在の杉原紙があります。

寿岳先生から始まった杉原紙、手漉き和紙への思いというものを、さらに継承発展させ、杉原紙の里としてさらなる飛躍をめざしていこうという動きは、現在も繋がっているということをお話させていただきます。どうもありがとうございました。

[文字起こし：長尾史子]



杉原谷村来村時の新村出氏（右端）、
寿岳文章氏（左から2人目）

資料①

『殿曆』永久四年（1116）七月十一日の条より

『十一日壬寅天晴 早旦参院 依召参御前 数刻候
退出 供養仏 正了智、導師永緑法印
今日姫君・内府各奉倉納、各調度一具 鞍一具

姫君倉納

調度一具

沃懸地 牡丹唐草 加仮螺鈿

件調度 宇治殿令奉四条宮 從宮給云々（予？）也

鞍一具 銀地草手 予新調也

梶原庄紙 百帖

内府倉納

調度一具

沃懸地 螢繪 螺鈿

件調度 京極北政所御調度也 大殿初令渡北政所

給時被立之 北政所給予也 吉事時必立之

鞍一具 水清地 件鞍家相伝宝物也

梶原庄紙 百帖

資料②

『兵範記』仁安二年（1167）冬之巻の紙背文書

『跪以承候了 梶原紙今季

之由 沙汰人等令申候

■半分過返遣候了 見納内

金泥一切経料紙令下行候也

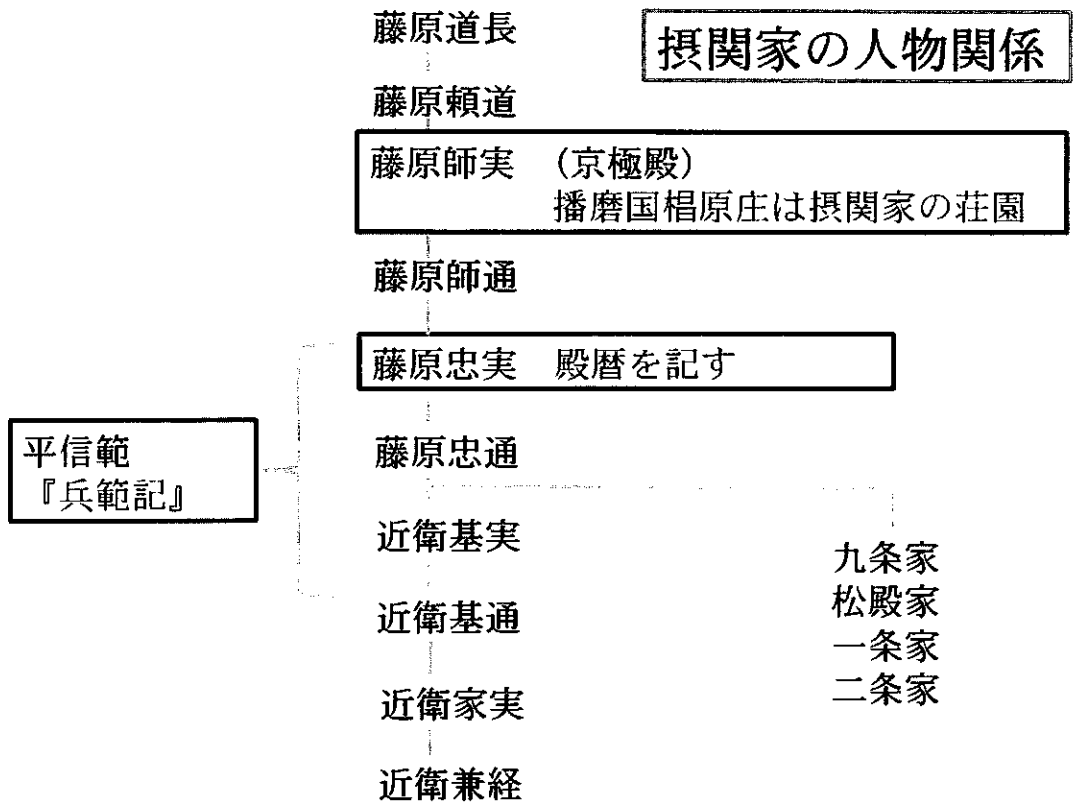
雖然此程候覽 可令召進候

唯今小預男等召集候也 雖

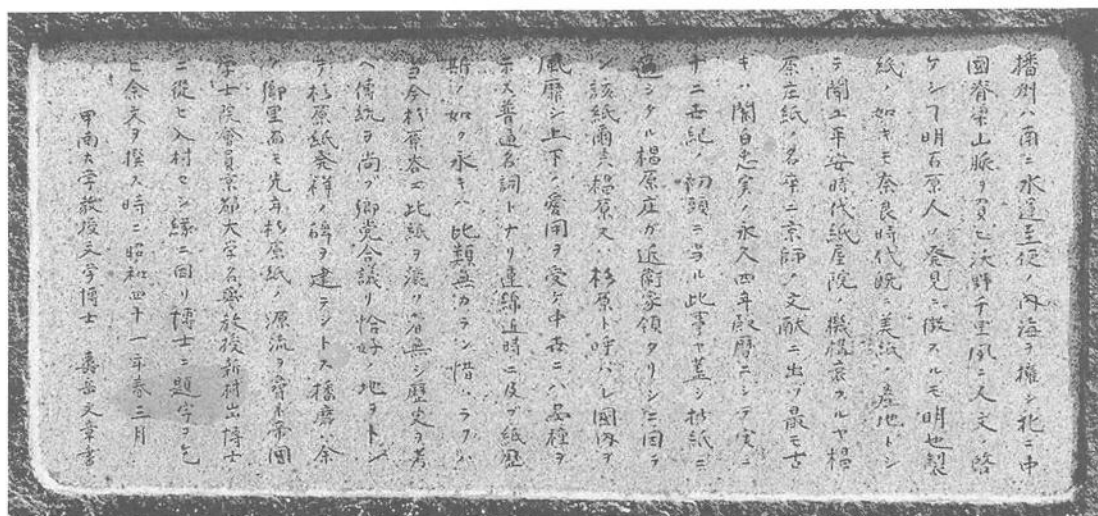
自今以後 御返事争致疎略

候哉 能盛怖々謹言

十一月廿五日 安芸守能盛



資料④



『杉原紙発祥之碑』撰文

『杉原紙発祥之碑』意訳

播州は南にたいへん水運のいい内海を持ち、北に日本の背骨中国山脈を負い、肥沃な平野が広がり、早くから人文が開けたことは、明石原人が発見されたことに象徴されているように明らかである。製紙についても、奈良時代すでに美紙の産地として聞こえ、平安時代紙屋院(官用の製紙所)の機構が衰えるや、相原庄紙の名がにわかになりに出るようになる。最も古いのは、関白忠実の日記「殿暦」の永久四年の記事で、実に十二世紀の初頭のことである。この事はおそらく紙を漉くのに適した相原庄が、近衛家の領地だったことによるのであろう。

それからこの紙は「相原」または「杉原」と呼ばれ国内を風びし、人々の愛用を受け、中世には紙の品種を示す普通名詞となって連綿と近年にまで続いている。紙の歴史がこのように永いのは他に類のないことであろう。

惜しむらくは現在、杉原谷にこの紙を漉く者がいない。そこで歴史を考え、伝統を尊ぶ郷の人々が相談し、恰好の地を選んで杉原紙発祥の碑を建てようとするものである。

播州は私の郷里でもあり、しかも先年杉原紙の源流を尋ね、帝国学士院会員京都大学名誉教授新村出博士に従って入村した縁によって、博士に題字を乞い、私が撰文した。

時に昭和四十一年春三月

甲南大学教授・文学博士 寿岳文章

寿岳文章の和紙研究と寿岳文庫の資料について

杉原紙振興ボランティアの会代表 山仲 進

今日午前中に、向日市文化資料館で、向日庵和紙関連資料の展示とその説明をさせていただきました。その話をお聞きの方も沢山おられると思いますが、話としては重なる部分も多いかと思えます。

先ほども安平さんから紹介がありましたが、多可町の今の「道の駅」がある場所に、もとは杉原紙研究所がありました。その「道の駅」が出来ることになって、川向かいの狭いところに移転して、2、3年前からでしたか、道の駅を「杉原紙の里」と名前を変更して、杉原紙の研究所と紙の販売をする《でんでん》という施設と和紙博物館《寿岳文庫》とを一体化して杉原紙の里として観光的に売り出そうという取り組みがありました。

そういう表面的な動きと同時に、先ほどの安平さんのような地道な調査研究が続けられていました。この《寿岳文庫》と、和紙の展示直売をしている《でんでん》という施設は、杉原紙振興ボランティアという約20人のボランティア組織で管理運営されています。私は7、8年前くらいからお手伝いをさせてもらっています。月に5回くらい当番が回ってきますが、その時だけ見学者に説明したりして、その合間をみて、寿岳先生の資料を整理させていただいています。

寿岳文庫の資料の整理をどのように進めてきたかということについて、前々回、この法人・向日庵の前身の研究会の時に、兵庫県の民芸協会から『兵庫民芸』という会誌が紹介されていて、その中に「寿岳文章と和紙」という文章を浦部喜代子さんが書かれています。寿岳文庫の資料の整理は、浦部さんが研究所にいらしたときに一緒にやらせていただいたものです。今日は本当なら浦部さんに話していただく方が適切であったかも知れませんが、いまは美濃の方におられるので、私が代わりに話をします。『兵庫民芸』もぜひ一度ご覧下さい。

まとまった話にはなりません。寿岳先生の資料を整理する中で、とくに心を惹かれたいくつかの点についてお話しします。

『紙漉村旅日記』

まず、『紙漉村旅日記』の件ですが、寿岳先生は新村先生のお勧めもあって昭和12年～15年、37歳から40歳まで、全国をまわられたことになります。「わが国に現存する手漉紙業の歴史地理的研究」というのが正式な研究の名称です。全国の東北から九州までの約100カ所の紙漉村を訪ねておられます。昭和12年から15年は日中戦争の真っ只中で、旅をすること自

体が困難であったのですが、写真を見ますとしづさんは下駄履きであったし、大変ご苦労されて旅をされたと思います。昭和16年からは太平洋戦争に入り、戦後には全国的に紙漉村は衰退、廃業される所がたいへん多かったことを考えると、そういう意味で、昭和15年というのはまだ昔からの紙漉場が余命を保っていた最後のチャンスだったのです。戦後になると見ることの出来なくなる紙漉きの風景とか、多くの種類の紙作りがたくさん残っていました。このような時代に全国を廻られた。そういうことを後から見れば、歴史的な変革直前の時代を見て記録され、しかも紙の収集をされた。これは巡り合わせであったかも知れませんが、歴史的に非常に大きなお仕事をされたことになると思います。

ここに持ってきた本が『紙漉村旅日記』向日庵本で、昭和18年京都向日庵で発行とあります。これは実は寿岳家から寄贈を受けた本ではありません。寿岳家からの寄贈本は寿岳文庫のケースに手書きの日記帳と一緒に展示してあります。この本は和田邦平さんという甲南大学で教授をされていた方からの寄贈本です。寿岳先生から和紙研究に関しては「私の跡継ぎだ」と言わしめたほど親しい方で、甲南大学を退官された後、兵庫県立博物館の館長も務めてられました。その和田先生の和紙関係資料も、寿岳文庫へ寄贈を受けていまして、本書はそうしたなかの一冊です。

この表紙をめくった最初のページに寿岳先生のサインがありまして、昭和46年に書かれたものですが、(【資料】を参照してください)

〈おもかげのせめてはこのこれのにきにかみすくわぎのあとたゆるとも〉

昭和辛亥一月 和田邦平学兄のたのみに答へて

壽岳文章 しづ

と連名があります。この本に対する先生のお気持ちがこの歌の中に込められています。この言葉はもう一つありまして、昭和22年に出た春秋社版『紙漉村旅日記』という和紙を使った小さい版で、その中に同じような歌が書かれています。それは「寿岳文庫」で編集した『寿岳文章が集めた和紙』という本の裏表紙にそのまま使わせていただいています。これには

〈おもひでのせめてはこのこれのふみにかみすくてわぎ けなはけぬとも〉

とあり、これは昭和39年ですからこちらの方が早いのですが、先生の紙漉きへの思いの込められた歌が書かれています。

先ほど安平さんから詳しくありましたが、寿岳先生が全国の紙漉村を旅された当時は、杉原谷では紙漉きが途絶えてしまっていて来られていないのですが、その直後、昭和15年8月2日、3日に新村出先生とお二人で杉原谷に来られました。これが、先生40歳の時ですが、その時の記録が『和紙研究』第7号にのせられた新村先生の「杉原紙源流考」と寿岳先生の「杉原谷紀行」ですが、この調査の時に案内をされた地元の小学校の先生であった郷土史家の

藤田貞夫さんという方が、後に昭和45年に『播磨の紙の歴史—杉原紙』という研究書を出されました。このことをきっかけに、大正末期、最後まで紙を漉いていた宇高弥之助さんという当時80歳くらいの方が、最初から最後までもう一度紙漉きを再現してみようということで復元された。そしてその当時の加美町の町長であった竹本修二という方が、非常に熱心に福井県や岐阜県や京都府の紙漉場を訪ねられて、町立の研究所をつくって再興しようと大変努力をされた。そして昭和47年、寿岳先生が72歳の時、杉原紙研究所ができました。4月18日に開所式があり、その時に寿岳先生もご出席になり、開所式の記念帳に、資料の文章ですが、第1ページ目に記帳していただいております（【資料】参照）。その前ページには、「杉原紙復興開所記念」という表題も先生の字で書かれています。その1ページ目に、

〈年たけてまた相見むと思ひきや いのちなりけり 播磨杉原〉

という歌を寄せられています。2、3日前にこの日の準備のために資料を見ておりましたら、寿岳先生のメモ書きで、この歌は西行法師の歌の本歌取であるとありました。

もう一つ紹介しますと、寿岳先生の書かれた『和紙落葉抄』（昭和51年）に、

〈喜寿の賀を 杉原に書くうれしさよ〉

という句がありまして、先生が杉原紙の復興に寄せていただいたお気持ちが心に染みます。こうしたことをここで紹介できるのも、私としては大変嬉しいことです。

話しの続きに、もう一つご紹介します。こちらは原稿用紙2枚半ほどに書かれた、平成3年（1991）に、当時加美町の『広報 加美』という広報誌に「杉原紙を永遠に守る」という特集が生まれ、その中に寿岳先生の文章が載ってまして、これが先生91歳の時で、亡くなられる前の、多分絶筆といえますか、ご自分はお目が悪くて書けないので、口述筆記（章子さんの代筆）されたものです。

私も年をとった。来年の3月に、それまで健康が許せば92歳になる。最近の私はともすれば、自らの歩んできた道を振り返りがちであるが、専攻の英文学とともに深く思いを致した紙漉きのことは、今もなおあれこれと思い出し、将来を考えることが多い。

とありまして、最後に、こうあります。

やっと訪れた平和が、手漉き滅亡の歯止めとなるかに見えたが、戦後史の展開は和紙生産に悲観的な運命を与えた。せつかくの平和であるのに、国家の経済政策は過疎を生み、地道な営々たる努力に生きる人を否定した。こうした風潮のなかで、かつての見事な杉原紙を蘇らせた杉原谷の人々の活躍はまことに感動的であり、日本の確かな希望なのである。

それにしても先生が和紙の復興を本当に願っておられたというお気持ちが溢れる文章だと思えます。

紙漉きという仕事は、大手の専業での紙漉きをしているところは別ですが、大部分の紙漉きは山間部の農家の副業で、農閑期の仕事としてやることであり、炭を焼くか、蚕を飼うか、紙を漉くかという風なことだったわけです。戦後になると新しい素材が生まれたり、太平洋戦争で働き手がどんどん失われていったということもあったわけですが、その直前の状況を記したこんな文章が『紙漉村旅日記』の中にあり、これを読むと感動します。福島県の山舟生村という箇所です。

…こんなに質朴で美しい村では、醜い紙の漉かれやうがない。[中略] 山舟生のやうな村では、悪い紙を漉かうと云ふ意識のないのは勿論だが、それかと言つて、良い紙を漉くことに専念してゐるのでもない。先祖代々伝えてきた技術を、忠実に守つてゐるだけである。

またもう一つ、新潟県の豊実村という箇所です。

・・・純粋な材料で、逞しい男手が心を籠めて漉き上げるのだから、この村の紙が世にも立派なことは言ふまでもない。それは今までに私たちの見てきた中で最も美しい紙の一つであった。

こういう風に現地を訪れることで、そこに暮す人々の村のたたずまいとか、生活に触れて、本質的に生活の中で用いられてこそ美しいということを実感されて来た。先生は紙というものが生活の中で實際いろんな形で用いられるということ、目で見て確かめられる。このように紙漉村の旅というのは、多分これまでは誰もそういう経験をした方はおられないわけで、そのあとは寿岳先生のお仕事を受け継ぐようにして、何人もの方が、紙漉村を訪ねておられますが、その最初の第一歩をこの様にして踏み出されたわけです。

向日庵本には紙見本が 134 点、写真 199 枚が付いています。文章の方は講談社学芸文庫という文庫本でも出ていますが、この見本の紙は向日庵本でしか見ることはできません。それは大変惜しいと思ひまして、昨年 6 月に「手漉き和紙青年のつどい」という全国規模の大会で、150 人くらい杉原紙研究所に集まり、その大会のメイン行事として、寿岳先生が集められた和紙の展示を行いました。それに合わせて『寿岳文章の集めた和紙』という本を出しています。これは紙見本を写真に撮って、あとの写真版はそのまま、文章は旅日記から関係する部分を拾い出して使わせていただいています。それは先生のお仕事を紹介する上でなくてはならぬものと考えています。機会がありましたら是非ともご覧下さい。

もう一つ文章として紹介したいものがあります。昭和 53 年に、その前に京都高島屋でもありましたが、これは日本橋三越のもので、内容は同じもので、「伝統の手すき和紙十二匠展」のパンフレットです。デパートで催される巡回展でこう言うものを見る機会は、これからはほとんどないのではないかと思いますので是非見ていただきたいものです。下には芹沢銈介さんの「和紙賛歌」が載っています。【資料】

私たち夫婦が、日本全国の手漉紙業の現状を四年がかりで調べてまわったのは、太平洋戦争の前夜、日支事変はすでに始まり、国営バスも燃料をガソリンから木炭に切りかえるという非常事態の最中であった。労働力も極度に不足していたが、それでも中部や東北の紙すきどころへ行けば、昔ながらの正直な手法で、見るからにほれぼれするような日用紙が、女手一つで漉き続けられているのに、私たちは感心した。特別な工人によって漉かれるのではなく、伝え通りに漉きあげさえすれば、誰が漉こうと、それが立派な紙になる和紙黄金時代の余映を、私たちはこの目で見届けたわけである。

(「伝統の手すき和紙十二匠展」)

この短い文章の中に寿岳先生の和紙研究のエッセンスが込められているのではないかと、そういう仕事を通して熟成されていく和紙文化研究の原点と言えらると思っています。私はほんとにこの言葉が気に入っています。こういう先生のお考えが熟成されていくのは、やはり柳宗悦とともに育て上げた民藝という考え方の一つの具体的なかたちで、紙漉きという仕事の中に見出される、そういう感動がこの言葉の中に伝わってくると思うのです。

ところで、最近出た岩波文庫の寿岳文章訳『ブレイク詩集』ですが、この本が 2013 年にどういういきさつで出たのか、私はわからないのですが、すばらしい出版であると思います。この中に次のように書かれています。

…こうして向日庵本『無染の歌』『無明の歌』は出来上がった。日本は険悪なみずからの歴史を形成しつつある頃であったが、日本の一隅ではそういう邪悪なくらみの浄化作用のようにみごとな内容、みごとな形態の美しい本が出現しつつあったのである。

柳宗悦は向日庵本の誕生を何よりも喜んだ。また、私の和紙への傾倒をこの上なくよしとした。和紙は民芸品の最たるものと言ってよいみごとな工芸品であることを十分に知っていた柳は、和紙が広範かつ深い研究の対象となることを予感し、かつその研究の切り口が民芸論そのものになることを悟っている、まことによき理解者であった。・・・

1990 年 10 月 向日居にて

(「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い―向日庵本の思い出をこめて―」、寿岳文章訳『ブレイク詩集』岩波文庫、2013 年)

これが、「1990年向日居にて」という、先生が90歳の時、もう多くの民芸のお仲間だった方々がお亡くなりになっていた時のものですが、和紙研究というものがすべての民芸運動の基本のところ立ったものだということを、あらためて述べられています。こういう文章がほんとうに私たちを勇気づけるものになっています。(なお、この本の巻末には向日庵私版『無染の歌』、『無明の歌』が収録されています。)

寿岳文庫の資料整理

寿岳文庫という寿岳章子さんが寄贈されました資料ですが、紙見本が大部分とその他に書籍、資料が含まれていましたが、私が目にした当初は段ボール箱13個ありまして、中は全く未整理でした。それを何とかして、どのようなものが集められているのか知りたいと、浦部さんと整理作業を始めたわけです。当初はその箱の側面に播磨とか越中とか、旧国名が書いてあって、本来は旧国別に産地の単位で収めてあったと想定できるのですが、実際にはその後何回も繰返し見られ、色んな利用がされて中身はあちこちに混ざり合っていました。そういうまあ乱雑な状態になってしまっていたのですが、それをどういうふうに整理したらいいかということで、整理作業をするにあたり、まず箱に記号を付けて、中味を上から順番に番号を付けて、1枚1枚そのまま写真にとって、最終的にまた元にあった状態に復元できるようにというつもりで整理したわけです。収集された和紙類は、すでに先生によって番号が付けてあり、そこに記録として大きさとか、厚さとか、また紙の質の目とか糸目とかいろいろ特徴がありますので、そういうふうなリストを作ったわけです。全部で1,387点ありました。

これを作る中で、先生が向日庵本として刊行された『紙漉村旅日記』の中に、見本紙として貼り込んである紙見本があり、ここにも番号が付けてあるのですが、先生がご自分で付けられた見本紙の番号と、収集紙の番号が対照される一覧表が見つかりました。これはほんのメモ程度のものでしたが、これが1枚見つかったので、整理する上で大いに参考になりました。これが大きな転換点になって作業が進みました。

もう一つ、先生のことだから収集紙番号(紙に1枚1枚つけた番号)が、何処で集めたものであるのかということを書いた一覧の対照表があるはずだと考えたわけです。それを探したのですが、結局見つからなかったのです。それがないと出場所のわからない紙がたくさん出てきて先へ進めないわけです。何とか対照表を探したいということで、昨年多可町と向日市、寿岳邸にお願いして、この調査をさせていただくことになりました。その時たくさんの和紙関係の資料が出てくるのですが多すぎてその場では見きれないので、しばらくお預かりして持ち帰って目録を作りながら探したわけです。

一応目録ができた時点で、寿岳邸のある向日市に保管してもらった方がいいのではないかということで、お預かりしてもらいました。今朝ご覧いただいた資料はそういう経緯でお預かりいただいた資料です。ただ私たちが探したかった対照表は、その中にはありませんで、それは必ず先生のお宅の中に残っているのではないかという気がするのですが、それはこれから

の調査に期待することです。

そういうリストがない状況の中で、できるだけ正確な情報になるよう、現存の資料を参考にしながら整理して、総合目録のようなものを今作成しているところです。そういうものが出来たら、出来るだけ早く皆さんに公開して、研究される方々が利用できる体制ができればいいと思っております。

もう一つ大事な資料がありまして、それは「H」という箱に入っている一括資料ですので「Hファイル」と私たちは言っているのですが、「紙漉村」調査の時点で全国の産紙に関する地誌を求めて、京都大学の農政史研究室で調べてこれを書き写したノートがたくさんあります。現地で集めた資料や地誌類など、それらをまとめて、皆さんに十分に活用していただけるような資料化をなるべく早くに出来ればと考えています。

最後に雑誌『別冊太陽』の中に、先生が82歳の時の「和紙とわたくし」という一文があります。この短い文章のなかに、先ほどの調査や、このあとの辻本さんのお話のテーマである正倉院の紙の調査への先生の思いが述べられています。これをご紹介します。

…しかし、和紙へのわたくしの理解と愛を決定的に不動のものとしたのは、一九六〇年を初度として三か年にわたり、秋の曝涼期間中に、正倉院蔵の代表的な古紙の科学的調査に従事したことである。正倉院事務所から、その仕事の具体的な方策を立ててほしいとの依頼を受けたとき、一民間人にすぎない私に、国家的な重責を托した当時の和田正倉院事務所長の勇断に私は感激し、和紙研究会の同人の上村六郎（理博）、大沢忍（医博）、町田誠之（理博）、それに私（文博）の四人に、民芸風雁皮紙の国の無形文化財保持者である安部栄四郎を加えて、総勢五人のチームをつくり、それぞれの専門とする知見を生かしつつ鋭意、調査にはげんだ。

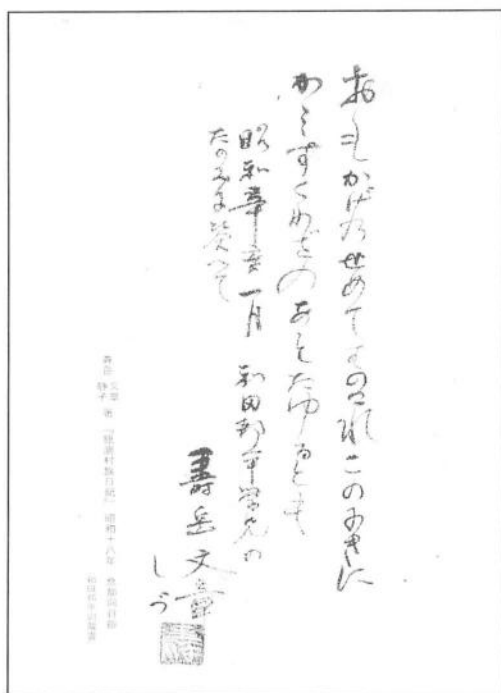
（寿岳文章「和紙とわたくし」、『別冊太陽』、平凡社、1982年）

正倉院の和紙の調査は先生にとってほんとに大きなお仕事でしたし、和紙の世界にとっても画期的なことでありました。そのお話を今から辻本さんに聞かせていただきます。

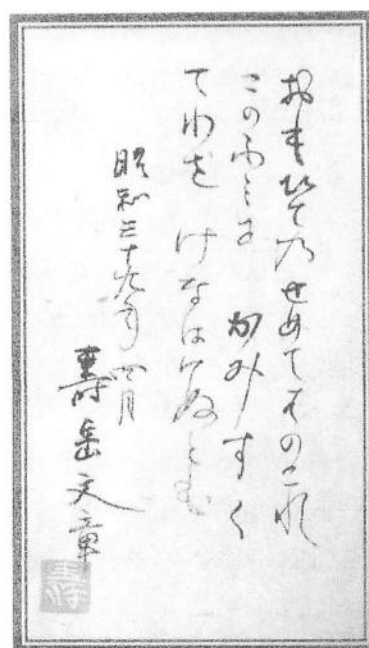
ご清聴ありがとうございました。

[文字起こし：長尾史子]

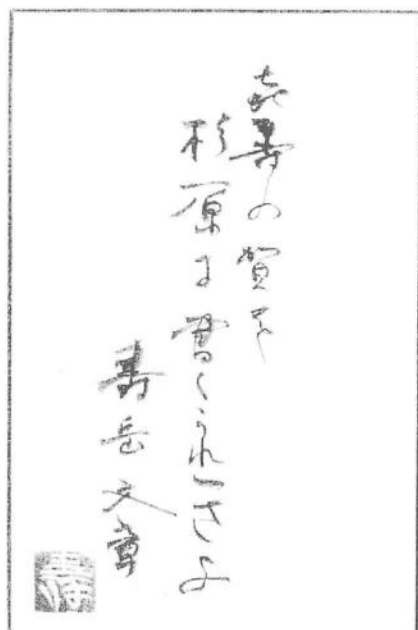
【資料】「寿岳文章の和紙研究と寿岳文庫の資料」



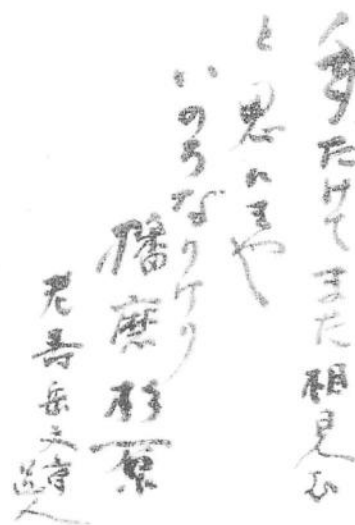
『紙漉村旅日記』和田邦平氏寄贈本サイン 昭和46年



春秋社版『紙漉村旅日記』 昭和39年



寿岳文章『和紙海鏡抄』湯川書房 昭和51年発行



多可郡加美町立杉原紙研究所 開所式 記念帳
昭和47年(1972年)4月16日

第2回

伝統の手すき和紙十二匠展

昭和53年11月14日(火)⇒19日(日) 日本橋三越 7階催物会場

同時開催 やまと風創作和紙人形展 <やまと心>

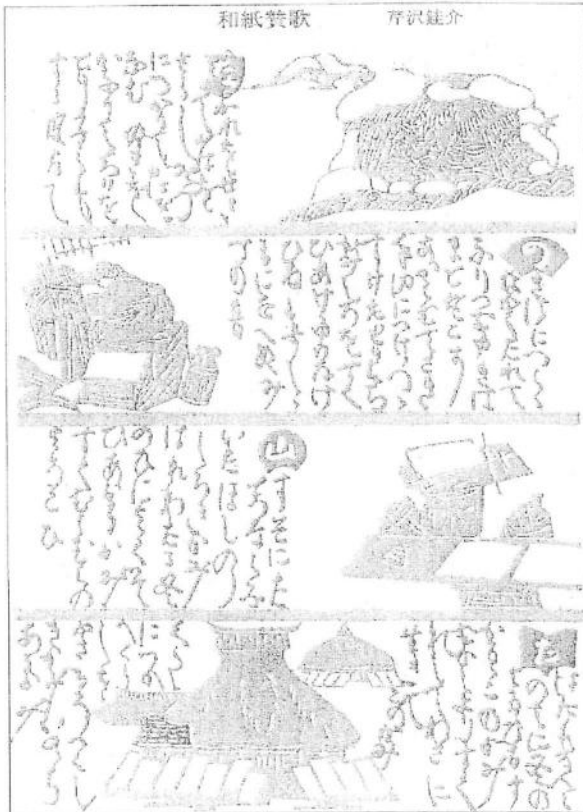
◆揉紙実演 徳島県無形文化財 松田 喜代次

和紙十二匠展によせて

英文学者市川節子
和紙流芳会顧問
寿岳文章

私たちが夫婦が、日本全国の手漉紙業の現状を四年がかりで調べてきたのは、太平洋戦争の前夜、日支戦争はすでに始まり、国営バスも燃料をガソリンから木炭に切りかるといふ非常事態の最中であつた。労働力も極度に不足していたが、それでも中部や東北の紙すきどころへ行けば、昔ながらの正産手法で、見るからにははげげと働いているのに、私たちが感じし、特別な工夫によって漉かれるのではなく、伝え通りに漉きあげさえすれば、誰が漉こうと、それが立派な紙になる和紙黄金時代の余映を、私たちがこの目で見届けたわけである。

ご承知のように、戦後は事情が一変し、国民の総所得はふえただけども、和紙生産人口は激減し、もうだめかと私を絶望させたことも一再にとどまらなかつたので、このごろ私は、望み無きにあらずと思ふようになった。何としても和紙文化のすげえれた伝統を守り抜こうとする熱意に燃える工人が、少なくながら各地で名乗りをあげたからである。和紙はじびないし、またじびしてはならないとの信念を、少数精鋭主義の旗手であるこの人たちはかく持っている。ここに展示された作品は、その信念の美しい結晶だ。和紙を愛し、その文化をいとおしむ人々よ、彼らの仕事を眺めながら目で見守つてほしい。



伝統の手すき和紙十二匠展 参加者



伝統の手すき和紙12人の集い
和紙流芳会

正倉院の紙と昭和の調査

公益財団法人紙の博物館 前学芸部長 辻本 直彦

まえがき

1. 壽岳文章と紙の博物館

紙の博物館は、1950年（昭和25年）に、和紙・洋紙を問わず、古今東西の紙に関する資料を幅広く収集・保存・展示する世界有数の紙の総合博物館として、東京・王子に誕生した。王子は、明治初期に近代的な製紙工場のさきがけとなった抄紙会社（後の王子製紙王子工場）が設立された地で、“洋紙発祥の地”として知られてる。

1949年（昭和24年）、占領政策の過度経済力集中排除法によって、王子製紙は苫小牧製紙・十條製紙・本州製紙の3社に分割させられた。これを機に、翌1950年（昭和25年）王子製紙紙業史料室の資料を一般公開し、広く社会教育に貢献するために、そして、心ならずも、分割されてしまった王子製紙のルーツを残すために、王子工場で唯一焼け残った発電所の建物を利用して、紙の博物館の前身である「製紙記念館」が設立された。その後、首都高速中央環状王子線建設によって工場跡地を離れることとなり、1998年（平成10年）飛鳥山公園の中に「飛鳥山3つの博物館」のひとつとして新装オープンした。現在は「公益財団法人紙の博物館」として、製紙会社、製紙用具製造会社、紙販売会社など、多くの関係各社の協力によって運営されている。

1) 紙の博物館の発足時の体制

昭和25年6月設立した製紙記念館（後の紙の博物館）は、同年9月に財団法人として認可になる。その時点での役員は、理事長に中島慶次社長（苫小牧製紙、後の王子製紙）、他理事には、十条製紙、本州製紙、北越製紙、国策パルプ工業の各社長が就任した。そして、評議員会社は、製紙会社26社、抄紙用具会社4社、紙代理店13社であった。

2) 発足当時の名誉顧問について

新村出（京都大学名誉教授）、壽岳文章（関西学院大学教授）、上村六郎（大阪学芸大学教授）、禿氏祐祥（京都龍谷大学名誉教授）、横山大観（画伯）、柳宗悦（日本民芸館館長）、式場隆三郎（東京タイムス社長）、橋本凝胤（奈良薬師寺管長）、岩野平三郎（越前岡太製紙工業協同組合理事長）、及川金三（郷土民芸家）、浜田徳太郎（紙及びパルプ編集長）の11名であり、特筆すべきは、壽岳文章、新村出、横山大観、柳宗悦が、名を連ねていることである。以上のように、壽岳文章は、紙の博物館発足当初から、「名誉顧問」であった。

2. 手漉き和紙の製法

越前和紙の人間国宝、岩野市兵衛氏の「生漉奉書」を例に、和紙の原料調整、叩解、紙料調整、紙漉き、脱水、乾燥、仕上げの各プロセスを説明した。（詳細は省く）

本題

昭和 35、36、37 年の正倉院の秋の宝庫開封時に、本邦で初めて「正倉院の紙」についての調査が行われた。その調査の責任者が、壽岳文章であった。

当時の正倉院の土井正倉院事務所長の言葉を借りて、この調査の概要を述べる。

正倉院の紙の特徴は、まず、古代の紙の一大宝庫であり、完好な姿で保存されていること。正倉院の紙の種類と数は、書巻類 10 巻、古文書類 800 巻（1 万数千点）、未使用の紙 1,400 余帳、古写経類千数百巻（聖語藏経巻）からなる。

調査の期日は、昭和 35、36、37 年の秋の宝庫開封時で、調査メンバーは、壽岳文章、大沢忍、上村六郎、町田誠之、安部栄四郎の 5 名である。

この調査の評価は、紙の材料・組成や抄紙・染紙の技法等につき多くの成果を収めたこと、そして、特筆に値する事項として、世界に比類のない和紙独特の流漉法の成立経緯をはじめここに解明されたことにある。

1. 調査メンバー構成員（ ）内は紙の博物館、名誉顧問在任期間

- ① 壽岳文章 文学博士（昭和 25 年 6 月 ～ 平成 4 年 1 月）
- ② 大沢忍 医学博士（昭和 41 年 9 月 ～ 昭和 57 年 5 月）
- ③ 上村六郎 理学博士（昭和 25 年 6 月 ～ 平成 3 年 10 月）
- ④ 町田誠之 理学博士（昭和 55 年 9 月 ～ 平成 29 年 3 月）
- ⑤ 安部栄四郎 紙工（昭和 35 年 10 月（以前）～ 昭和 59 年 12 月）（研究嘱託）

なお、各メンバーの紹介は、末尾に掲載した。

2. 昭和 45 年発行の『正倉院の紙』

正倉院事務所編集、宮内庁著作権所有、日本経済新聞社発行、昭和 45 年 3 月 15 日発行、特徴としては、調査の対象となった紙の「原色写真、透過写真、顕微鏡写真」などの図版と、あたりに作成した標本紙を収めて、公表した点にある。

1) 図版は、原色、単色、顕微鏡写真総数 294 枚。標本紙は、麻紙（大麻）溜漉、麻紙（苧麻）溜漉、楮紙（溜漉）、楮紙（流漉）、雁皮紙（溜漉）、雁皮紙（流漉）、楮（7）雁皮（3）溜漉、楮（7）雁皮（3）流漉。染紙は、黄・黄檗（きはだ）染、黒・椴（つるばみ）・鉄媒染、木蘭・椴・灰汁媒染、赤・蘇芳・明礬媒染。

[筆者注、木蘭色：薄茶系統の鈍い黄褐色、椴はクヌギの古名で、その実（どんぐり）を砕いたものまたは実の殻斗（うけ）（傘形のもの）を煎（せん）じ、灰汁（あく）媒染して薄茶色、鉄媒染して焦げ茶色や黒色に染める]

2) 本文目次

- ① 総説 壽岳文章 1～7頁 ② 正倉院の紙の文化史的所見 壽岳文章 9～45頁 ③ 正倉院の紙の研究 大沢忍 47～100頁 ④ 正倉院宝物の染紙について 上村六郎 101～140頁
⑤ 上代の紙の化学的考察 町田誠之 143～164頁 ⑥ 調査紙編年目録 165～169頁
⑦ GENERAL REMARKS ON SCIENTIFIC INVESTIGATIONS MADE INTO VARIOUS PAPERS PRESERVED IN SHOSO-IN BY BUNSHO JUGAKU (pp. 1-5) (英文レジメ)

以上の目次からも、分かるように、「正倉院の紙」調査で、壽岳文章が果たした役割は、「正倉院の紙の研究」の総説を担当し、「正倉院の紙の文化史的所見」を記し、「正倉院の紙の英文摘要」を担当したことである。

3) 調査対象

調査対象は、下記の5つとなる。

- ① 旧北倉階上北棚、
各種献物帳・曝涼使解などの文書、
献物帳所載の雑集、社家（とか）立成・楽毅論などの卷子本
② 旧中倉階下中棚
詩序・梵網経・緑金箋・吹絵紙・色麻紙
③ 旧中倉階下棚外、絵巻二巻
④ 正倉院文書、東南院文書
⑤ 聖語蔵の隋経・唐経などの古写経類

[筆者注、解：律令制で、諸官庁から上級官庁あるいは太政官へ上申した公文書。

東南院文書：明治時代、廃仏毀釈の影響などのため、その文書の一部が寺外に流出したほか、東南院文書が皇室に献納され、正倉院に保管されるようになる。

聖語蔵経巻：正倉院本来のものではなく1893年東大寺の塔頭尊勝院の経蔵が収納の経巻とともに皇室に献納されたもので、隋経や唐経および奈良・平安・鎌倉の古写経その他を含む約5,000巻の経巻は貴重な文化財である。

尊勝院：東大寺別当を務めた光智が天曆9年（955年）に創建したもので、寺内における華嚴教学の拠点であり、東南院と並ぶ有力な院家であった。転害門の東北にあったが、室町時代に廃絶し、跡地は惣持院となった。現在の奈良市立鼓阪（つぎか）小学校が跡地である]

4) 調査月日

第1回 昭和35年10月23日～27日の5日間

(別に11月18日、正倉院宝物書跡調査班からの依頼で、文書続々修中の数種類の紙、旧中倉階下中棚の梵網経を再調査)

第2回 昭和36年10月27日～31日の5日間

第3回 昭和37年19月26日～30日の5日間

5) 調査メンバーの各々の担当

安部は抄紙技術者の立場から主として材料や漉き方を、上村はかつて正倉院宝物の織物を調査した経験をも活かし、主として紙料や染料や染紙製作の方法を、大沢は多年にわたり高性能の拡大鏡や顕微鏡を用いて古写経紙の材質を経験を参考に主として各用紙の組成を、壽岳は製紙の技術が日本に導入されてからの史的背景を勘案しつつ、主として材料や技法の年代的考証を、町田は高分子化学者の立場から、主として成紙要素の追求を、それぞれ担当した。

実際の方法としては、まず安部が、穀、大麻、苧麻、雁皮、葉藁、筍皮など、奈良時代に製紙の材料となったと思われる植物繊維から、溜漉と流漉とを試み、溜漉の場合には、各種の粘剤を用い、それによって生じる紙質の相違を明らかにし、正倉院の紙がどの程度これらに似ているかを観察した。また、越前の紙工・先代岩野平三郎が抄造した麻紙・苦参紙・銀塵敷紙・銀箔敷紙なども、所見の際の参考にした。

[筆者注、苦参(クララ)はマメ科に属し、アルカロイドの一種マトリンを含む薬用植物で、その防虫効果から紙に応用されたと思われるが、処理に不便が多く、すぐに廃れた]

6) 調査手順

調査員たちは、調査室にもち出されて調査の対象となる各種の紙につき、大体次のような諸点を検討するように申し合わせた。

① 視覚と触覚と聴覚による観察

卓上に置かれた紙を、まず肉眼で、全体としてひきしまっているか、粗放であるか、そそけているか、光沢があるかなどの点につき観察する。

次に手に取って、触感から緊密度や粗放度を判断し、指端できわめて軽くたたいて、その音響により、緊密度と粗放性を推定する。

② ものさしで、その紙の縦・横の長さを測り、縦・横がどんな比例になっているかを算定する(そのためにはなるべく漉き放しと考えられるものか選ばれた)

③ 簀の材料、たとえば竹か茅かなどの検討。

④ 簀の編糸の目と目との距離の測定

これは、同一の場所で同じ簀を使って漉かれたか、別の場所で別の簀を使って漉かれたを判断する材料の一つ

⑤ 紙面を明るい方向にかざして透見し、漉きむらの有無、繊維の精粗などを調べる。

⑥ これらの作業が終わった後、拡大鏡で繊維の状態を観察し、さらに高性能の顕微鏡で繊維の状態を数か所にわたって捕え、写真に撮影しておく。

⑦ 着色された紙の場合には、一応色彩とその材料・染色方法等についての所見をノートする。

⑧ その後で、ほぼ時代を同じうすると考えられる既知の紙の見聞(その中には紙質そのものをいろいろと化学的・物理的に検討したものもある)と比較し、その紙につき、総合的な結論を一応下して次の紙に移る。

7) 各調査

第一回調査は、正倉院宝物の全貌を知り、調査の重点をどこに置くべきかを見定めるため、調査の対象となった5類の中から、まず代表的なものを選び出して大観する方針を立てた。第二回調査は、第一回第4日、第5日のあとを承け、日本各地の紙のうち、国印によりおそらくその国で漉かれたと思われる文書の調査に4日間をあて、残り1日は、特に注目すべき数種を選んだ。第三回調査は、国印は無いけれど各地で漉かれたことが分명한戸籍・計帳・正税帳・各種枝文の類、ならびに聖語蔵の隋経・唐経・各種の御願経、東南院文書などに主力をそそぎ、必要に応じて既見のものも再検討した。

(筆者注、正税帳使は、国衙(こくが)財政の決算報告書である正税帳その他の公文書を持参する。四度(よど)使が持参する公文書を四度公文(よどのくもん)といい、その付属文書を枝文(えだぶみ)といった)

8) 調査で解明されたこと

質量とも最も多くの時間は、大宝以後奈良時代を通じて日本各地で漉かれたと推定される紙の様相に費やされたが、その結果、従来不明あるいは未定とされていた問題が、解明・決定された場合も少なくない。

9) 調査で解明出来なかったこと

国家珍宝帳・種々葉帳・雑集など、白麻紙と言いつたてられてきたものが、唐製であるとは推定されても、はたして、麻紙であるかどうか、また、伝承では緑麻紙となっている屏風花氈帳や、色相の異なる各種の麻紙19帳を継ぎあわせた杜家立成が、はたして伝承通り麻紙であるかどうかは、断定するまでに至らず、各調査員の推測の域に留まっているのを遺憾とする。

3. 壽岳文章が「正倉院の紙」調査で解明したこと

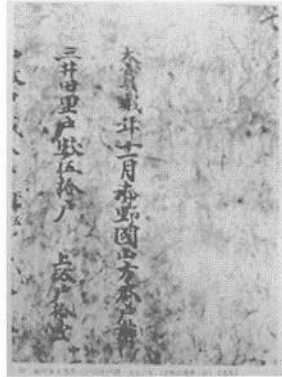
1) 各地(国)の戸籍(10種)の比較

[筆者注、やや脱線するが、まず「どうして、奈良時代の戸籍が残されたのか」という問題を明らかにしておく必要がある。それは、律令制下で中央の官庁が作成した文書や諸国からの報告書を律令公文と呼び、これらのほとんどは短期間(戸籍の保存期間は比較的長く30年)で廃棄されていた。廃棄文書の一部が(偶然)東大寺写経所の帳簿として再利用(戸籍が書かれた紙の裏面を帳簿として利用した)され、正倉院に納められたことにより、奈良時代の戸籍・正税帳などの貴重な史料が今日まで残ることになった]

最も古い戸籍として、大宝令による大宝2年(702年)のものが現存している。

(A) 御野国の戸籍

御野国（美濃）の戸籍の5資料について、調べた。(一) (二) (四) (五) は、縦28.5センチ、糸間隔1.5センチで、書風は六朝風の古格を保った見事な筆跡、原料処理：極めて優秀であるに対して、(三) は、縦29センチ、糸間隔1.8センチで、書風は、書格は落ちる。また、原料処理も不十分で紙質が引き締まっていない。



左：(一) 御野国

味蜂間 (あはちま) 郡春部里

((二) (四) (五) を代表して

(一) のみ掲載)

右：(三) 御野国 山方郡三井田里

(三) は書格が落ちる。『延喜式』によると、美濃の国府は18郡を管して上位であるゆえ、それから推しても、大宝年代、書記者が複数なのは当然としても、(一) (二) (四) (五) が原料処理・叩解・漉きかたなどにおいても極めて優秀であり、製紙技術の水準が高いのに反し、(三) は原料の処理不十分で、漉き方の拙く、紙質が引き締まっていない。

(B) 筑前国の戸籍

筑前国の戸籍2件について調べた。(七) (八) 縦27センチ、糸間隔4.5センチ、紙質は

(A) に劣る。粗紙。ムラがある。糸目の間隔の大きいことは、簀の作り方が粗末であることの一証となる。紙そのものの所見をしるすと、苦心のあとは十分に窺えるけれども、原料繊維の処理ははなはだムラがあり、極端に薄い部分が目立ち、美濃の(三) とは比較にならないほどの粗紙である。



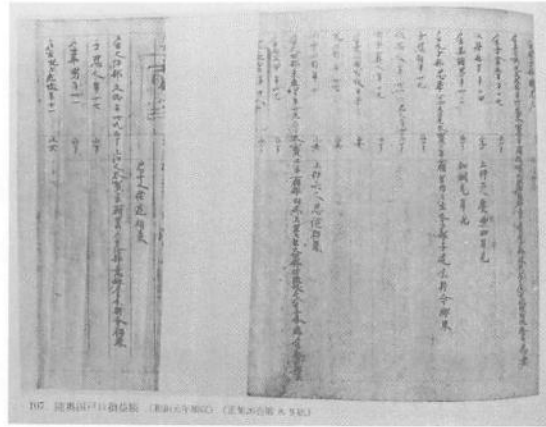
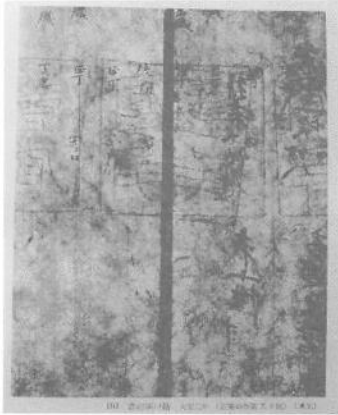
左：(七) 筑前国 嶋郡川辺里

((七) (八) を代表して、(七) を掲載。)

(C) 豊前国の戸籍

豊前国の戸籍2件につき調べた。(九)(十) 縦28センチ、糸間隔3.3センチ、紙質は

(A)御野国より粗雑。(B)筑前国より良い。紙質、簀の作り、これを美濃に比較するとはるかに粗雑だが、筑前と比べると幾分上等である。



左：(九) 豊前国仲津郡丁(よぼろ)里戸籍 (九)(十)を代表して(九)を掲載

右：陸奥国戸口損益帳断简

(D) 陸奥国戸口損益帳断简二張の国の決定

陸奥国戸口損益帳断简二張につき、これまで、美濃国か陸奥国か、国印が不明のため未確定だった。資料大きさは、縦28.8センチ、横48.5センチ、糸間隔は3.3センチ。御野国の5種と比較して、紙質が格段に劣り、糸間隔も全く異なる。そして、国印もつぶさに検鏡して、陸奥国と決定した。

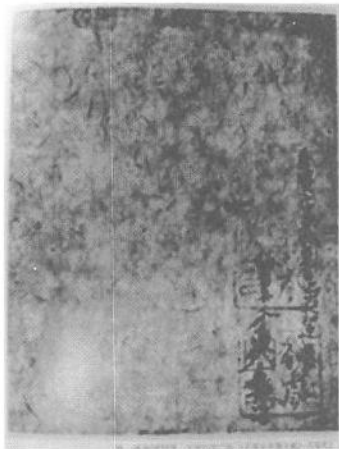
2) 流漉への過程

正倉院文書につき、主として成紙の繊維構造を調べて行くうちに、溜漉ではあるが、流漉への過渡を思わせる実物にいくつか遭遇した。

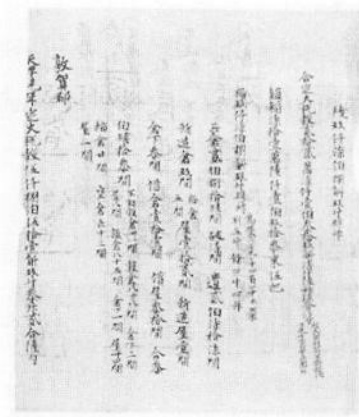
① 越前国司解

天平宝字2年(758)8月11日、縦33センチ、横57.6センチ。

簀の目あらく、乾板の目もはっきり出ており、何かにつけて流漉の傾向が強い。天平4年(730)の大税帳断简など、簀の目もほとんどわからぬほど緻密に叩解された雁皮繊維の溜漉であって、その進歩した技術の冴えには感嘆させられる。にもかかわらず約35年後の同国製紙に著しい変化が見られる。その紙を熟視していると、技術が低下したのではなく、繊維の叩解が不十分であっても、早く容易に漉きたてられる方法を見つけたのでないか[筆者注：「流し漉き」法を見出す]、その疑念が湧く。



左：越前国御解



右：越前国大税帳（複製 国立歴史民俗博物館蔵）

② 越前国大税帳（730年）

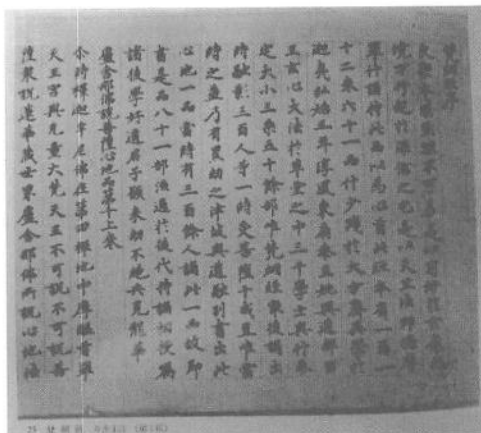
（原品 宮内庁正倉院事務所蔵）

不要になった越前国大税帳が写経所で適当に切断されて使用されたため、断簡となったもののなかで現存する6つの断簡のうちの2つ。越前国全体の総計部分と敦賀郡が始まる部分にあたる。大税の総量と、それを収納する正倉・屋・倉下などの数が記されている。しかし、決定的に、流漉であることを示した紙は、中倉所蔵の正倉院宝物『梵網経』であった。

③ 梵網経 24張

縦20.2センチ、横57.3センチ 竹簧を用いて板乾しとし、刷毛目もはっきり見えている。古来の伝承では白麻紙となっているが、第一回の調査では純粹の白麻紙ではなく、雁皮も相当量混和されているとの結論に達し、一応雁皮入り麻紙とした。しかるに、第二回の調査で、大沢調査員が詳細に検鏡した結果、繊維は明らかに雁皮であり、しかもそれがほとんど縦に流れている事実をつきとめ、雁皮・流漉と改めた。

筆者も、平成26年に開催された「正倉院展」で、全く劣化していない「梵網経」を見出す。劣化していない理由が、木製（檜）の経筒に収納されていたことを知る。



左：梵網経



右：勘物使解

④ 勘物（かんもつ）使解

弘仁2年（811）、縦29～30センチ、横55.5センチ。材料の麻の繊維がほとんど縦に流れているので、この時点で明らかに粘質物を混和した流漉が行われていたと考えねばならない。

以下の宝物については、次回に検討したい。

- 1) 東大寺献物帳・国家珍宝帳（天平勝宝8年、756年）
- 2) 東大寺献物帳 屏風花氈等帳（天平勝宝8年）
- 3) 東大寺献物帳 大小王真跡帳
- 4) 雑集
- 5) 東大寺献物帳・国家珍宝帳（天平勝宝8年、756年）
- 6) 樂毅論：光明皇后真筆（天平16年）
- 7) 王勃詩序 慶雲4年
- 8) 王勃詩序色麻紙29張
- 9) 色麻紙19卷

4. まとめ

第二次平成の調査で、以下のように評価している。紙の文化史・文献史的「紙」観から、実物の科学的調査に基づく実態究明へ（科学者の参加、漉き手の協力（標本紙）、古代製紙技法の意義と変遷（溜漉から流漉へ、ネリの使用、雁皮紙の意義）という成果があがったのである。また、109点の図版、標本紙・染紙計12種、本編169頁から構成された報告書も、周到な用意をもって編集され、「総合的学術調査」と呼ぶにふさわしい重厚なものであった。まさに、同書序に述べるように、「古代の日本の紙に対する系統的な研究の乏しい」状況にあって、空前と評すべき成果であった。その調査の責任者が壽岳文章であった。

（付録）

「正倉院の紙」調査構成員について

1) 大沢忍 医学博士（昭和41年9月～昭和57年5月）

1899年長野生れ。1926年京都大学医学部専修科終了、同年京都大学医学部助手、1928年同講師（微生物学教室）、1930～1966年関西医科大学微生物学教室の教授。1966～1977年神戸女子大学教授。紙の博物館の機関紙『百万塔』に「百万塔陀羅尼の研究—百万塔陀羅尼における4種の陀羅尼の内容について」（1971）、「紙の伝播の歴史のなかにおける手漉和紙の位置と特徴」（1981）、「親鸞聖人真跡「教行信証」の用紙と美濃紙」（1979）などを投稿。

2) 上村六郎 理学博士（昭和25年6月～平成3年10月）

1894年～1991年 染織文化研究者。

新潟県刈羽郡生まれ。号は元人（げんじん、もとんど）。京都高等工芸学校染色学卒。京都帝国大学工学部工業化学科卒、同大助手。関西学院大学理工科講師、武庫川女子大学教授、1950年大阪学芸大学教授。58年定年退官、同年「上代文学に現れた色名・色彩並に染色の研究」で京都大学理学博士。新潟女子短期大学教授、新潟青陵女子短期大学初代学長、四天王寺女子大学教授、日本染織学園園長を兼任。旭川市の優佳良織（ゆうからおり）工芸館内国際染織美術館館長。日本の古代染織を研究し、宮内庁の委嘱により正倉院御物裂の調査に当たる。日本染織文化協会会長、名誉会長。著作集全6巻がある。

3) 町田誠之 理学博士(昭和55年9月～平成29年3月)

大正2年京都府生れ、昭和14年京都帝国大学理学部化学科卒業、翌年京都工芸教授、昭和22年京都工芸繊維大学教授、その後、同繊維学部長、昭和52年退官。京都工芸繊維大学名誉教授。「NHK市民大学」の「紙と日本文化」の講義（昭和63年1月から3月まで、毎週1回45分番組で、NHK教育テレビで計12回放送され、好評を博す。著書に、『平安京の紙屋紙（かんやがみ）』京都新聞出版センター 2009.3、『回想の和紙 紙の博物館』監修 東京書籍 2009.7、『源氏物語紙の宴』書肆フローラ 2002.11、『和紙の道しるべ その歴史と化学』淡交社2000.4、『和紙がたり百人一首』ミネルヴァ書房1995.12、『和紙つれづれ草』平凡社1994.6、『和紙散歩』淡交社1993.2、『大和の古代史跡を歩く』思文閣1990.8、『紙と日本文化』日本放送出版協会1989.11など多数。

4) 安部栄四郎 紙工(昭和35年10月(以前)～昭和59年12月)(研究嘱託)

工芸家（雁皮紙）、明治35年（1902）島根県八束郡に製紙業家の二男として生まれる。雁皮を用いた出雲民芸紙の創作者で、和紙の分野で最初の人間国宝。1984年没、享年82歳。9歳より手漉き和紙作りを手伝い始め、出雲国製紙伝習所で修業を積む。雁皮紙は雁皮の繊維を原料とし、その特質を生かした緊密でなめらかな紙質のもので、変色や虫害に強く永久保存などの記録用紙として適しており、和紙の王様とも言われる。昭和6年松江市を訪れた民芸運動の提唱者柳宗悦に出会い推賞されたことが契機となり、雁皮紙による出雲民芸紙の創作を始める。民芸運動を通してバーナード・リーチ、浜田庄司、河井寛次郎、棟方志功らとも親交を深めた。昭和9年紙漉きとしては初めて東京の資生堂で個展を開催する。昭和35年より3年間宮内庁の依頼により正倉院宝物紙を調査、同年島根県無形文化財の認定を受ける。昭和42年日本民芸館賞を受賞、翌43年「雁皮紙製作技術保持者」として国の重要無形文化財（人間国宝）に認定された。昭和49年パリ、51年ニューヨーク、サンフランシスコ、ロサンゼルスで個展を開催し、和紙の文化を海外に紹介、また55年北京で行なわれた展覧会では「中国は紙漉きの先輩」と展示品348点すべてを中国側に寄贈した。昭和58年10月自宅横に、70余年にわたり漉き上げた和紙のほか棟方志功の襖絵、河井寛次郎の陶器など約1,500点を収蔵・展示する「安部栄四郎記念館」を開館。著書に『和紙三昧』、『紙すき五十年』などがある。

講演者紹介

辻本 直彦（つじもと なおひこ）

公益財団法人 紙の博物館 前学芸部長、NPO 法人「向日庵」理事

1947年 京都市生まれ。

1973年 京都大学大学院農学研究科終了後、王子製紙株式会社（現在王子ホールディングス株式会社）入社。研究開発業務で25年間研究所勤務。

1977年 ハーバード大学夏季大学、米国ウィスコンシン州「紙化学研究所・大学院」、
～79年 ニューヨーク州立シラキュース大学「ESPRI 研究所」へ派遣留学

1998年 王子コーンスターチ(株)出向。常務取締役、千葉工場長、研究本部長

2006年 紙の博物館勤務・学芸部長

2009年 企画展「手漉き和紙の今」では、皇后陛下の御行啓を賜り御説明係を担当

2017年 紙の博物館退職



和紙の調査分析に秀でた人物

東京都市大学名誉教授（文学博士）河野徳吉

はじめに

「向日庵」会員の皆様、本日は寿岳文章氏の功績を讃える会に参加でき光栄です。演題は「和紙の調査分析に秀でた人物」ですが、テーマは、豊富な知識、理念、国史大辞典共同編纂、圖前制度、以上の四点に絞り解説し、関係資料は会場側面の机上に展示しています。

1. 豊富な知識

昭和9年、寿岳文章氏は書物展望社から『書物の道』を刊行しましたが、その書物を読んだ和歌山県の南方熊楠^{みなみなくまのり}は、寿岳氏に手紙を書き対談しています。南方氏は慶応3年生れ、昭和16年に没しますが、若くして英国へ留学し、生態学、植物、人類、民俗、博物学を研究し『ネイチャー』誌に50回も投稿しました。この二人は尊敬し合い、7年間、対話しました。寿岳氏はこの交流を昭和20年8月に執筆した『日本の紙』に記しています。

「和紙のすきな南方氏の乞ふにまかせておほやけにしたが、いくさのわざはひのために紙型を焼いてしまったので、このたび版をあらたにすることとなつた。(中略)決して気まぐれや気どりによるのではなく、和紙のことを書きしるすこのやうな本には、(中略)今も昔もかへりはない。」[南方は四年前死亡している]

この書物は、タテ21センチ、ヨコ15センチ、72頁、「鉄道省国際観光局観光人文庫」出刊となっている。現物を展示し閲覧に供したい。(なお、本書は寿岳文章が著した『日本の紙』[靖文社、昭和19年]の改定再版本と考えられる。)

不思議なことですが、この書物は連合軍側に渡ったのか、京都河原町大丸の隣に設立したアメリカ図書館に数冊展示されていたのを記憶している。なおまた、昭和32年東京の製紙博物館の名誉顧問に就任した京都の新村出、禿氏祐祥、寿岳文章、上村六郎各氏から和紙文献を寄贈されたが、その中には『日本の紙』が収納されていました。

次に寿岳文章氏の講話と指導は、製紙博物館内で三つに分けた和紙研究グループに対してあったが、その概要は以下のごとくです。「和紙の知識と調査活動」、この講話は『紙漉村旅日記』の研究調査と経験を基本にしたものであります。

1) 紙漉き場の家族構成、対話、作業場の方向位置、道具類の場所、紙の乾燥方法（板干、鉄

板)、紙の仕上げとその道具、紙の分別と保存、紙の枚数、計量基準、寸法、梱包、荷札、保存場所、分別、発送、数量、紙蔵、種類ごとの帳簿と伝票、商談記録、売り掛け表。

2) 紙原料の生産、楮、三桮、麻、雁皮類の栽培は自家製（所有地）栽培、周辺の農家からの買取り、流通市場に注文、専門商社から定期的を買取る、原料商社の資本にたよる紙の原料の買付季節と金額、代価支払方法、資産運用、青田買い、仲買人から借受する。

原材料の運搬資金、相場、手形、税金、藩の融資、中馬伝馬の手形支払方法、流通資本から借受紙庄屋を中心にした講組織、頼母子講による入札。

3) 紙の原料を押さえれば紙漉農家は破産できる世の中、成長力の弱い紙漉場は自然淘汰するといわれている。一方、開発力と市場からの要求に対応できる紙漉場は急速に市場を席卷でき生き残る仕組ができていられる。おそらく時代の流れに添う能力、信用、独創力、想起による、人間の意思が強い者が未来の開発に役に立っている。

和紙の研究開発者の諸例を探ってみると、世の中の活動を見聞きし、時代ごとの要求に対応する想起が予想外の結果を生みだしている。

これまでの話題から逸脱しますが、紙の取扱い方法を瞬間的に判断する手法を寿岳先生に教わりました。それは科学的ではなく、自分の経験を脳に覚えさせ学習すれば、原料の種が一度覚えたらその繊維の構造がわかる。次に紙漉場で原料の繊維処理する方法を観察、また紙の漉き方と干し（乾し）方が、物覚えの極意に到達、数多く経験すれば、自然に指先が動き感性として受け入れる、と具体的に指導してくださいました。

ある意味では、指先以外まじっていないが紙漉工房の人、紙商の人達は一度覚えた紙は一生忘れない、それは目で紙を見る感覚の働きと指紋で繊維の品質を記憶にとどめたからです。寿岳先生は、前掲で述べた三つの講話を取りまとめ、紙に携わる人々に、推測とは何か、これまで知らないことを見て知る過程を大切に刺激をあたえ、和紙の極意にめざめようと述べています。

2. 和紙の歴史と考え方

寿岳氏は『正倉院の紙』の学術調査では、名を書き連ねた中の代表者であった。このことがきっかけになり、日本歴史学会編集による『日本の紙』を吉川弘文館から昭和42年に出版している。同時代に『国史大辞典』の編纂にも携わっていたためか、体調を崩されていた。

この『日本の紙』の執筆には、永年、蓄積してきた古典籍をはじめ、正倉院文書で培った和紙、経典類、色彩あふれた色紙、装幀紙をはじめ、これまで知られていない仏教国家の構築に役立った紙類を存分に活用されています。

その理念が頭から去ることがなかったのか時代ごと主要文献を年代順に整備（現在、向日庵に整理）加えて紙の博物館所蔵目録を丹念に調査研究、必要な記録は（ノートに記録）数年間書齋に籠り筆を進めていったと「はしがき」に書きしるしている。「目次」には上代、中世、近世に分けているが、上代、中世については、未発表の原本、国立公文書館をはじめ国の文化財に至るまで調査、また関義城氏所蔵の資料を引用している。これらの貴重な文献は一千数百冊におよぶ。

これまで知られていない和紙を外から見えるよう短くまとめると以下ようになります。

世界に誇れる日本特有な和紙とその構造・原点。律令社会に必要とした和紙は、どこから由来したのか、国府・国分寺を中心に紙漉場を設けたのか、その系路、運搬は人力（他）陸路、河川、海路、流通経路、日程、役人の人脈、以上は国が調達する年間の紙、中務省図書寮、諸国から税で納める貢納紙とその税の種類、紙の植物原料、紙に仕上げるその数量を集荷地初期の段階では、紙になる原料とその種類がことなる、仕上げた紙は揃わない、また紙の寸法枚数がそろわない、この他、紙の厚い薄いの標準化がないので混乱があった。その結果、国府郡司から紙の統一化を太政官府に報告、十世紀藤原時平は、延喜格の撰上、その後延長5年藤原忠平は延喜式を撰上し、紙の政策を軌道にのせていった。

12世紀以降、院政の成立と武家階級の興隆、僧兵の勢力増大、対外貿易、荘園整理令による政治、経済、社会の激変による変革があって、物流動向を正確に分けたその結果、紙の種類・生産が浮上しはじめた。

諸国に荘園を所領している公家、寺社領、豪族の所有地は、新興勢力である地方の武家が新しい紙を自立生産、これまでとまったく異なった武家特有の紙が領内で抄造されるに至った。

14世紀になると東南アジアの諸国から、通商貿易、地域貿易、民間商社を中心とした交易がはじまり、御家人所領で紙座、商座、二十二座が設け紙売買制度ができあがっていった。このことが連座したのか、私船が増え大陸との交通があり、紙の売買が盛んになっていた。越前国では紙訴訟願があつてか、その始末が域内の紙問屋と船名主に皺寄せがあり、紙漉郷では非常にむごたらしい商況になっていた。

15世紀になると幕府の財源の転換は、商業資本の発生と地方分権の進行により、勘合貿易船が急速に進んでいった。その背景として、対外的な勘合符をつくり信用状により、安心して交易ができ盛んにした。同時に財源の流れがよく、地方武家の手形、通行税、口銭、段銭など様々な財源制度が、有効に流通しはじめていった。

足利義満は、明国の勘合符を得た応永11年（1444）大名領の形成が安定したとき、城下町に紙を専門に漉く地域を設け、紙市、紙庄に新しい薄様紙、雁皮紙、鳥子紙、色紙、檀紙、奉書紙をつくらせて、国内外に新しい紙を流通し商業資本を充実、城内には能楽、茶の湯、連歌初学、能狂言の完成を設け、紙の需要を盛んにしていった。また美術分野においては、山水画の完成、襖障子に絵図、屏風絵または装飾図、儀式用の扇等、優雅な紙に好みの画図をつくる習慣が流行している。

3. 国史大辞典の編纂

国史大辞典の編纂事業は、昭和50年代から日本の歴史学に研鑽を積む多数参加、各項目の要点をとりまとめ、文章の中に絵図、写真、数表を挿入、むだがないようまとめ、十五巻別巻三にまとめ数年間で完成した。

日本の紙については大日本古文書を編纂した竹内理三氏、寿岳文章氏が先達となり十数人の専門家が協力した。

紙の項目は、歴史資料に多く所見するので権威筋の学術専門家の指導を受けるとともに、科学分野から分析する人々に共同で研究し、精度の高い記録を本文に挿入している。

寿岳文章氏は『正倉院の紙』の調査研究で成果をあげていた。加えて各地の和紙生産から紙の種類、原料処理、分析評価など、有識者を集め協力してもらい、最後まで他のものと間違いないよう次のように編集業務を担当していた。

「和紙に関する項目と掲載内容」参考文献に掲載

- 一、学術研究論文、書物に掲載、専門機関誌等に発表を参考にした記述、資料図録
- 二、有識者の前で発表、記録に残した印刷物
- 三、著作権に登録されている印刷物、図録、写真、映像物
- 四、大辞典に掲げる文章、目次、字幕、図録、写真、絵、等は紙に関する編集者と相談する。
- 五、言語、方言、古文書の書き方、基礎言語の統一と整理
- 六、出版者の編集担当者と相談、打合せ、時代考証

国史大辞典の作業は、国内に窮まったわけではなく、海外諸国の歴史事情とかかわり共有するため、和紙については様々な性質の違う言葉があった。

和紙の編集に精力を尽した寿岳氏は健康を害していたが、病に打ち向かって、心にわきいでる情念を最後まで向日庵でなしとげていった。

4. 鬮前制度

大阪紙商仲間の鬮前制度は、正徳5年(1715)結成されている。その場所は土佐堀川を中心に天神橋から筑前橋(図参照)である。小嶋屋七兵衛の覚書をはじめ、「諸蔵産紙御尋答書」「西様御尋一件」「諸蔵産紙鬮前一件記」等三つの古記録が残っている。その記述をあらためると、西国各藩の蔵紙が淀川筋に紙蔵を設けて、市場の景気がよいとき、大阪紙商仲間に開放する。この市を支配する者は毎年春に紙仲間が中ノ島にある紙屋で籤を引き、一年間各藩が市場に放出した蔵紙の金額を決め紙商仲間に公平に分配する役目を担う。

紙を取扱う鬮前の支配役は、年番制であるが地域ごと役員を決め、組頭をつくり、組の中で紙の種類・品質を決めて、市場に分売している。

紙仲間の記録には次のようなものが残っている。

「間より買受候而ハ二重口錢ニ相成 迷惑之趣をもつて願上候
蔵紙并商人紙も買合仕居 平均値段も相分り
蔵紙之見競を以売買仕候 重立品荒増奉申候 眼前仲間難立行及難渋候」

上の三件の苦情を鬮前仲間の代表に意見を申している。公平無私である点でも問題をかかえている。したがって組頭、地域の紙屋、伝統的な紙商の中に逸脱、不正をする行為があつて、申告する人が段々増えていった。

上の申告書は、山代御紙会所に通報、二度目の検査（荷崩れ、水濡、破損、汚れ）のとき修正している。

鬮前紙仲間の資本形成は、取引の大小、伝統、組構成と組頭になった回数、仲間の信用度、公平な入札、藩の信用維持に貢献、資金調達、紙を運ぶ河川と荷上げ、改修、（水路、掘割の浚渫、倉庫の増設）ときには、天明飢饉の際に「御尋答書」救済活動によって鬮前紙仲間を救った記録がある。

「近年諸紙拂府之儀 国々の風聞承合候処 西国筋に度々洪水に有之楮水損仕
其上先年諸国不熟に而 米価高値に付而ハ 国々紙漉場所紙草の世話等行届兼
紙漉人も相滅じ漉立て支障云々」

この事情を知った鬮前仲間は組頭惣代が事情を調べ、山代紙会所に奉願、即刻西国各藩と一体に救済活動を実行したと述べている。

これまで紙の研究文献にはなかった記録について、寿岳文章氏は、鬮前制度、各藩の紙揆、紙会所の不正などの古文書を細かく書き未公開の資料が遺されている。できるならば、このほど整理した山仲進氏の諸国蔵紙蔵鬮前、鬮数帳等、鬮前文書を調べ、向日庵の人々により発表、公開が望まれる。

河井寛次郎著 詞編『いのちの窓』に依り寛次郎の思い、願いに迫る

—柳先生と民藝運動とも絡めて—

河井寛次郎記念館館長 河井 敏孝

はじめに

京都五条坂にございます河井寛次郎記念館は、昭和 48 年にたちあげてから 45 年、最初の館長は寛次郎の妻つね、二代目はその娘須也子、三代目の館長が私です。今日はなぜ寛次郎は人に慕われるのか、そこが一番大切だと思いますので逸話も交えてお話しします。また寿岳文章と河井寛次郎との関わりについても触れておきたいと思います。

島根に育った少年時代

寛次郎は明治 23 年 (1890)、島根県安来町に生まれ、現在の松江東高校に学びました。優等生だったので、そののち無試験で東京高等工業学校 (現東京工業大学) に入ります。日本ではまだ日露戦争の戦勝ムードが残っている頃のことです。当時この学校で指導をしていたワグネル博士[註: Gottfried Wagener (1831- 1892) ドイツ出身のお雇い外国人。明治の日本で陶磁器やガラスの製造など工学教育を行った。]の影響を受けたのが、寛次郎の先輩である板谷波山 (いたやはざん) でした。寛次郎は大正 3 年 (1914) に窯業科を卒業して、京都市陶磁器試験場に入所しますが、ここには中国古陶磁の研究者小森忍 (こもりしのぶ) がおり、2 年後には濱田庄司 (はまだしょうじ) が入所しています。

寛次郎は、父・大三郎と妻・ゆきとの間に末子として生まれました。頭脳明晰で活発な出来のよい少年で、将来は大臣かと周囲の注目を集めていたにもかかわらず、実際には工業学校に入り陶芸をやろうというのだからずいぶん驚かれましたが、身近に様々な窯元があったなかで育った寛次郎にとってはごく自然なことでした。

山陰、とりわけ出雲族というのは特異です。車で安来から出雲にかけてひと走りしただけでも、その間に 80 の窯があります。現在も生きている窯です。出雲の陶器生産は、おそらく出雲族が支配していた頃からずっと続いていたのだろう、という感を強く受けました。豊かな自然に恵まれ、寺社にも大刹が多い地です。寛次郎はこの宗教的な風土と、出雲族という長く連綿とした歴史のなかで育てられ、その少年時代を過ごしました。こうした風土のなかで育った寛次郎にとっては陶芸の世界に入るといふことは何ら不思議のない環境だったのです。

陶芸の道へ

東京高等工業学校で学んだ寛次郎は、最先端の化学陶器、築窯術、について勉強したことをきっちりとノートに残しています。見事なノートです。学び得たことを自分の背景としてきっちりと残しておいたこの記録は、のちの寛次郎に大いに役立つこととなります。「20の扉」というラジオ番組で知られる徳川夢声（とくがわむせい）が五条坂にお越しになったときの会話です。

「寛次郎さん、あなたは勉強しましたね。」

「はあ、一応勉強しましたけれども、私は化学の時間に黄色や赤の炎がブワッと幻想的に立ち上るのを、それを感心しておりますな。」

「しかし嫌な科目もあったでしょ。」

「はあ、化学方程式、論理学、鉱物学、築窯術、計量の世界、嫌でいやでしょうがなかった。だけど、それをやったおかげで、私はここにいます。あのときに嫌な思いをしなかったら、私の今日の確かさはございませんでしたでしょう。ただの呆けた陶器屋になっていたでしょう。」

この言葉は、寛次郎が知識と情緒のバランスを上手にとりながら学生時代を過ごしてきた人であったことを示しているように思えます。

寛次郎は、病気のため、尋常高等小学校時の一年、東京高等工業学校時の一年を休学し、通例より二年遅れて卒業し、すぐに京都市立陶器試験場に入ります。その跡が東山区に残っています。この試験場で、はじめは無給でしたが、やがて仕事として給料を得ながらしっかりと釉薬の勉強をするという生活に入ります。ある本によると、寛次郎はこの試験場で一万種の釉薬を研究したという伝説的な話が残ります。一万種とは驚くべき数です。ある方が、この試験所が廃所になるとき、「河井技師報告書」との一書を保持されました。そして数十年の後、五条坂に河井寛次郎記念館があることを知り、寄贈して下さいました。この書は寛次郎が試験場の技師として、半年間にわたって行った釉薬テストの報告書で、当時の試験場の様子を伝えるものとしては現存する唯一のものです。この報告書に記録されている釉薬の数は、簡単に調べただけで1,500種あります。試験場に寛次郎がいたのは三年弱ですから、一万種もの釉薬を研究したという伝説的な話も想像するに難くはないという計算になります。

寛次郎はこの釉薬の勉強を自身の土台としてデビューをすることになります。31歳で大正10年(1921)に作品を発表しますが、それらの作品は、唐、宋、元、明、高麗、といった伝統的な陶器の名品を範としたものでした。このとき、陶磁批評界の第一人者と目されていた奥田誠一によって「陶界の一角に突如彗星出現した」と新聞紙上に大々的に発表されると、もうたちまち陶芸の世界の寵児になってしまいました。寛次郎のいいところは、このような賛辞を得ながらもなお仕事の手を緩めないことです。さらに10年後には高島屋で「一千点展」を行いま

した。30年以上作陶をしている私が自らを顧みても、はたして人様にお見せできるものを今日まで一千点も創っているだろうかと思いますが、実に感服するほどに寛次郎はよく仕事をしました。母の話では、どこへ出かけても帰ってきたら真っ先に向かうのは仕事場、仕事場の様子を見ないことにはお茶すら飲まなかったと、それほどに寛次郎は仕事が楽しく好きな人でした。余談ながら祖母つねと一緒に出かける時がおおむね雨だったのは、きっと寛次郎が雨の時期を選んで一緒に出かけたからなのだろうと私は思っています。

寛次郎のデビューに人々が驚いた大正十年、『高島屋美術画報』十一月号に「両手に土を握った時には」という寛次郎の文章が掲載されました。この文章からは、寛次郎が柳宗悦の思惑に傾倒してゆく、その基があきらかに読み取れます。【資料：河井寛次郎「両手に土を握った時には」(『高島屋美術画報』大正10年11月号)】

寛次郎の初期の作品には「鐘溪窯(しょうけいよう)」という印を入れています。中国の古陶器の写しを行うことですから、写し手の責任を表すために自身の窯名印を入れる必要がありました。この寛次郎の文章に「(支那古陶器は判然と光っているのに)まぎらばしいために銘を入れて置かねばならぬといふ現状は、それが超越した名器を造りだす上に何の依り所になりませうか、私はいつまでもこの窯名の印を押す時には斯う思ひます」とあるのはそういうことです。のちの寛次郎の作品には窯名印は押されていませんが、それはこの文章を書いた寛次郎が、やっと自身の印を押す必要のない境地に到ったということを表しています。稀に昭和10年代に筒書きのあるものがありますが、基本的には寛次郎の印は消えています。自分のものをなんとか作ることができるようになった、という寛次郎の境地の表れなのです。

寛次郎は辰砂(しんしゃ)が好きでした。辰砂だけは生涯にわたり作品に用い続けています。自分の辰砂が手に入るまでは、素焼きの壺に朱い筆で絵を描いて枕元に置き、ついに窯から出て来たときにはしっかりと抱いて寝ていたほどです。「私は私自身を凝視するやうにそれを見つめて、愛撫せずには居られません。今度発表します百五十六点の中にも幾晩も抱いて寝た花瓶や、鉢があります」という一文には寛次郎の感激ぶりがよく表れています。燦然と光を放ちながらも終生このような純粋な気持ちで作陶し続けることができた人でした。

柳宗悦との出会い

寛次郎と柳宗悦の出会いはどのようなものだったのでしょうか。柳宗悦は、大正10年に神田の画廊「流逸荘」で『朝鮮民族美術展覧会』を開きました。朝鮮の陶磁を紹介したこの会場へ寛次郎が出かけたのが、二人の最初の邂逅でした。しかし祖母の記憶によると、そのとき寛次郎は柳の姿を認めながらも挨拶をしなかった。それは、柳宗悦が『越後タイムズ』という新潟の新聞紙上であったか、正確ではありませんが、「寛次郎はあんなものをつくってはいはだめだ」という内容のことを書いたので、寛次郎のほうは「創らんもんが何を言っとるか、なら、創ってみろ」と言っていた、そのような経緯があったようです。はたしてその寛次郎が会場にいることに柳が気付いていたかどうかは定かでない、とは兼子夫人による後日談です。

その二年後に関東大震災が起こり、柳宗悦は京都の吉田山に疎開をしました。ほどなく英国から帰国した濱田庄司が、寛次郎を京都へ来ている柳宗悦に会いに行こうと誘っても行かない、という。濱田に連れられた柳が五条坂に訊ねてきても、寛次郎は仕事だと言って顔を出さない。これではいけないと、今度は濱田が寛次郎を柳の居る吉田に引っ張って行った。自分が悪く言った寛次郎がやって来たので、柳も困った様子だったようですが、そのとき寛次郎が通された部屋には木喰があり、その素晴らしさに一瞬にして思いを理解したのか、「やあ」と柳が現れたときから二人は終生の友達になりました。それまで二人が接する機会がなかったものの、このときには多くを語らずして同じ方向へ進もうとしていることが、はっきりと解りあったのではないかと私は想像しています。寛次郎と柳との出会いはこのようなものでした。

こうしてはじまった交流ののち大正 15 年(1926)に、寛次郎自宅(現・記念館)で柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎の三人が集まり、一晩で「日本民藝館設立趣意書」を書き上げました。先日、日本民藝館五十年が祝われたところですが、この「日本民藝館設立趣意書」が日本民藝運動の基礎になった文章であることを改めて再認識しているところです。

寿岳文章との出会い

いよいよ河井寛次郎が寿岳文章に出会います。寿岳文章は明治 33 年(1900)に明石に生まれ、18 歳で関西学院の高等部英文科に入学します。大正 11 年(1922)に発足した和紙の研究会が、寿岳文章と紙とのご縁のはじまりではないでしょうか。以後、一方では研究のメインである英文学を深めながら、もう一方で和紙を自分自身のライフワークとしました。師弟関係であった柳宗悦と寿岳文章ですが、寛次郎と寿岳文章の交流は、柳宗悦との紙の仕事を通して始まったようです。二人の付き合いは、昭和 41 年(1966)に寛次郎が亡くなるまで続くこととなりますが、交友が最も深かった当時の寿岳文章の仕事を挙げますと、昭和 6 年(1931)年に雑誌『工藝』第 28 号に「和紙復興」を寄稿し、そして昭和 11 年(1936)には、かの有名な『繪本どんきほうて』を刊行しました。翌年の昭和 12 年(1937)から昭和 15 年(1940)の三年間は、手漉き和紙の研究のために全国を行脚し、昭和 18(1943)年、『紙漉村旅日記』を刊行します。昭和 16 年(1941)、『工藝』第 59 号の「和紙特集」では「和紙」を寄稿しています。

おそらく寿岳文章青年は 14、5 歳年上の柳宗悦からおおいに示唆を受け、柳を標として歩んだのでしょう。一方、寛次郎は、京都の吉田山で柳宗悦と会った大正 13 年(1924)から昭和 12 年(1937)にかけて、日本各地のいたるところで木喰発見旅行をしています。

晩年の寿岳文章は、昭和 52 年(1977)、ダンテ『神曲』の翻訳により読売文学賞を受賞し、英文学者として大きな存在になりました。若かりし寿岳文章青年には、英文学の研究を続けて学者になろうという将来への強い思いがありましたので、おそらく寛次郎とは精神史への関心において互いにびたりと合う感覚があったのだらうと思います。寛次郎を訪ねて来る人は、陶芸家としての寛次郎というよりはむしろ、寛次郎と話をすることで「自分とは何者か」というようなことを確かめようとしていたのかもしれない。寿岳文章にとっても、例えば、日

本人として詩人ブレイク、ダンテの『神曲』にどのように対峙すると解りやすく伝わるのか、ということが、寛次郎と会うことで確かめることができたのかもかもしれません。

寛次郎の家に集う

寛次郎のもとには、フランスの美術研究者のオシュコルヌや英国駐日大使のピルチャーといった外国人も訪れています。寛次郎の英語はいわゆるブローケン英語でしたが、外国人に対しても率直な態度で接しており、いたずら好きな一面がありましたので、彼らはそういったこともすべて含めて日本文化の一端として滞在を楽しんでお帰りになりました。昭和 10 年代、寛次郎邸は民間の国際交流機関であるともいわれていました。

黒田辰秋がいうように、寛次郎は 30 代半ばという若さで、一流の工人から一目おかれるような雲の上の存在になっていましたが、それはすばらしい作陶家としての寛次郎よりも、人が学びに行くことができるような存在としての寛次郎でした。なかには外国人の修習生や、ロシアの美術館関係者も来宅されましたが、日本という国を外国に説明するための材料として、寛次郎邸はバリアのない開かれた民間外交応接室のような場所でした。記念館の真ん中にあるあの囲炉裏の間はその象徴です。寛次郎は、この家を自分の家だと一度も思ったことがない、と語っていますが寛次郎邸は訪ねてくるお客さんが集うための家でした。

あるとき、式場隆三郎の紹介で山下清が寛次郎邸を訪ねてきました。彼は寛次郎に問いました。「先生、わたしはこうやってズタ袋ひとつもって日本じゅうを散歩しています。よくものを取られます。アホだから、ここへ置いておいたら何かしら失くなっていく。私は人を信じたらいいのでしょうか、それとも信じない方がいいのでしょうか。」寛次郎は、「いくらでも取られなさい。だけど人は信じなさい。」と返したようです。

寛次郎というのはそういう会話を楽しめる人でした。寛次郎は、弟子と師匠という構図を嫌いました。同じ道を志す仲間、という意識しかありませんでしたから、寛次郎にとって来訪者は皆「お友達」でした。「先生」と呼ばれることも嫌いました。棟方志功は、先にめざめる「先醒」という字を使いました。

昭和 23 年(1948)頃の寛次郎は、心の中で葛藤していました。一生懸命仕事をして、次にはこんな仕事をしたい、次に進みたい、と仕事が追いかけてきました。しかしこの作家としての欲望に真面目に向き合っただけの仕事をする、民藝運動とともに大事にしてきた伝統というものはどうなるのか。否定することのできない新しい自分と、伝統というものを大事にしようと思っただけの仲間とともに生きて来た人生そのものと、相反するものが自分のなかで闘っている。それに対する天からの答えは「今お前がしなければ誰がやってくれるのか」というものでした。つまり、自分は伝統的な陶芸の世界から破門されたのだ、と考えるほかないという考えに至ります。今まで示してきた陶芸制作の世界ではないけれども、自分がつくりたい陶器はこういうものだ、ということだけは示そうという意識で作り始めました。それが、我々が晩年の作といっ

ている非常に力強く新しい寛次郎の作品です。

造形への想いのひとつの現れとして次第に木彫の世界にも入って行きます。これは、まず粘土で原型を造ったのち仏師さんにあらまし創っていただいて、最後に自分がちょっとノミを入れたりサンドペーパーで削りを入れたりして仕上げたものです。まさに表現の世界の産物でしかない仕事は十年間にわたりました。ある親戚の方が、「寛次郎さん、これで用と美ですか？」というほどでした。寛次郎は「私にもやりたいことがあって、遊びぐらいするものだ。」とあって、その世界へどんどん入って行きました。これを見てびっくり仰天した柳宗悦は、式場隆三郎に寛次郎がおかしいから行ってみろ、と。そこですぐに式場が様子を見に行くと、寛次郎はこれまでと何も変わらず一生懸命仕事をしていた。それで柳宗悦も安心した、ということがあったほど、寛次郎の作品の転換ぶりは周りの目を驚かしめました。その木彫はそれまでとちがった感覚がなければつくれるものではないような、烈しい表現のものも多くあります。

『いのちの窓』

寛次郎は言葉や文章も多く残しており、昭和 23 年(1948)に詞集『いのちの窓』(西村書店刊)として出版されました。主に戦時中の昭和 10 年代に寛次郎が書き溜めておいたものを、西村大治郎氏[註：京都室町の老舗染呉服製造卸「千吉」の十二代目当主。京都の版元、西村書店の発行人として、寿岳しづ著『朝』(再版)『荒野に歌ふ』、柳宗悦『神に就いて』などを出版している。] という方が一冊の本にしてくださいました。私どもはこれを寛次郎の「詞(ことば)」と呼んでおりますが、この『いのちの窓』は、寛次郎が裏の白い広告紙を切ったものを腰にぶら下げ、仕事をしていてふと書きとどめておいたものを「今日はこんなことばをもらったよ。」と家族に示したものをまとめたものでもあります。しかし寛次郎は、この本の扉の次には「ここに記されたことばは、すべて私のことばではない。私のことばでありようがない」と記しています。本の後半に、寛次郎が記したことばの意味を「自解」として書いていますが、それを読んでみても判らないところもあります。そのなかから一部を抜き出しまして、寛次郎の世界の一端を紹介します。このような考え方もあるのだと、私の解釈も含めて寛次郎の「詞」を楽しんでいただきたいと思います。

<自分は誰> (<)内の言葉は講演者による)

おどろいて居る自分におどろいて居る自分

これは、皆さんが「すばらしいなあ」「これはいったい誰がつくったのか」と思う、この素晴らしいものを見つけたのはあなたですよ、あなたが居なければこの素晴らしいものはあなたの中にはないですよ、あなたが居なければこの美しいものは存在しないですよ、という詞です。

物買って来る 自分買って来る

これは、自分が求めたものについて、それが素晴らしいものであればあるほど、それは「いい自分を買って来たんだよ」という詞です。

<これから>

此世は自分をさがしに来たところ 此世は自分を見に来たところ
どんな自分が見つかるか自分

これは説明の必要がないと思いますが、人生はどのようにあるかを考えたときに、この世の楽しむべき時間を想像させてくれる詞です。

新しい自分が見たいのだから仕事する
どっかにいるのだから自分仕事する

自分でも思いもかけない結果が出たとき、それもまちががなく自分の仕事です。思いがないのに出てくる仕事は存在しない。良かれ悪しかれ結果にたいして自分はそこにある。そのような詞です。意識しないで一生懸命しているうちに美がそこにある、ということでもあるかもしれません。

追えば逃げる美。追わねば追う美

作為のものと不作為のものとを比べると、不作為のものは真実を含む、ということを経次郎はいいたかったのです。柳宗悦の民藝の考え方です。意識せずにその人の持っている美の世界がその人自身を突き動かして、そこに美が表れ出る。「妙好人」〔註：特に浄土真宗において在俗の篤信者をさす。古くから僧侶や知識人がその行いを称賛した。〕がよい例ですが、昔はこのような人が結構いたそうです。『妙好人 因幡の源左』という柳宗悦の著作があります。小作人の源左は、猫のひたいほどの田んぼを一生懸命耕し、やがて秋が来た。たわわに実った稲がじゅうぶんに頭を下げているところへ、馬がポコポコやってきて、田んぼの端を飲み始めた。それを見ていた隣の小作人が「おい源左、やられてるぞ」と。すると源左は、ふと顔をあげて馬のところへ行って轡を取ると、何を思ったか田んぼをぐるっとまわって反対側のいちばんおいしそうところへ連れて行って食べさせた。「お前はアホか」と隣の小作人が言うと、源左は「人間がうまいと思うものは馬もうまいにきまっているではないか。どうせ食べるならうまいほうを食べさせたほうがよかろう」と。

これは聖人と称される人の話ではなくて、市井の何でもないお百姓さんの言葉です。慈善とか、ボランティアとかいうのではなく、昔の日本人はそういう文化をもっていたんですね。飢饉のときには庄屋さんが蔵を開けたという話もあります。そういうものが民藝思想の背景にはあったのでしょうか。柳宗悦らは、こうした消えゆく日本の文化を懐かしがるのではなく、危機感を持ったのでしょうか。だからこそ当時、民藝運動に天才的な人達が集まり、力が生まれたのでしょうか。ものの動きの中には善いもの悪いものがあっても、運動の本体に在る一番忘れてはいけない純粋なものを、人は記憶しておくべきではないでしょうか。何故それが日本の文化史のなかに位置を占める必要があるのか、将来にわたって検討されなければならないのではないのでしょうか。

<無一物なのに>

わびとさび 貧乏の美 かたづけられた貧乏

この「かたづけられた貧乏」という表現のなかに、日本の文化の精髓があるように思います。あるときにテレビの番組で、若い夫婦が押入のない一軒家を借りて、貧しい生活をしながら生産活動をしていたドキュメントがありました。その住まいをみますと、台所は別としても生活の場にあるものといえば、片隅に布団がひとつ置いてあるだけです。人が生きていくにはこれで足りる、と今の時代にそういうことをする人がいるのです。貧乏で何もないけれども「かたづける」、それは「片づける」ではなく「形をつける」ということです。何もなくても形をつけることのできる精神とはどういうことかを問いかける詞です。

美の正体 ありとあらゆる物と事との中から 見付け出した喜

人は何のために美術を求め、文化を求め、ゆかしさを求めるのか。人は喜びたい、楽しみたい、その願望に応えるものが「美」である。国宝が素晴らしいのは当然であるけれども、そこに人が「美」を見つけてことができなければ無意味なことだ、という反語でもある詞です。あるとき、寛次郎を訪ねて来た記者から、生活の道具の「美」についてたずねられると、「この藁箒、これがなかったら家の中が綺麗にならないでしょう。このざる、なんとまあ素敵なかたちをしているではありませんか、丈夫でしょう。生活がいきているからこんなものが生まれてくるのです。人が必要とするから素敵なのが生まれてくるのです」。美しさは、ひとり美術品と称されるものの中のみあるものではなく、生活の喜びのなかにこそあるものだと寛次郎の考え方です。

機械は新しい体

人間はいまや IC チップを駆使しています。もはや人間の手指の、足指の動きで行き届かない世界へ行ってしまうかもしれません。でもそれは、人間の頭の中に、そうあって欲しいという念願がなければ生まれないものです。人間の思考の延長上に機械は存在する。機械と工藝は対峙するか、敵対するか。

寛次郎は、機械は人間の思惑ののちに生まれてきた体の延長の一部であると考えました。機械が正しく生産というものに結びついたとき、大量生産が可能になり、安価になる。また人間にスピードを強く求める気持ちがなければ、IT というものは生まれなかったでしょう。

決して機械に反目の気持ちをもつべきではない、ともに生きていくのが人間の社会である、という寛次郎の持論を表す詞です。私たちは、文明と文化を対峙させようとはしますが、文明がなければ 65 億もの人間が地球上に住むことはできません。機械とともに生きていくべきなのでしょう。

<仕事って>

暮しが仕事 仕事が暮し

人は日々仕事だけで生きていけない、といいますが、生きていくこと自体が大事な神様からもらったいのちの生かし方ですね。動物が自殺をしないように、「生きる」ことは遺伝子のなかに刷り込まれている本能で、それは生命体としての仕事です。そう考えると、日々の暮らしそのものが仕事である。これが寛次郎の詞です。人は、日々の仕事を大切にしたら暮らしをしなくてはいけない、ということを伝えているのではないのでしょうか。

おわりに

私は「河井寛次郎記念館」に携わって 45 年間すぎこしましたが、当初も現在も何も変わりません。ですが、それは日々の仕事としてやっていくべきものです。人にはそれぞれの役割があるから、そんな仕事をしている人もいます。濱田庄司が言っていましたが、轆轤でコップひとつをつくるためには「数十年プラス一瞬」の時間がかかります。永い年月の間のその一日一日がどれだけの価値があったかといえ、なんでもない一日がほとんどです。そのようなことを最近よく考えるようになりました。

[文字起こし：長野裕子]



両手に土を握つた時には

河井寛次郎

鏡を對照して
よりよきものを

造つて見たいと思ひます。然し、その爲めに、斯うしたら美しいとか、よく見られやうとか、と思ふ心持から超越したいと思ひます。

或はまた、こんなものを出したら突はれはすまいか、と心配をしたり、恥しいと思ふやうな心持をも捨てる事が出来たらと思ひます。

何等かうした殊更に衝ふさいふ程のことでもなくとも、そのものを造り上げる上に爲害を施したものは、さうしても何處までも突返りて来る所の力が無いやうです。加之、こゝろなく車しい心持が見逃かされるものです。もつゝ自然的に本能的に、無心に造り上げられる所まで進みたいと思つて居ります。

無心に何の爲害もなく自然に私の頭の中にあるものがその通り手に働いてその形が生れてこそ、そのものに眞の力が表はれるべきだと思ひます。

私のあたまたちの中に
あるものは私の手

で造り上げられたものよりも、今一度

よいものがあるやうに思はれます。然しそれが今の私の手ではさうしても十分に表現する事が出来ないのです。私は自分の手が私の思ふやうに、考へて居るやうに、自由に働か得たらさう常に残念に思ひます。またしても私の思ふ通りに表現されて居ないものに、骨を折つて、時間を費して造り出されたものはいつとも不満足な、何處かに仕方なしに寛恕されるべき欠點を持つて居るものしか、造り出せないといふことは全く現在の私としては、私自身の手が、思ふやうに動かないといふ事に對するのです。そして何處かしら突返りしい顔をして、生れて来るのは何時も、これでは逆もまた、と思ひます。古い名器、殊に支那の元から明の中葉頃までの古器を見るとき、何處さなく力強いものが私の前に押し寄せて来るやうに思ひます。殊更らしい所なきは少しもなく、形の上にも、手法の上にも



花瓶文見紫花

殆んど爲害を施してありません。それでいて非々々追つて来るものが

あるのです。我願のものには斯うした力のあるものはあまり多く出来て居ないやうです。まつ強ひて求むれば、古伊賀か古備前もの、斯うした氣分を味ふ事が出来た。また木米の作にも時々斯うしたものを見出す事がありますが、それ以外にはさうも小細工に走つたものばかり

りで車しい見わたいたねらひの小さいのばかりです。そこになるさ、支那のもの、作者も誰であるか全くわからぬ無印のもので、よし印があつても、それは萬年製をいふやうな、一時代を表はしたものです。一向小さな狭い餘なきに因はれて居ないやうです。なんなんもの、中に放り出されても、然かも無餘の支那古陶器は例然と光つて居ります。

いつになつたら
ほんさうに

私のものが造り得られるだらう。それに斯うして、別に他と區別する爲めに、印を附けなくともよい筈だ。いつまでこの貧弱なものを造つては、印を附けて意に入れる事を續けて行かねばならぬのか知らむと思ひます。

然しまた、幾分でも私の思ふ通りに出来上つたものを無から取り出した時には、唯私心は、まだ物足らぬ點を見付けて不満ではありますが、それでも嬉しいと思ひます。そして我知らずそれを抱いて夜も放す事が出来ません。私は私自身を満足するやうにそれを見つめて、空想せずには居られません。今更發表します百五六十點の中にも幾度も幾度も抱いて花瓶や、鉢があります。此等は形を變へた私自身として皆さんに見られる事になるのです。さう思ふさ何ぞなく願が赤くなるやうな氣がして居ません。然し此等は決して完成されたものでないのですから、まだ、研究の途上にあるものとして十分足りる所は御指示を乞ふより外ありません。只體それを相願いたします。(文井氏記者)

まさらはしい爲めに鉢を入れて置かねばならぬといふ理は、それが超越した名器を造り出す上に何の據り所になりませうか、私はいつまでもこの豫名の印を押す時には斯う思ひます。

寿岳文章の生きた軌跡と新村出

新村出記念財団重山文庫 新村 恭

昨年（2017年）、私は『広辞苑はなぜ生まれたか 新村出の生きた軌跡』を書きました。今日の講演タイトル「寿岳文章の生きた軌跡と新村出」はこの本をまねたものです。

あらためて、お話するために資料を読み、二人の交友関係に心底感心しました。寿岳文章が専門とした英文学、和紙、ダンテといったそれぞれの分野について私は、全くの門外漢でしかありませんが、新村出とその資料についてよく知っている、ということでお話をさせていただきます。

はじめに 寿岳文章が生まれ育った地を訪ねて

新村出と寿岳文章のつきあいは、寿岳文章が京都大学に入ったときから始まりますが、講演をここから始めるわけにはいきません。まず「寿岳文章の生きた軌跡」というからにはその生まれ育ちがどのようなものであったかということも知っておく必要があると思い、神戸の友人に車を出してもらって、現地調査に行きまわりました。寿岳文章は寺で生まれ育っており、そのゆかりのお寺を見に行かなければならないと思い立った次第です。

ゆかりの三つの寺は、ひとつは神戸市の西の外れにあり、ひとつは北の外れにあり、もうひとつは市の中心部に近いとはいえ、狭い急坂を上ってゆくという、いずれも極めて交通の便が悪いところにあります。

寿岳文章が生まれた龍華院りゅうげえんというお寺は、「高和山性海寺たかわさんしょうかいじ」という大きなお寺の塔頭たつちゆう支院です。お寺に近づくと急に、車がすれ違ふことができないほどの細い道になる、その少し先に龍華院はありました。住職にお話を聞いたところでは、もともとこの高和山性海寺は檀家を多く持って経営をしているというお寺ではなく、二百町もの大きな所領を持つことで経営をしていたそうです。さすがに二百町はオーバーですが、二十町でも広いです。ところが明治の廃仏毀釈や農地改革などにより、三十あった塔頭が今では三つになり、龍華院も田んぼのなかにぽつんと建っているような状況でした。本寺の性海寺の本堂は文化財としては残っていますけれども全くの無人です。墓地を経営しているということもありません。

小学生になった後、寿岳文章は一番上の姉の嫁ぎ先のお寺である石峯寺しやくぶじに養子に行くことになります。このお寺は神戸のいちばん北の外れにあります。車で龍華院から京都大阪と播磨を結ぶ旧街道を向かいますと、淡河おんごというところに出ますが、その先、寿岳文章が卒業した小学校である「好徳小学校前」という交差点からかなり走って山の突き当たりに石峯寺はありました。生家本寺の性海寺の所領がそのまま「性海寺」という地名になったように、この石峯寺はもともと「石峯寺村」というかなり大きな所領を持っていました。ほとんどが棚

田と山林のようなところとはいえ、それでも広い所領を持っていて盛期には十七から十八の塔頭があったといわれています。こちらも今では三つになりましたが、立派な本堂が重要な文化財として残っています。この石峯寺の養子となって僧の修行をしていた頃のちに回想している文章があります。

私は姉の嫁いでいる播州の奥の真言宗の山寺で、師僧すなわち義兄のあとについて法事や葬式の助法をしていた。二里も三里も離れた寺へ手伝いに行って、日が暮れてから途中に家一つない山道をただひとりで帰ってきた恐ろしさは昨日のようだ。墓地の側を通るときや、気味わるい水をたたえた池と池との間の細道を通るときなどは、小さな提灯の燈だけを頼りに、ややうつむき加減になって、一心に不動明王慈救呪〔災害を避ける呪文〕をつぶやきながらすすたいそいである。田舎の葬式に於ける小僧の役目は、行列が葬家から墓に行くまでの間、両手に繞鉞にようぼちを持っていて、助法僧の親玉がチェーンと引磬を打つとチャランと鳴らすに在る。村によっては墓まで一里近い道のりがある。飲み食いに暇どって葬列が出るのはたいてい夕暮に近く、冬などは完全に途中で日が暮れてしまう。雪まじりの木枯が吹きあれて、墓につづく山の小みちの空気は身を切るように冷たい。

（「蛔蟲と河豚」俳句誌『断層』昭和15年）

好徳小学校を卒業した寿岳文章は、そのあと東寺中学校に入学します。おそらく東寺中学の宿舎に寄宿し、法事や葬式のときに手伝いをしていたのでしょう。東寺中学校は京都の東寺のすぐ隣にあり、現在では洛南学園となり、洛南高校と附属中学とがすぐ隣にあります。が、どういうわけか洛南高校附属小学校は、後に寿岳一家の住まいとなる向日市にあります。この洛南学園の校歌と、真言宗の大学である高野山の種智院大学の校歌は、いずれも寿岳文章による作詞です。

東寺中学を卒業すると関西学院高等部に入りますが、この学校へは真言宗の大龍寺だいりゅうじに寄留して通っています。この寺は空海が入唐前に訪れ、帰朝後ふたたび来たので再度山と号され、そのまま地名にもなっています。ここは急な山道、坂道のなかにあります。当時関学は神戸市灘区の王子にありました。今でも平日はバスが通っていないようなところを、歩いて通っていたのでしょうか。好徳小学校にも歩いて通っていたとすれば、学生時代は通学に歩くだけで足腰がかなり鍛えられていたのかもしれませんが。

三寺とも、周りに民家はほとんどありません。ですから自然豊かな中で、大いに読書ができたことでしょう。寿岳文章は寺という仏教の環境のなかで生まれ育ったということは、はっきりしています。完全に仏教人です。

I 新村出と寿岳文章の交友、人間関係

重山文庫には新村出と寿岳文章の往復書簡が所蔵されており、これらの書簡の日付、葉書であるか封書であるか類別してリストアップしたものをホームページで見ることができます。往復書簡の通数は、レジュメでは629通+ α となっていますが、このプラス α というのは、まとめて整理保管している書簡のほかにも、日記の間や、研究ノートの間、本の間などにはさんであるものがまだあるのです。そのような書簡は『紙漉村旅日記』の間にはさんであったりするものは確かなのですが、全ては把握できていませんが、十通は下らないと思います。

先に述べましたように、二人の付き合いは、寿岳文章の京都大学選科生の頃から始まりました。京大の図書館に新村出をしばしば訪ねたことを、のちに寿岳文章が回想していますが、お互いに住まいを訪ねて談笑することもじつに多かったようで、これは新村出にとっては大変珍しい関係だったのではないかと思います。その様子がよくわかる比較的初期の書簡をごく一部ですがご紹介しましょう。

最初に新村出の寿岳文章宛です。

本夕は久々にて君に接し、而も愛書読書について君に接し、こよなき喜びをおぼえ候
(昭和6年9月16日 新村出寿岳文章宛〈ハガキ南禅寺北宛〉)

きょうは幸なる半日をすごし候。毎々ありがとう存候。昨年三月二十五日の日記に云わく「晴れ、うららかなる日和、夕ぐれ半月中天にかかる向日町向日庵よりのかえりじ、藪かげの農地の地ざかいに連翹^{れんぎょう}のつぼみいちはやくふくらめるをみとむ。いまだ木々の芽もめぐみいでぬうちなり。」きょうのことも亦日記にかきつけておくべし。来春のおもいでぐさ、たのしかるべし。山門名跡志を^し読みし候に、向日の里は、ほととぎすの名所なるらしく「なくやむかひの山ほととぎす」などのうたみえ候。

(昭和10年4月3日 新村出寿岳文章宛〈ハガキ向日庵宛〉)

新村出にとって和歌を詠むことは生活の一部でしたが、連翹の里である西向日を詠んだ一連の歌が残っておりますのでご紹介します。

連翹の町 西向日町

連翹の花のさかりをたずねきぬまた来む春のおぼつかなさに
たまきはるいのちなりともこの春のはなをし愛でむ連翹の里
連翹の村一めぐり去りあへずまた一めぐりめぐり来にけり

次に、寿岳文章の新村出宛ハガキです。

昨日は長く御邪魔いたし、お話やら御馳走やら数々のおもてなしを受け、近頃うれしき半日にて候らいし。
(昭和11年2月17日 寿岳文章新村出宛ハガキ)

昨日はつい長居いたしまして、あとで咳にお困りのようなことなかりしやと案じております。
(昭和12年5月3日、寿岳文章新村出宛ハガキ)

新村出の付き合いのなかでも、これだけ一緒に楽しく談話を交わした相手は他にいないのではないのでしょうか。また、寿岳文章の京都大学時代の書簡からは、新村出が就職の世話をしていたこともわかります。

一昨日、直に書状相認め先方へ差出し候処、本日返書まいり、乍遺憾既に決定済のよし、小生も残念に存候。
(昭和2年4月1日、新村出寿岳文章宛〈封書南禅寺北宛〉)

……京都女子専門学校の英文科に、このたびいよいよ中等教員無試験検定の特典が下附せられたるやにもれ聞きました。昨年、先生より小生を同校へ御推薦下さいました節は、すでに空席がございましたが、その後朝倉校長にお出会いました時の話に、無試験検定の特典が下れば英語の時間数も増すであろうゆえ、或は教師を要するかも知れぬとございました。もしさようの事がございまして、小生でも採用していただければと存じ、甚ださしでがましきことながら、昨年の御厚情に甘え、先生に再び右につきお願いいたしたいと存じ……朝倉校長に小生のことしかるべく御伝え願えませぬでございましょうか。只今は中学に一週三十二時間も教え、こころざす勉強も思うにまかせぬ有様にて、もし少しなりとも今よりよき境遇にあり得たらば、どんなにうれしく思うこととございましょう。……

(昭和3年1月23日、寿岳文章新村出宛〈封書〉)

時には寿岳文章の随筆に厳しい批判をして、「丙の下」と書いて送りつけることもありました。当時は「甲乙丙」のなかでもさらに良いものは「甲の上」でしたが、「丙の下」ですから最低です。

II 新村出とともに歩んだ寿岳文章

1 江戸中期の真言宗の名僧慈雲尊者への敬仰

寿岳文章が若いころから影響を受けた人物に、江戸中期の真言宗の名僧である慈雲尊者じうんそんじやがいます。慈雲がいかなる名僧であったかについては、寿岳文章が書いたものからよく伝わってきます。英文学の教師として詩歌に明るい寿岳文章は、慈雲尊者鑽仰会編の『慈雲尊者の面影』(昭和10年)に「尊者の詩歌」について書いています。そして、晩年に訳したダンテ

『神曲 天国篇』の巻末「神曲改訳の作業を了えて」という文章の冒頭にも、次のように、慈雲尊者への敬仰の念が綴られています（集英社、1988年）。

……仏教各宗派の教相の別に拘泥せず、その勝れているのを飽くまで採り用いるのが、有徳の僧となる所以だというのである。小人は、ややもすれば自分の所信だけを墨守して、楯の半面を忘れやすい。結果は極めて固陋な島国根性となり、地方的感情となる。尊者は徹底した愛国者であると共に、いな愛国者であったればこそ、他の半面、また徹底した世界主義者でもあった。これが、尊者の学風行跡に、悠揚迫らない大海の趣きの見られる所以である。

……尊者の梵学は、ついに梵学津梁^{ばんがくしんりょう}一千巻の編纂に結実した。ひとくちに一千巻とことも無げにいうが、この学問の伝統がほとんど萎靡沈滞していた当時であって、近世初頭の人文主義者たちがギリシア=ローマの言語を読み解くのに幾十倍する困苦と不便とに耐え、『群書類従』をはるかにしのぐこの浩瀚の編述をなしとげたこと、まことに驚異である。……

……フランスの碩学シルヴァン・レヴィは、明治三十一年、親しく高貴寺を訪ねて三日間をその学寮にすごし、尊者の偉業に随喜渴仰した。……

〔末尾近くに、尊者の母の慈雲宛書簡を紹介〕

今思い出すと、私の青春が描き出す人間模様も、相当に多彩であった。エスペラント運動一つをとりあげても、いろんな信条、いろんな主義、いろんな国籍の人物が、私の周辺をからまりあってゆく。しかし、慈雲尊者を軸として、事や物の本源に遡ろうとする私の意欲は、人生行路のどの面でも、強まりこそすれ、決して薄れなかった。

慈雲こそ、まさにわが師、わがヴェルギリウス〔『神曲』の案内人〕であったのだ——

以上が齢八十八の米寿にあたり、最後の『神曲』大改訂を了え、これだけは述べておかねばならぬと思うすべてである。

寿岳文章が生まれたのは、新村出が結婚した年で、ほぼ親子ぐらいの歳の差があります。当然、たいていの経験は新村出のほうが先なのですが、二人が同じようにかなり幼い頃から読んでいたであろう書に慈雲尊者の『十善法語』というものがあります。これは教書としてはかなり著名なもので、殺生するなかれ、盗みをするなかれ、といった「べからず」をいくつか並べて「十善」を説いたものです。

新村出は言語学が専門ですので、サンスクリット、梵学の調査にはかなり興味を持って現物にあたりました。明治42年のパリ遊学中には、シルヴァン・レヴィの授業を受けています。シルヴァン・レヴィはフランスのインド学者、東洋学者で、のちに日仏会館の初代館長を務めています。新村出は「慈雲尊者伝記資料」について詳説した論考を書き、「慈雲尊者

の母」という論考では慈雲尊者の母の手紙の紹介をしていますので、新村と寿岳文章とのあいだで慈雲尊者のことが話題にのぼることがあったのは、間違いのないところです。先に挙げた寿岳文章が紹介している慈雲の母の書簡についても、新村出を通して知った可能性が非常に高いのではないかと推察しています。

2 『キルヤム・ブレイク書誌』刊行、書物への関心の高まり

18～19世紀イギリスの詩人、画家であるウィリアム・ブレイクは寿岳文章が最も影響を受けた人物であり生涯の研究対象でもありました。2013年には新しく岩波文庫の寿岳文章訳『ブレイク詩集』が編まれています。このウィリアム・ブレイクについて、伊藤長蔵という神戸の出版人から依頼を受けて、新村出が寿岳文章へ手紙を書いています。これらの書簡をきっかけに生まれた伊藤長蔵との縁が、やがて『キルヤム・ブレイク書誌』の刊行へと繋がることとなります。『キルヤム・ブレイク書誌』の重要性については今回は触れませんが、書物の刊行に伊藤長蔵という人物が大きな役割を果たしていたということです。この書簡に登場する笹岡民次郎は、著名な図書館人で、京都大学図書館の司書官長として館長である新村出の片腕となっていた人物であることを補足しておきます。

神戸の人にて出版界の新人なる伊藤長蔵氏、W. Blake の事に付助力者を得たしとの事、貴所 Blake の事御研究の由に付、推薦いたし置しが、一度御面談被下度、明後（金）午後三時頃大学へ来る筈に付、若し一中にでもお出の都合□□御立寄被下まじきや。

（昭和2年7月6日、新村出寿岳文章宛〈ハガキ〉）

拝啓 過日はブレイク書史の件につき御配慮に預り、厚く御礼申上候。さて毎々御手数を相掛け恐縮に存じ候えど、ブレイク書史編纂につき近日中に一度笹岡民次郎様にお目にかかりて御伺いたさきことども有之……

（昭和2年7月11日、寿岳文章新村出宛〈ハガキ〉）

拝復 過日は御面倒なる事おたのみいたし候処、早速お引うけ被下、伊藤氏もよろこびしことに有之候。……

（昭和2年7月13日、新村出寿岳文章宛〈ハガキ〉）

…私は新村博士の紹介で、始めて伊藤長蔵氏を識った。…私が遂に書物道の一筋につながるに到った因縁の一半は、伊藤氏の出現によるといってもよい。…伊藤氏がずっと出版事業を続けていてくれたら、恐らく私は自分で向日庵私版をおこさず、……〔相談役〕の役割を、『ぐるりあ・そさえて』のために果たしていたであろう。

（寿岳文章「自装本回顧」昭和10年『寿岳文章・しづ著作集6 書物の共和国』春秋社、所収）

この頃、寿岳文章がウィリアム・ブレイクの詩を翻訳刊行する傍ら、妻の静子もハドソンの

『はるかな国 とほい昔』を翻訳刊行しています。寿岳文章の旺盛な出版活動は、書物出版においても先輩格であった新村出に大きく支えられていたようです。次の書簡からは、新村出が出版社に橋渡しをしていたことがわかります。

…ハドスンの翻訳〔しづ訳『はるかな国 とほい昔』昭和一三年、岩波文庫〕につき一方かたならぬ御配慮にあずかり、感謝にたえませぬ。先生の御言葉により、先般発行書肆に対し、翻訳権ならびに、さしえ複製許可譲渡を依頼いたしました。……静子に代わりまして厚く御礼申し上げます。
(昭和8年7月12日、寿岳文章新村出宛〈封書〉)

3 和紙研究の道へ

寿岳文章は、仏教であったり、ウィリアム・ブレイクであったり、和紙であったり、ダンテ だったり、と全く別のようなことを同時にやっています。娘の章子先生によれば、父は全く別のことを同時にやるように見えるけども、本人のなかでは全て繋がっているらしい、ということを行っています。なかなか私にはまだその繋がりが理解できません。和紙研究もそのなかのひとつでしたが、寿岳文章を書物愛の世界から和紙研究の道へ誘ったのは新村出である、ということはかなりはっきりとしています。

…新村先生が、日本の紙を調べておく必要があるというので、自分はもう齢をとってくるから、まあおまえがかわりに調べてくれ…

(寿岳文章「私の自叙伝 紙漉村行脚のころ」NHK教育テレビ、1980年11月)

これと同じことが『紙漉村旅日記』の序文にも「老来、山間僻遠の地など意に任せぬゆえ、自分に代ってやるように」言われたと書かれています。昭和11年に新村出が主宰する和紙研究会では、寿岳文章が趣意書の素案を書き、中心メンバーとして和紙研究に尽力するようになりました。そのあとに出た『紙漉村旅日記』は帝国学士院の有栖川宮学術奨励金によるものですが、この奨励金は新村出の推薦により受けたものでした。重山文庫には和紙の研究ノートが13冊残っていますが、この学士院への申請書がノートに挟まれて残ってありました。どこの地方に行くといくらかかる、と地方別に金額が書かれており、かなり丁寧に趣旨と費用を書き出しています。一年間に1000円あまり、三年間のトータルで3456円という申請を出しています。当時の葉書2銭から換算すると100万円ちょっとでしょうか。ですからこのような私たちで寿岳文章と静子の紙漉村調査は、新村出の御膳立てで行ったといえるのではないのでしょうか。申請通りの額が出たかどうかはわかりませんが、新村出が個人としても、かなりサポートをしていたことが次の書簡からもわかります。

きょう帰宅いたしましてから、いただきましし御心尽しのもの開封いたしましたところ、

思いもよらぬ多額なのにびっくりいたしました。こんなにいただくわけではない、一部分だけいただいて、あとは御辞退せねば何としても申訳がないと考えてもみましたものの、よくよく考えてみますと、和紙研究にできるだけ進ませようとの、先生のあついお心がこもっているように感ぜられ、… 感涙にくれました。……

(昭和一四年四月一九日、寿岳文章新村出宛〈封書〉)

昭和15年8月、新村出と寿岳文章は杉原紙の研究のために兵庫県の杉原谷を一緒に訪れています。杉原谷が杉原紙発祥の地であるということを確認するための調査でした。これは地元にとっても杉原谷の歴史にかかわることとして一大事でした。

この調査については新村出筆の『杉原谷誌』という詳しいノートが残っております。昭和14年のはじめから書き始めていますが、このノートのなかに、昭和14年1月13日付の斎藤茂吉の葉書が挟んでありました。斎藤茂吉から門下生である杉原谷出身の山口茂吉を紹介したという内容の葉書です。山口茂吉がちょうど東京に出ているので、学士会館にいる新村に会いに行かせるということで、実際に4月18日に学士会館で二人が会っていたことを示す、そのときの山口の名刺もこのノートの中に入っています。そのようなことから調査の記録まで、さまざまなことをこのノートに記しています。

この杉原谷調査については、一方の寿岳文章の杉原谷紀行にも、昭和14年に行こうとする企画が果たせずに15年になったと書かれています。杉原谷出身である山口茂吉と何度も手紙のやりとりをして細かな指示設定を行い、昭和15年8月2日、3日に念願の杉原谷調査が実現した、ということだったようです。このときに寿岳が撮った写真などもこのノートに貼り付けてあります。二人は名塩にも一緒に調査に訪れており、和紙研究の道とともに歩んだ間柄でもありました。

4 ダンテ『神曲』の翻訳

寿岳文章は東寺中学時代に教わった英語の非常勤講師が京大英文学科の上田敏門下生だった影響で、『海潮音』が座右の書になったと回想文に書いています。これが寿岳がダンテに近づいた始まりだったかもしれません。上田敏の没後、彼の『神曲未定稿』を読んだことが、訳したダンテ『神曲』の序文に書かれています。

越えて一九一八年の春であったか、京都の星野書店から、上田敏『ダンテ神曲未定稿』が限定販売されたとき、中学五年生の私は読みたくてたまらず、顔見知りの書店、寺町三条上ル若林春和堂に赴き、事情を話し、貸してもらい、一晩かかって写し終り、翌日返しに行ったことを覚えている。

(寿岳文章訳、ダンテ『神曲 地獄篇』「序」集英社、1974年)

また、寿岳はダンテ研究者として知られる大賀寿吉と「ブレイク死後百年記念展覧会」で会

っています。このあとダンテに向かい、実際に翻訳の仕事を始めていくのは1967年に新村出が亡くなったあとになりました。

〔ブレイク死後百年記念展覧会で〕ブレイクが製作した七枚の銅版挿絵実物の出展に際し、私は在野のすぐれたダンテ学者大賀寿吉の知遇を得たからである。……私は翁と交遊を密にし、翁からしばしばダンテの偉大さについて聞かされ、貴重なダンテ文献をもらった。……翁は私に向かって、君はいまブレイクに専心しているが、そのうち必ずダンテにとりつかれる日が来るであろう。来なければならぬはずだと言った。君がもしダンテを勉強するなら、^{いし}苦みない援助を与えよう、とも言った。

（寿岳文章訳、ダンテ『神曲 地獄篇』「序」、集英社、1974年）

一方、一高時代の新村出は大変な文学青年で、森鷗外訳の『即興詩人』からダンテ『神曲』の存在を知り、のちの欧州留学の際に遊学したイタリアで初版の原本を観た、と回想しています。新村は、南蛮・キリシタン関係の随筆を多く遺していますが、『南蛮更紗』（改造社、1924年）には「私は座右にあった邦訳の『神曲』を手にした。それは山川丙三郎君が心血を注がれた訳篇である」（『地獄小話』1923年、初出不明）とあり、『神曲』からの例示も多く、かなりよく読んでいたのだらうと思います。

上田敏は新村出の京都大学の同僚で同じ頃に着任しています。新村出が明治42年4月に帰国してから大学がはじまる9月までのあいだ、当時は京都大学に単身赴任していた上田敏と寓居が一緒だったことがあります。それより以前、パリに留学したときに住んだ家は、上田敏が出たあとに新村が入った、というようなこともあり非常に親しい友人でした。はたして本当かどうか、寿岳文章が一晩借りて写したという上田敏の『ダンテ神曲未定稿』ですが、この星野書店から出た本は新村が中心になって刊行したものだと思います。重山文庫にある3冊の『未定稿』のうち「訂正用」という文字が入ったものがあり、新村が序文に助言、例言、凡例を書いておられます。

新村出は大賀寿吉とも親交があり、重山文庫には大賀寿吉からの新村宛書簡が11通残っていますが、そのうちの1通はこの『未定稿』の誤植の指摘です。京大の図書館には非常に優れたダンテの文献資料が、大賀寿吉の出身である岡山の川から名前をとった「^{きよこう}旭江文庫」として残っているのも、新村との縁が関わっているのだと思います。その後、昭和25年、新村は日本ダンテ協会創立にあたって会長に就任しています。

付 両者の好んだ西行法師の和歌

慈雲尊者、ウィリアム・ブレイク、和紙、ダンテ、という寿岳文章と新村出に共通する四つの関心について述べましたが、もうひとつ極めつきともいえるものに、真言宗の僧である西行法師の和歌があります。これは、西行69歳のとき、再び奥州に勸進に行き、東海道の難所の中山峠を越えるときのもので、新村出の最も好んだ歌のひとつです。

年たけてまた越ゆべしと思いきや命なりけり小夜の中山

この歌について、新村は次のように述べています。

(記者から)好きな歌を三首ばかり聞かせてください、と望まれたのでトッサの思いつきに、人麻呂の「夕浪千鳥」の一首と、式子内親王の「玉の緒よ」の一首と、最後に「佐夜の中
山」の西行の名歌と、これら三首をそれぞれ妙味と思うとろを説いてきかせたことがあつた。ことに西行のこの一首は、……それが郷里に縁がふかいばかりか、いまこの老境に達してはいよいよ深くこの名歌に心がひかれるのである。

(「私の歌歴自叙」『新村出全集』第13巻)

中山峠は現在の掛川市の北方で、新村の生家の関口家があった菊川に近いので親近感があるわけです。そして、「命なりけり」＝「命あつてのものだなあ」に強く惹かれたと思われま
す。

寿岳文章は『新村出全集』第9巻「和紙篇」の「解説」を書いています。が、「講演に随想に、
好んで引用された歌」としてこの歌を冒頭に挙げて解説をはじめています。文章もこの歌を大
変好んでいたようで、次のような本歌取りの二首があります。

年たけてまた相見むと思ひきやいのちなりけり播磨杉原(杉原紙研究所寿岳文庫)

年を経てまた鏤^{るく}句すべしと思ひきや命なりけり神曲改訳(神曲改訳の作業を了えて)

両者は歌の好みまで似ていた、ということをご紹介いたしました。

Ⅲ 寿岳文章の新村出への想い

まとめとして、想いあふれる新村出への追悼文をご紹介します。これまでの両者の経過を見
ますと、寿岳文章によってこのような文章が書かれるのも、もっともだと思われるのではない
でしょうか。長くなりますが、追悼文集『美意延年』(新村出遺著刊行会、1981年)からご紹介
します。最初は、「恩師の面影をしのぶ」と題して寄せたものです。

……しかし、私が新村出先生を「恩師」と呼ぶとき、先生の編まれた『広辞苑』のこの
釈義では、満足しきれないものがあまりに多く付着している。大学生時代だけに限ってみ
ても、受けた教えが他の恩師たちのそれと比べてけた違いに多く、深く、また広く、「世
話になった」程度に到っては、新村先生と比べられる恩師は、ほかに一人も見出せないか
らである。先生は、私にとって、文字通り「慈父」であり「悲母」であった。つまり、英

語で表現すれば、不定冠詞でなく、「定冠詞」をつける恩師は、新村先生以外に、私には無い。

寿岳文章は、幼少期は家庭環境に恵まれなかったということもあり、いつそう強く新村出を「慈父」「悲母」のように感じていたのだらうと思います。続きです。

……言語学が先生の本命であったから、かかわりをもつ知識の領域の広汎なのは当然だが、先生の場合、その整理は、「年譜」の形をとって行われたように思われる。天体にせよ、動植物にせよ、その他自然界・人間界、もしくは超自然界のあらゆる事象について、先生は一つ一つ年譜の原簿を作り、その事象についての知見を得るたびに、書きこみや、貼りこみをなされる。その年譜原簿は、厩大な数と量にのぼるであろう。戦前から戦後にかけて、私はその一冊『慈雲尊者年譜』を借りていたが、先生自身が墨書された年譜本来の基礎的な史実を軸とし、長年月にわたって、新しい知見を得るごとに書き込みや貼り込みが加わり、必要とならば朱筆によるコメントもあるので、その年譜は言わばおのずと『慈雲尊者事典』となっている。……

私は京大文学部学生するとき、言語学ではなく、英文学を専攻し、石田憲次先生やエドワード・クラーク先生にも親近したが、冒頭にも述べたように、在学中はもとより、京大を出てからも、学問と人生の両面にわたって、最も親身な御恩をうけたのは新村先生であった。それは、先生からいただいた書簡の夥しい数からも言えることである。ことに忘れられないのは、私が傍系の私学から選科生として京大へはいったので、何かと身分上不利なのをいつも念頭に置かれ、学位だけは取るよう、折にふれてすすめられた。だから、すでに定年退職されていたにもかかわらず、戦後まもなく私の提出した学位請求論文が教授会で審査決定される当日、先生の気のもみようは大変なもので、現職の教授と連絡をとられ、通過したとの報告を受けられるなり、電話でいち早く私の家へ知らして下さった。その日その時刻、私は他に用事があって、京大文学部の構内にいたのだが、教授会が終り、知り合いの同学の教授とも行きあったにもかかわらず、彼は審査の結果につき何も言わず、通りすぎた。私が新村先生を「慈父」「悲母」と呼ぶゆえんである。

次は、新村出逝去直後、1967年8月21日の『東京タイムス』に「新村出先生の思い出」として掲載された追悼文を『美意延年』に収録したものです。

先生はどのような学説にも、まず心をむなしゅうしてはいつていき、とるべきものがあればととの、非常に広やかな態度を持っておられた。だから私が特異な例ではなく、先生の教えを受けた人たちは、みな一様に私と同じ思いにふけていることだろう。

先生のお名前とお仕事は、私が京都大学文学部の学生となる前から存じあげており、ひ

そかに敬慕の念を寄せていた。大正十三年の春、選科生として京大文学部の入学試験を受けたとき、学問に従うものの心構えについて書けとの論題が出た。どの先生が読まれて採点されるのやら、もちろん分らなかったが、私は世の中が乱れに乱れていた十四世紀に、戦争のための流れ矢を避け、東寺の五重塔の楼上で講義をしたと伝えられる（事実ではないらしい）^{つうせん} 梶延という学僧の事績を取り上げ、もの学びする者はすべからくこの覚悟を持つべきであるとの趣旨をつづった。読んで採点された新村先生は、私をマークされたらしい。後年、先生はわざわざその答案を私に返されたが、分に過ぎた点数がつけてあった。

先生と私との水魚の交わり（あえてそういわせていただく）は、これを契機として始まる。

私は英文学を専攻したので、在学中先生からは言語学の普通講義を聞いただけなのに、急速に先生と親しくなっていたのは、当時先生が京大付属図書館長をなさっており、書物好きな私が、館長室に先生をたずねて、あれやこれや書物談をかわしたことも、少なからずあずかっているだろう。

私が京大を出た年に、第一次世界戦争が産んだ一代の風雲児で、すでに早く故人となった伊藤長蔵氏が、範をイギリスのウィリアム・モリスに取り「ぐろりあ・そさえて」という書店を神戸に設け、私と同郷のよしみもあって新村先生のところへ一緒に何くれとなく相談にいったことも、先生と私とを緊密に結びつけるきづなとなった。先生の伊曾保物語古版本展も、柳宗悦氏の記念すべき著『工芸の道』も、私の『ブレイク書誌』も、すべて伊藤氏の熱意の結果であった。

書物愛から出発して、私が和紙の研究に打ち込むようになったのも、先生の導きによるが、それからそれへとつながる学問の糸、情愛のほだしをたぐってゆけばきりがないので、この辺で筆をとめる。先生とは、一家をあげて親しくさせていただいた。私の娘が国語学をやるようになったのも、先生の影響無しとしない。先生は私たち父子二代にわたる恩師なのである。

最後は、1971年2月から刊行された『新村出全集』（筑摩書房）の宣伝用内容案内の「言葉——人間性の真の実現」とした推薦文を『美意延年』に収めたものです。

生をうけて七十年、私は多くのすぐれた師友にめぐまれてきたが、もの学びの意義と楽しみを、慈父のように身を以て提示されたのは新村博士であることを、いましみじみと思う。これは博士に教えられた者のすべてがいだく共通の感じであろう。

枝葉に注意を集中するものは根幹の存在を忘れ、大本に就くものは末節をないがしろにする。生きるにもせよ、学ぶにもせよ、私たちはとかくこの弊におちいりやすいが、新村博士の生きかたや学びかたには、巨視と微視の実にみごとな調和があった。……あのドイツ人文主義の代表者〔フンボルト〕と同じく、言語は個人と社会とを最も緊密に結びつける力であり国語は国民性の最も直接的な表現であるとの見地に立ち、言葉を通して身や

心の諸能力が美しく調和するところに、人間性の真の実現があると確信されていたからである。その信条が、いつも博士に、生活の場でも学問の場でも、寛容で博大な立場を採らしめていたように思われる……。

このたび博士一代の偉業が、全集としてまとめられる。知遇を得た門弟の一人として、よろこびこれに過ぐるは無い。

このように見てきますと、かなり違う分野の人であるにもかかわらず、なぜか全てにわたって両者は共通しています。両者に通底するのはヒューマニズムではないかと私は思っております。寿岳文章はエコロジストでもあったということですが、エコロジズムとヒューマニズムとは全然矛盾しません。それは愛好した文学作品についてもいえることですが、やはり最初に盲目の学生である岩橋武夫と出会い、その妹と結婚しているということも影響していると彼自身は言っています。非常に人間としての苦悩を負いながらも、それに負けずに立ち向かっていくような人として、おそらくダンテやブレイクもそのような傾向を持っていた人ではないかと思えます。

それから和紙への愛着です。和紙というものは、厳しい自然の中でそこに生きる人の営みとしてずっと行われてきているものですから、和紙への愛着というのは、和紙をつくっている人への愛着と結びついているのではないかと感じています。

また、私は新村出のことを、「自然を愛し、人間を愛し、言葉を愛した」という言い方をしているのですが、新村出の学風は国語学、言語学を理論的体系的にかっちりつくるというタイプではなく、自らも言っているとおり非常に歴史主義的です。これまで使ってきた人間の言葉をととても大事にして、語源語誌に興味を持つというのもそこから来ていると思うのです。

私はそういう意味で、新村出もヒューマニストである、これは寿岳文章と新村出、両者に通底しているのではないかと漠然とではありますが感じております。

そしてそれが次男の新村猛、長女の寿岳章子に受け継がれているようにも思います。次男の新村猛は、むしろ父の新村出以上にヒューマニストという言葉がぴったりであると多くの人からみられています。私もまたそれを受け継いで、高校時代からヒューマニズムをひとつの生き方にしようと思ってきました。そこで、今申しました親子二代のことを少しお話ししたいと思います。

補論 新村猛、寿岳章子をふくめた親子二代の付き合い

寿岳文章はかなり積極的に甲南大学文学部のためにいろいろな努力をしたようで、図書館長も務めていましたが、文学部にフランス文学科を設置して新村猛を呼ぼうとして果たせなかったことが、大学を辞する遠因となりました。新村猛の主張するヒューマニズムは、著書『ロマン・ロラン』（岩波新書、1958年）によく表れていると思います。寿岳文章の回想文のなかにこの甲南大学仏文科設立について触れているものがあります。私は父である新村猛がこ

の『LIFE SCIENCE』をきっちりと保存をして、その部分に赤線を引いてあるのを見ましたので事情を知ることになりました。

新村先生の息子さんの猛君がフランス文学をやっていて、甲南大学に本気でフランス文学科を置くというのなら定年をまたずに名古屋大学をやめて甲南へ行ってもいい、君がやめずにそこにいるんなら、という話が煮詰まった。それで…ちゃんとフランス文科をつくって新村猛君を呼ぶということを、大学として決めておいたにもかかわらず、そんな約束はしていないということになった……しばらくすると、甲南大学ではフランス文学科をつくる意思はない、あれは虚報だという噂がよその大学にひろまり…それが新村君の耳に入って、当然同君は憤慨する。そして私も、そういうことならやめると……。

(『LIFE SCIENCE』125 1978年1月)

娘の章子先生はよく父上の寿岳文章とともに、ときには一人で新村邸を訪れて、新村猛とも会っていましたので二人は親しい間柄でした。章子先生の新村猛への追悼文を紹介しておきます。新村出記念財団の理事長を務めていたときのもので、「なつかしき猛先生」と題されたものの一部です。

……ただ私はもう少し違った感覚で新村猛先生を我が心に重ねる。もともと私が新村先生を存じ上げているのは、父寿岳文章が御尊父新村出先生に大そうかわいがられていて、^{いしば}屢、新村家へ出入りしていたのに折々くっついていった時のお出会いによるものだ。理科系であった私の弟はそういう経験はない。父は国語学を志した娘に、その道の大家である新村出先生を知らせなかったのが、よくいっしょに出かけた。そして後には私単独で何回も、とりわけ東北大に入ってから、帰省の度ごとにあつかましくおうかがいしたのである。

その出先生が心を労して愛しておられたのは御息猛様。だから私の家では父は「猛さん」とか「猛君」とか呼んでいたし、私は私で、当時父君の『広辞苑』関係の仕事のよき助手であった猛さんが、緋の和服などをお召しになったごくごく書生風な若々しい御様子で原稿をもって御自分のへやから出先生のおへやへやって来られる、そういう風景を見ているものだから、どうしても「仰ぎ見る」というような心情よりはもっと身近に猛先生を感じていた。さらに父は、出先生が何かにつけて「猛は」「猛は」といろいろお話になるのを又我が家で話すのが常であった。そんな話の一つに「どうも猛は一つのことうちこみすぎて、たとえば食卓のしょうゆびんを自分の手許にひきよせたらもとへ戻さない」などのお話があったのを、例の如く我が食卓の話題にした。私たちは「猛さんて坊ちゃんなのだ」と、むしろそういうふるまいを失礼な言い分ながら、いとしいように受けとっていた。要するに大らかでおっとりしておられたのだ。出先生とてもあのしょうゆびんのエピソードを猛先生への愛情としてお話なされたのだ。……

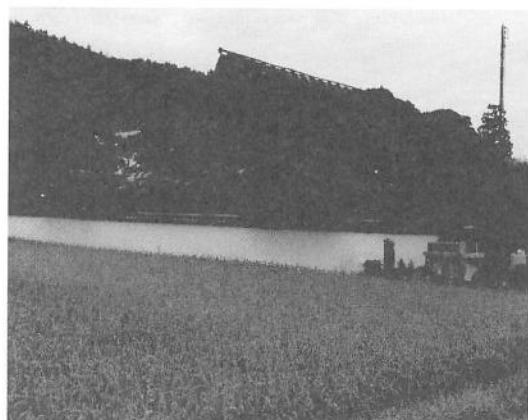
やがて父は、自分のつとめる甲南大学に猛先生をお迎えしたが、これはきわめて不愉快な学内事情で実現をみなかった。このことは、父がやがて甲南大を去る原因の一つになったが、出先生の弟子であった父が、御息の猛先生を愛していたのも併時代の若き「猛さん」の志を大いによしとしていたからこそであろう。

父の代わりのように、私は、晩年の猛先生にあれこれのことでさらにお近づきを得ることになったが、私は深い思いで猛先生におつきあいさせて頂いたことであつた。それは何十年にもわたる歳月がかかわっていたのである。

(『緑の樹 新村猛追想』同時代社、1995年)

新村出記念財団を設立するときには新村出が遺したたくさんの資料があり、父の新村猛は心血を注いで財団を立ち上げました。その理事長を章子先生が9年間務められたというのは、新村出と寿岳文章とのあいだに始まった非常に長い付き合いから続いてきた帰結だったように思えます。私はそれぞれの分野については素人なのですが、そのような両家の深い縁から講演の依頼を断るわけにはいかないと、今日は皆様にお話をした次第です。

[文字起こし：長野裕子]

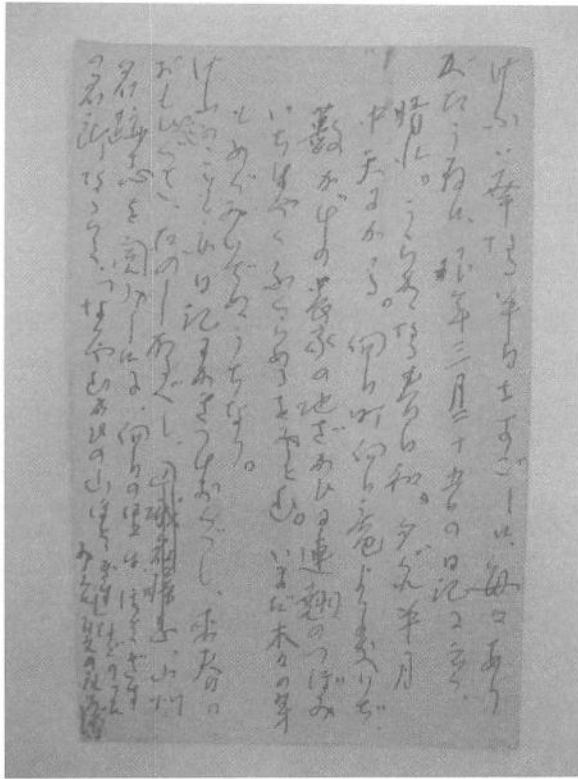


龍華院

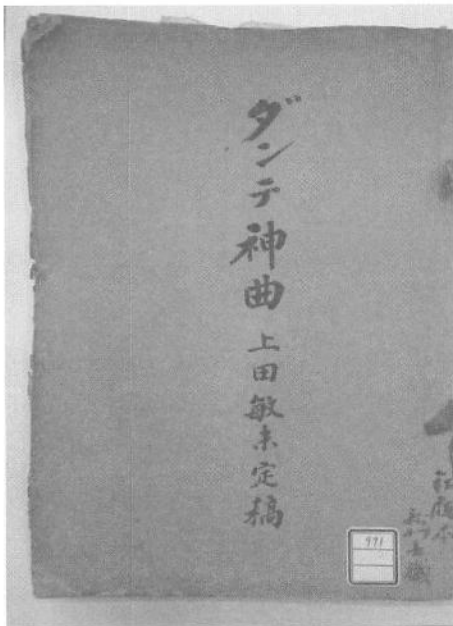
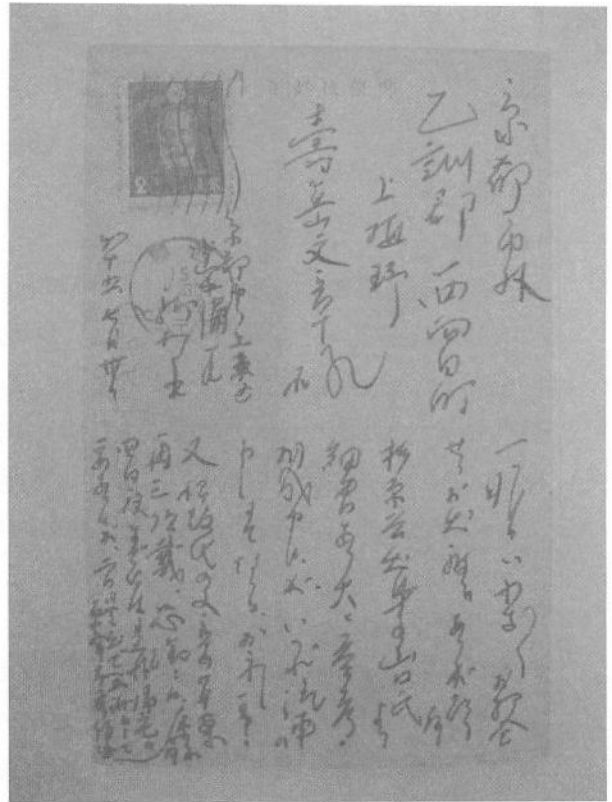


石峯寺

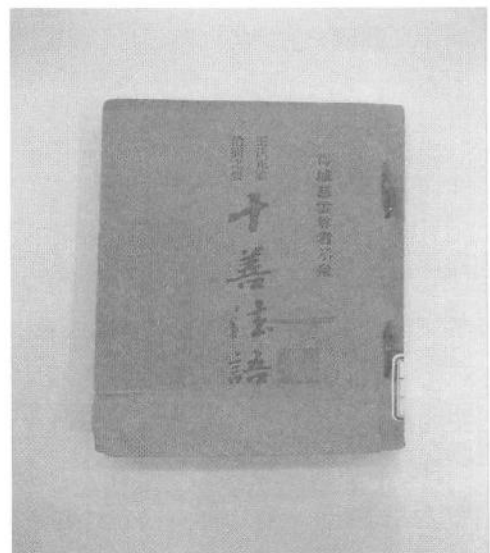
昭和10年4月3日 新村出より寿岳文章宛葉書



昭和15年7月30日 新村出より寿岳文章宛葉書



上田敏『ダンテ神曲』未定稿



『十善法語』

(新村出記念財団重山文庫所蔵)

昭和初期の向日町と文化人

向日市文化資料館館長 玉城 玲子

はじめに

今回の発表については、先日まで当資料館で開催していた特別展「向日神社」、平成30年(2018)が御鎮座千三百年の年とされているのを期に向日神社の歴史と文化財を紹介する特別展を行ったが、その内容を話すようにとのご依頼であった。しかしせっかく向日庵の公開研究発表会という場を頂戴したので、より向日庵に関連するテーマでと思い、4年前の秋に当館で開催した「昭和の向日町と文人」展、昭和戦前期に当時の向日町で文化的に活動・交流した人々に焦点を当てた資料展示を行い壽岳文章一家についても初めて取り上げさせていただいた展示だが、その内容をあらためてご紹介することにしたい。そのなかで向日神社や向日町・向日市の歴史についても触れたいと思う。

向日庵の「向日」については、壽岳文章・しづ夫妻協業で世に送り出された私家版を向日庵本と名付けられたのは、ひまわりを歌ったブレイクの詩とゴッホの絵にちなむ、ということは夫妻とその著作をよく知る方々の間では有名な話であろう。私家版は昭和7年(1932)にはじめて刊行されているようなので、一家が東山南禅寺境外僊壺庵から郊外向日町の西向日住宅地に転宅する前年ということになる。不勉強で単純な私は、以前には向日町にあるから“向日庵”であり、そこで作り出されたから“向日庵本”と疑問もなく理解していたが、転宅以前であればその由来はやはりブレイクとゴッホに譲らねばならない。

しかし地元に係わる者としては、やはり西向日住宅地や向日町にも関係して欲しい、と勝手な願望を抱いている。すぐ翌年には転宅されているのだから、引っ越し予定の土地の名前も視野に入っておられたのだろう、と想像したいところである(注1)。

1 向日神社と向日町・向日市

「向日」という町や市の名前については、養老2年(718)鎮座の由緒を持ち、今年が「御鎮座千三百年」になるという向日神社がその由来である。養老2年鎮座というのは、現在国の重要文化財に指定されている本殿を慶長2年(1597)に修理した時の棟札に、向日丘陵先端の現所在地に影向(ようごう、神が姿を現すこと)したのが養老2年と記されているのが最も古い歴史的根拠である。

神社の名前であった「向日」が地名化するのには、豊臣秀吉の時代である。天下統一を果たした秀吉は朝鮮半島・大陸への出兵を企図するが、前線基地となる九州北部への人と物資の輸送のために、京都から延びる西国街道を拡幅・整備した。向日神社の鳥居前には、平安京への遷都以降、西国街道が通っていたが、京都を出発してひと休みするのにちょうど良い地点であり、鳥居前の西国街道に沿って町場を作ることになった。街道整備の一環として、往来の人々

に休憩場所などさまざまな便宜を提供する店屋が並んでいることが求められたのである。

天正20年(1592)8月に秀吉政権下の京都所司代である前田玄以は、「向日前新町」つまり向日神社の前の西国街道沿いに新しい町場を早急に造ることを定めている。この町場はまもなく「向日町」と呼ばれるようになり、「向日」が土地を示す名前になる契機となった。向日町はその後、江戸時代を通じて京都西郊の乙訓地域における商業・文化の中心地として賑わうことになる。

やがて明治維新となり新しい時代が到来すると、明治4年(1871)1月に社寺領を官地に没収する上知令が新政府から出される。それまで西国街道より西側の丘陵地はすべて向日神社の境内であったが、参道と社殿の建っている場所と周囲のわずかな土地を残して、旧領の約4分の3にあたる広範囲が上知となった。そして明治5年11月には、上知された土地の一部に勝山校(のちに向陽校)という小学校が建設される。この後、向日神社の旧境内地には郵便局や警察署・裁判所・登記所、そして町役場や郡役所など、さまざまな公的機関が続々と建設されていき、向日町が近代乙訓郡の“郡都”となっていく。

明治22年(1889)4月の町村制施行により、向日町は周辺5ヵ村(物集女・寺戸・森本・鶏冠井・上植野)と合併する。合併してできた向日町は、漢字表記は従来と同じだが、それまでの向日町が町場である「むこうまち」であったところ、町村制下の行政区分としては「むこうちょう」と発音されるべきであった。しかし慣習的に、合併しても「むこうまち」と呼ばれることが圧倒的に多かった。この新しくできた向日町が、昭和47年(1972)10月の市制施行により、町から市となったのが現在の向日市である。明治22年4月以来の自治体の範囲がそのまま今日まで続いている、全国でもまれな事例である。

2 西向日町住宅地の誕生

壽岳一家が移住してくる新しい住宅地ができたのは、昭和3年(1928)11月の昭和天皇の即位式、いわゆる御大典を記念した新京阪線の開通がきっかけであった。大阪から京都まで淀川左岸の旧市街地を経由する鉄道を運行していた京阪電鉄は、新たに淀川右岸を直線的に走る新路線を計画し、別会社を興して新京阪線を敷設する。新京阪沿線にあたる向日町では、もともと町内に一つの駅を造る予定だったところ、設置場所をめぐり町内各地区間の調整がつかず、二駅造ることになるかわりに、一方の駅周辺を電鉄会社が直営で開発する住宅地の用地とすることになった。これが東・西向日町駅と西向日町住宅地の成り立ちである。新京阪線は戦後に阪急京都線となり、昭和47年10月の市制施行にともない、駅名と住宅地名から「町」の字が消えて、現在に至る。

西向日町駅の周辺は、住宅地ができる以前、向日丘陵縁辺に形成された段丘上の竹藪地であった。向日市上植野地区に残された古い絵図や古文書によれば、江戸時代には聖護院領の竹藪であったことがわかる。昭和3年当時の向日町は、向日神社前の町場部分を除けば、都市近郊の純農村地帯とっていい地域である。西向日町住宅地は、明治時代末から大正時代にかけて各地で造られつつあった、田園都市構想に基づく鉄道沿線の郊外型住宅地をモデルに開発さ

れた。昭和3年の新京阪線開通の後に造成工事が始まり、昭和6年には戸数34戸からなる西向日町住宅地組合が結成されるほど入居が進んでいる。

昭和11年(1936)の向日町付近の地形図を見ると、西国街道と明治初年に開通した鉄道・東海道線との間の竹藪のなかに新京阪西向日町駅ができ、東南に向かって段々に傾斜する駅周辺には街路が直交する長方形の区画が出現している。現在、噴水公園になっているロータリーの円形区画も看取できる。この年なら、昭和8年6月に転居された壽岳邸はすでに存在していたはずだが、タイムラグがあるのか地図上ではまだ空地のままである。

住宅地が立地するのは、乙訓地域に北西から東南方向に延びる向日丘陵の縁辺にエプロン状にひろがる段丘上であり、東南方向に傾斜して下がっていく地形であった。そこにひな壇のように造成された住宅地は日当たりの良い場所となり、東海道線の線路を挟んで東部には一面の水田を望む、まさに明るく健康的な郊外の住宅地であったことが想像される(注2)。

3 昭和初期向日町の文化人たち

西向日町住宅地ができた昭和初期頃を中心に向日町で活動した文化人・学者について、4年前の向日市文化資料館特別展『昭和の向日町と文人』パンフレットを参照しながら、来住年次の古い順に、残された時間で簡単に触れる。

(1) 河合卯之助と向日窯

京都東山の五条坂で陶芸を家業とする家に生まれた河合卯之助は、昭和3年(1928)11月の新京阪線東向日町駅開業と時を同じくして当時の向日町寺戸西野辺に移り住み、「向日窯」と呼ぶ窯を開いた。寺戸付近ではもともと焼き物に適した良質の土が採取でき、特に河合が来住の前年に朝鮮へ旅して感銘を受けた鶏龍山窯の土と似ていることから、この地に居を構えることにしたという。開通したばかりの鉄道路線が、このような京都からの移住を促進したことはもちろんであろう。

ここで植物の葉を貼り付けて焼成する押葉模様という独特の技法を確立し特許を取り、向日町周辺の自然の中に題材を求め、植物をモチーフとした陶器を数多く制作した。陶器の制作をつうじて、同じ陶芸の富本憲吉や作家の吉川英治など多彩な人々と交流を結び、向日町寺戸の河合邸は、関西文化人のサロンのような雰囲気有していたといわれる。大正末から昭和戦前期にかけて調査・執筆されながら未刊に終わった『乙訓郡誌』編纂事業において編纂主事を務めた井川定慶なども、河合のもとに出入りして親交を結んでいた。

(2) 壽岳一家と向日庵(向日居)

壽岳一家について、ここであらためて紹介することはしないが、些細なことではあるが気になっている一、二の点について述べる。

まず「向日庵」については、壽岳一家が住まいする建物の号で、そこで作った私家版が「向日庵本」となるが、住居については別に「向日居」とも記した。壽岳邸内の二階への階段の踊

り場には「向日居清規」とある書が掲げられている。壽岳文章は執筆した短文の末尾に「向日居にて」と付ける場合がみられる。

次に西向日町住宅地への移住の年であるが、はじめに、でも述べたように昭和8年(1933)であることは壽岳家の人々による様々な著作に明らかであるが、建築の研究者が建物について記す学術報告には昭和9年の建築であるとされる(注3)。これについては建築学ご専門の先生に直接お尋ねしたところ、施工した熊倉工務店に保管されている図面に昭和9年とあるため、建築学的にはその年代がとられているとのことであった。

最後に向日庵本の象徴となっている茶の葉の文様についてであるが、向日町周辺の農家の庭先によく見られることもあって用いられたものであることが、一家の著された文に散見される(注4)。向日町といえば竹の多いことで知られ、竹藪のある風景も一家の著述によく描写されている。現在市内に残るのは食用タケノコを採るための孟宗竹の竹林がほとんどであるが、高度成長期以降に市街化が進むまでは段丘上に真竹や淡竹の竹藪が多く、古来竹材の産地としても名高い土地柄であった。お茶については、幕末から明治時代にかけて開港にともなう海外貿易の主力品としてお茶の需要が拡大した時に、乙訓郡でも輸出用の茶栽培に積極的に取り組んだ時期があった。やがて明治20年代(19世紀末)以降になると、南山城で生産される宇治茶ブランドに押されて乙訓での茶栽培は行われなくなり、これにとってかわるように日当たりの良い丘陵地を利用した孟宗竹のタケノコ栽培が始まり、現代まで続く産地となる。

お茶の木は農家の自家用として庭先や竹藪のなかに残されるのみとなり、昭和戦前期に壽岳一家が目にしたお茶の木と実は、こうした時期の風景であった。

(3) 笹部新太郎と向日町桜苗圃

笹部新太郎は、大阪堂島の大地主の家に生まれ、生涯を在野での桜研究に捧げ「桜博士」と呼ばれた人である。実家からの資産分与によって宝塚の武田尾に広大な桜の演習林を造り、そこを拠点に日本古来の桜を研究、大阪造幣局の桜をはじめ各地の桜の名所へ苗を提供するなど、桜の管理・育成に力を尽くした。

昭和10年(1935)、笹部は向日丘陵の向日神社裏山から寺戸にかけての土地三千坪ほどを購入し「桜苗圃(おうびょうぼ)」を造る。笹部をモデルにした水上勉の小説『櫻守』(1969年発行)には、向日町の桜苗圃も主要舞台の一つとして登場する。笹部と向日町の縁を取り持ったのは河合卯之助であり、共通の知人を通して親交があったようである。笹部の自伝である『櫻男行状』(1958年)には、東向日町駅から桜苗圃に向かう途中にある河合邸でその行き帰りに立ち寄る様子が著されている。阪神間に住居や研究拠点のあった笹部と向日町との縁は、新京阪線という新しい交通手段で結ばれ、先に来ていた人物との交流がさらに別の人を呼び寄せることになった。

笹部の向日町桜苗圃は、昭和36年(1961)に名神高速道路建設のための土砂の採取地となって消滅してしまい、跡地が府営向日台団地になっている。近年、かつてあった桜の園を偲ん

で、地域住民の手によって団地周辺の道路沿いに、笹部が愛した日本古来の桜の品種が植樹され整備されている。

(4) 狩野直喜と葵園

京都帝国大学の教授で中国文学の学者であった狩野直喜は、大学近くの左京区田中に自宅があったが、昭和12年(1937)に西向日町住宅地の一角にあたる現在の向日市上植野町野上山の地に茅葺きの別荘を建てた。向日町の地名にちなんで向日葵からとったものか「葵園(きえん)」と名付けられた。狩野博士の滞在中は、各所から知識人が多く集まって文学談義に花が咲いたという。

当時の乙訓郡教育会地歴研究部の主要メンバーであった向陽尋常小学校訓導の御子孫のお宅に、狩野博士の手になる七言絶句・二行書きの漢詩軸が伝わっていて、地元の教育者などとも交流があったことをうかがわせる。葵園の建物は同じ場所に健在であり、中国文学者の書齋にふさわしい格調の高さをただよわせている。

(5) 渡邊武と西向日住宅地“花屋敷”、椿コレクション

薬学博士の渡邊武は、東京帝国大学医学部で薬学を修めた後、武田薬品工業研究所に勤務し、その在職中には正倉院の薬物・香薬調査に参加し、また日本における漢方薬研究の第一人者として業績を残した。また薬学研究のなかから特に椿を探究し、植物としての椿はもちろん、あらゆる分野の椿に関する美術工芸品や資料を収集した。

渡邊は、河合卯之助の子息紀(ただし)と京都府立第二中学で同級生だった関係で河合家と親交があり、葵園のやや南方、周辺の人々から“花屋敷”と通称される場所に住んだ。のち昭和40年代に寺戸町西野の地に安井杵工務店施工の家を新築して移る。平成6年(1994)には、収集した椿に関する書画・陶磁器類ほか資料を向日市へ寄贈する。この渡邊武コレクションは向日市立図書館で保管され随時展示されている。

渡邊は、河合とのつながりもあり、「天平の会」を主宰していた東大寺観音院の上司海雲はじめ、入江泰吉や土門拳、吉川英治や杉本健吉など、当時一流の文化人らと親しく交わった。図書館にあるコレクションのなかには、薬や椿を通じた各界著名人との交友を示す作品や書簡も含まれている。

おわりに

ご紹介してきたように、乙訓郡向日町は西国街道沿いの町場として古くから商業・文化の地域的中心であり、近代に入ってさらに教育や行政の中心となっていった。身近に豊かな自然があり田畑や竹林に囲まれた日当たりの良い土地には、すでに明治初めに東海道線が通じたが、昭和初期には私鉄も併行して敷設され、交通至便な都市近郊地として人や物の新しい流れがおこった。地元との交流によって魅力ある文化が生まれ出され、これまでの伝統の上に新たな歴史が積みかさねられた。

現在もめまぐるしい都市化・開発・再開発の渦中にある当地では景観は日々変貌をとげており、ここで取り上げた人や家居もすでに失われたものが多いが、壽岳邸はじめ今日なお残されているものには、未来へ継承すべき歴史であることの使命が宿っているのかもしれない。

(注1) この発表後に著作をあらためて調べたところ、『歳月を美しく』(初版昭和22年(1947)3月、後に『壽岳文章・しづ著作集』1所収・昭和45年(1970)4月発行)によれば、昭和7年秋頃に文章氏知人の勧めがあり家族で西向日町住宅地を下見に行き、気に入って土地を買求め、翌昭和8年2月初めには早くも棟上げをしている。そして6月には新居に移っている(「年譜」『壽岳文章・しづ著作集』2・昭和45年(1970)9月発行)。昭和7年に世に出された私家版向日庵本とは微妙な前後関係であるが、明るい地勢の新居での生活を念頭に、ブレイクの向日葵を歌った詩やゴッホの絵が連想されたのではないかと思われる。

(注2) 前注の文献などによれば、昭和6年に夫妻及び潤氏は腸チフスに罹患している。転居の理由として、増える一方の蔵書の整理や大阪の義父と同居できることともに、明るく健康的な立地の住宅を求めたことが挙げられている。

(注3) たとえば『京都府の近代和風建築』(京都府教育委員会、2009年発行)など。

(注4) 中島俊郎「壽岳文章・しづ夫妻が問いかけたもの」(『向日庵』講演録、2018年所収)に引用された壽岳章子「家の花」のなかの一節など。

〈本文・注にあげた以外の参考資料〉

「最新情報コーナー展示(パネル)狩野博士と葵園と向日町」(向日市文化資料館、1998年発行)

「むこうし桜ものがたり」1~4『さくらなみき』No.40~43(西向日自治会、2008~09年発行)

『図録 20世紀のむこうまち』(向日市文化資料館、2002年発行)



『和紙研究』解説

京都工芸繊維大学非常勤講師 紙漉き師 田村 正

『和紙研究』の発刊

『和紙研究』が発刊に到った経緯を調査するため編集後記を読み解いていくと、そこには意外なことが書かれていた。

せつかく芽ばえた和紙談叢が廃刊となり、新たに同種類の和紙研究が発行せらるゝことゝなつたに就いて、傍観者の位置にある人々としては、如何にも不審に思はれることであらうから、その実際の事情に就て大略申上げて置く方がよからうと思ふ。実は数年来少数の同好者が和紙に関する意見を交換する様なこともあつて、専門の雑誌でもあつてよからうと考へてゐた。所が印刷の業務にも多少の関連を持つてゐる奥本正人君よりの懇望で、同君と若林書店とが雑誌発行の業務を引受けることゝなり、同人が会合して題号や体裁を定め、第一号を発行するに至つたのが和紙談叢である。〔後略〕（禾人生）

（『和紙研究 第一号』「編集雑記」、昭和14年1月10日）

創刊を祝うべき第一号の編集後記が反省文のような趣旨になっていることに、いささか疑問に思い、その経緯を調べた。『和紙研究』が生まれるきっかけが昭和12年発行の『和紙談叢』であることが分かり、編集後記からその辺りの出来事を読み解いてみた。

和紙に就ての研究雑誌を作つて見たいと予てから思つてゐたが其の研究や調査は到底私どもの及ぶことでないと諦めてゐたが、昨年の暑休中、禿氏先生をお訪ねしてこの話をしましたところ、即座に御賛成下さつたので、壽岳先生、新村先生、中村先生などをお訪ねして御協力をお願いしましたところ、皆々様が進んで御協力下さる事を御約束下さつたので、大いに力を得て、具体案を練り、三年十二冊を以て大体和紙の輪郭を終り、又現産地の大略を紹介しようと云ふ考へで、若林君と自分が直接事務に当る事として、和紙研究会の名のもとに紙に関する諸方面の仕事と及ぶ限り進めて行く事を誓つたのである

先づ第一声として昭和年十月二十四日京都帝大楽友会館に於て、「紙に関する座談会」を開いた。お集り下さつた方々は、新村、禿氏、壽岳、大澤、日下の諸先生の外に三高のパーキンズ氏、表具屋さんの山川、吉村氏などで、三時間に亘つて色々と参考になるお話

があつたので、本誌に載すべく速記したのであるが、頁数の都合で割愛の止むなきに到つた。其の時寿岳先生の発案によって誌名を「和紙談叢」と命名することになった。〔後略〕

（『和紙談叢 第一冊』「雑録 和紙研究会発会」、昭和12年2月10日）

『和紙談叢』の発行は、発案者である奥本正人が昭和11年夏に仏教学者であり浄土真宗本願寺派の僧、禿氏祐祥を訪ねることに始まる。「研究調査は私どもの及ぶことでない」と言い切り、私どもの「ども」は若林君であると明かし、二人三脚で事務方を務めると表明した。「若林君」とは、京都市伏見区京町南八丁目を住所とした若林春和堂店主、若林正治である。禿氏祐祥の後に続いて、新村出より先に年若い寿岳文章の名前が挙がっているため、列挙の順序は相談した順なのか、あるいは五十音順の可能性もある。座談会参加者の紹介は、お歴々優先の配慮もあつたと考えるのであるなら、ここはやはり先に友人に相談できた奥本正人の年齢は四十代と推測した。

『和紙談叢』会員募集要項を次のように掲載している。

季刊「和紙談叢」会員募集

- 一、発行 年四回、三ヵ年十二冊を以て完了
 - 一、内容 紙(新古東西)に関する研究、趣味、各産地紙紹介等
 - 一、用紙 本文、表紙共手漉和紙
 - 一、口絵 数葉、各産地の特色ある標本紙添付
 - 一、形態 大形菊判(八寸×五寸七分)約百頁
 - 一、部数 番号入限定、全十二冊同一番号贈呈(申込順)
 - 一、会費 一ヶ年金六円、半ヶ年三円(前納)
- 申込所 澄心堂 京都伏見京町南八丁目
振替京都五六〇六番 電話伏見一六六五番

この、『和紙談叢』編集後記の記述と会員募集から、『和紙研究』を位置づけるならば、”昭和11年秋、京都大学楽友会館で開催された「紙に関する座談会」を機に和紙研究会が発足する。研究会には、新村出、藤堂祐範、禿氏祐祥、牧野信之助、上村六郎、大澤忍、寿岳文章の七名が同人として参加した。新古東西の紙に関する研究発表の場として会が発行した『和紙研究』第一号(昭和14年)～第十七号(昭和59年)は、紙、趣味、各産地紙紹介、見本紙標

本解説、和紙研究文献解題などを内容とした昭和を代表する和紙論文の機関誌である”といえよう。なお、この同人七名は、寿岳文章が『和紙研究』第二号において「誰々が会の同人かと訊かれることも多いので、前頁に同人名を記しておいた。」と発表したメンバー順である。

奥本正人と『和紙談叢』

繰り返しになるが、『和紙研究』の発行は奥本正人が禿氏祐祥を訪ねたことから始まった。その奥本正人とはいかなる人物であるかを追ってみた。『和紙談叢 第一冊』には、奥本による「美濃國抄紙の沿革と現況」と題した論文が掲載されている。また、「美濃行」と題した編集後記の文中にみられる『美濃紙抄製図』を、若林正治とともに『縮写 美濃紙抄製図説 全』として復刻刊行したことが分かっている。

十二月三日 若林君と二人で第一回的美濃紙の調査に出かけた。先づ岐阜県立図書館に花林主事をお訪ねして、文献資料の探究に懸つたのであるが、充分の成果を挙げる事が出来ず、同市大塚なる人が最近某氏の依頼にて美濃紙関係の調査を創めてみられるとの事で、花林主事より電話して下さったが、まだ何も集つてゐないとの事であつた。次いで県庁の文書課の蔵書目録中に「美濃紙抄圖」なるものを見出してよるこんだのもつかの間で、其の下に「大正十年廃棄」の朱印が押されてゐるのを見ては如何とも仕様がなかつた。この書が岐阜県庁に於て廃棄の運命を見るとは、時の当局者の心情が疑いたくなる。只其の時『美濃紙抄製図』の下図に使用したものと思われる「産業図」なる一冊を拝見する事が出来たので、其の写真複写を花林氏に御依頼して県庁を出た。〔中略〕

十二月五日 大阪の古書即売会に於て岐阜県々庁が廃棄した『美濃紙抄製図説』の写しを若林君が見付けて来たことは第一回美濃行の不成績に引かへて近來の大収穫であつた。何れ縮写を世に送る積りである。

（『和紙談叢 第一冊』、「雑録 美濃行」 昭和12年2月10日）

『縮写 美濃紙抄製図説 全』の編集後記に、奥本正人は以下の記述をした。

『美濃紙抄製図説』は明治十三年、岐阜県勸業課に於て編輯されたものであるが、編者及び挿画の作者は不明である。〔中略〕とにかく、転写本にもせよ精微を尽した点に於て我国紙漉文献として他に類を見ないものであると同時に、当時の美濃地方に於ける抄紙法を知るに此の上もないものと思ふまゝに、一人これを深蔵するに忍びないので、初め和紙

研究会編輯の『和紙談叢』第一冊に収める筈であつたのを別冊として広く世に頒つ事としたのである。本書の原本として使用したものは普通的美濃判よりやや大形(九寸四分×六寸六分)で総紙数八十頁、内緒言及解説十五頁、図六十頁である。〔後略〕

昭和十二丁丑年四月 洛南の寓居にて 奥本正人識

(『縮写 美濃紙抄製図説 全』「跋語」、澄心堂、昭和12年)

[奥付]

昭和12年5月15日印刷

昭和12年5月25日発行 頒賃金壹円貳拾銭 送料6銭

縮写本編輯者 奥本正人 発行者 若林正治

印刷者 笠間信義 製版者 浅田製版所

発行所 澄心堂 京都伏見京町南八丁目

また、『和紙研究 第一号』の編集後記に次のような記述がある。

[中略] 年末になると奥本君の行方が分らない。いよいよ続刊出来ないといふことが判然すると物淋しく感ずる様になつた。吾々同人としても何か間接の責任があるが如く思はれた。延刊の事が話題となつたり、その事情を尋ねられたりすると、家族の者に不都合があつた様な思ひで、答弁にも躊躇する。名義上協力者となつてゐる若林君も次第に責任を感じ、去る七月中旬の頃、奥本君の下宿先を漸くにして探知し、自分を案内して呉れた。その際、奥本君は不都合を陳謝しつゝ、第二号の原稿と読者名簿等を差出し一切の処理を託されたのである。その結果としては若林正治君が残務整理に当り、同人の会合を催して再び陣容をととのへ、和紙研究を刊行する事と決定したのである。〔後略〕(禾人生)

(『和紙研究 第一号』「編輯雜記」、昭和14年1月10日)

以上から、奥本正人周辺の足跡を整理すると次のようになる。

昭和11年夏 禿氏祐祥を訪ね、其の後、寿岳文章、新村出、中村直勝など訪問

昭和11年10月24日(土) 京都帝大楽友会館に於いて、「紙に関する座談会」を開催

昭和11年12月3日(木) 若林と二人で第一回的美濃紙の調査

12月5日(土) 若林大阪の古書即売会に於いて『美濃紙抄製図説』購入

12月23日(水) 再び若林と二人で美濃紙の調査

昭和12年2月10日(水) 『和紙談叢』発刊。「美濃国抄紙の沿革と現況」発表

5月25日(火)『縮写 美濃紙抄製図説 全』を『和紙談叢別冊』として編集発行
其の後奥本行方不明、昭和13年7月半ば『和紙談叢』から身を引く。生年月日不明。

ここで『和紙談叢』の陣容を見てみよう。

題字 新村出、表装用紙 武州小川産、本文用紙 武州小川産、見返用紙 宇和泉貨

和紙外聞抄	新村出
和紙の形状	禿氏祐祥
染紙紀談(一)	上村六郎
更紗紙 加工紙雑考の一	禿氏祐祥
檀紙考	大澤忍
ハンタア氏の『極東紙漉國巡礼』を読む	壽岳文章
美濃紙に関する文献二三	伊藤信
美濃揖斐谷の抄紙	秋山桓士
美濃國抄紙の沿革と現況	奥本正人

「編輯発行印刷所変遷」【資料1】、「『和紙研究第一号』昭和14(1939)年1月発行時同人を取り巻く人の年齢」【資料2】によると、知恩院山内信重院の住職、藤堂祐範が編輯兼発行人兼和紙研究会代表者となり、第一号から第十二号まで和紙研究会の代表者を続けたことがわかる。『和紙研究第一号』に掲載した論文は次の7本であり、京都大学を繋がりとして集まった顔ぶれであることがわかる。

和紙覚書	新村 出
名鹽産紙について	中山 琇静
橘香果の紙譜	大澤忍
染紙紀談(その1)	上村六郎
吉野紙雑考	禿氏祐祥
たむきの語源に就いて	大澤忍
名塩紀行	壽岳文章

レンブラントと和紙

新村出の「和紙外聞抄」と「和紙覚書」の全文を紹介しておこう。

和紙が海外にもはやされる由来は甚だ古い。漢土にはともかく、欧州に知られたのも、南蛮貿易以来であることは云ふまでもないが、殊に和蘭通商の後和紙は益々その価値を認められる様になり、通交開始から半世紀を経たかと思ふ頃、レンブラントがエツチングやスケッチにいちやく和紙を利用したやうな事実も存する。昭和七年に当る一九三二年の六月にレンブラントの由緒の地アムステルダム大学の三百年記念式が挙行された時、それに参列した私は国立美術館の一室で開かれたレンブラント特別展観にも、和紙に摺写した二三の作品を覧たことがあつた。年記があつたと思ふが、今日録を見えなくしたので、詳説しかねる。慶長元和にわたる十年間の日英貿易の結果からも、和紙が英国への舶載はあつた筈である。南蛮通航時代南欧諸国には、和紙に関する報道は吉利支丹文献では未だ見かけない。即ち元禄時代に阿蘭陀外科医の資格を以て来朝した独逸の学者ケンペルが、日本製紙植物図説ともいふべき重要な調査を発表して著名であつて、爾来これらの所詮蘭医の零細な報道が往々見えるのであるが、西教の伝道報告書には和紙の記事が抜けてゐるかに思はれる。之に反して本邦の西辺における吉利支丹学林の付属印刷所で刊行された羅馬字本は悉く雁皮紙両面摺であつて、文禄の天草版伊曾保物語をはじめ、諸聖伝でも基督模倣でも乃至は文典辞書でも、其の前後の出版物いづれも和紙摺であつた。少なくとも書籍印刷用紙としての和紙が価値を認められたのは、これらの印本の舶載が興かつて力がありはしまいかと考えられる。

西紀一六〇三年即ち慶長八年の頃長崎所刊の日葡辞典を見るに、紙に関する名称は少なくない。カウゾはないが、カヂ又カヂノ樹で造紙することが見はれてをり、アツガミ、アツヤウ、ウスヤウ、ウスガミ、打曇、雁皮、厚紙(こうし)、杉原、修善寺、鳥の子、丈高(たけたか)、中結(なかゆひ)、引合せ、間に合ひ、等々。美濃紙には、美濃の国の紙と註してあるだけであるが、杉原の方には、日本の書簡を書く紙の一種とあり、修善寺には、赤い紙としてある。不思議なことには、奉書の名がなく又檀紙も載つてゐない。

此の日葡辞書より半世紀程古い嘉靖年代の末(西暦一五六〇年代)即ち日本の永禄年代に来朝した明人鄭舜功の日本一鑑と題する風土記の巻二、器用の部には、紙の條の首めに、豊後越前皆有之、按其紙材皆有山桑之皮、其材堅善、非蘭作者、と述べ、鳥子紙には色如鳥卵故云、宿紙には一云紙屋紙薄而黒はよいが次に而公家所用紙出甲斐とある

のは、別條の竄入と見るべきか。軽黄紙を註して佳紙也出幡摩、檀紙は名称のみで註がない。修善寺の條下には一云薄紅紙とあつて出伊豆と註し、杉原には出産紙処故名之と称してあるのみ。美濃紙が落ちてゐるのは意外である。薄様と打曇とは拳がつている。以上出典は考へ得るが一切省く。

昨昭和十一年四月五月六月所刊の歴史地理の諸号には、小野晃嗣氏の「中世に於ける製紙業と紙商業」と題して、和紙の歴史的研究が掲載されてゐる。稀有な大著である。美濃紙の歴史は、四月号の四頁五頁を初め二八乃至三三に亘る数頁に考證してあり、在来の文献例へは有名な梅花無尽蔵など以外、中世幾多の記録を引いて、茲にも重要な研究が載つてゐる。然し和紙の支那への舶載については、従来の考察を除くと、天龍寺の策彦和尚が遣明副使として天文八年（嘉靖十八年）の初渡集に和紙を内外人へ進物に使つた夥しい寛例が散見してゐるのを注意せねばならぬ。山口紙、徳地紙、美濃紙、越の打曇、その他種々の名称が載つてゐる。従つて大内氏が紙を明に渡して書籍に摺らせたといふ伝説の如きも、これらの史実を俟つて或は然らんかと思はしめる。尤も足利義満が応永八年既に明の朝廷に薄様の和紙千帖を贈つた例もあり、更に和紙が唐土に知られた由来の甚だ遠いことは申すまでもない。

（『和紙談叢 第一冊』、新村出「和紙外聞抄」、昭和12年2月）

和紙談叢の拙稿和紙外聞抄のうちに十七世紀における和蘭の巨匠レンブラントが其のエッチングに日本紙を用ゐた事実を指示しておいたのであるが、起稿の時つひ一九三二年（昭和七年）の初夏に自分が覽た時のレンブラント展観目録を見失つてゐたので、報告が甚だ不完全であつた。今その目録を見出したので、少しばかり補遺を試みたい。

該目録には、日本紙摺と記してあるエッチングが四十点、水彩ペン画が四点、そのほか支那紙摺のものが九点あげられている。姑くエッチングのみについて云ふと、一六三〇年製作のが最も古く、一六五八年のが最も新しい即ち寛永七年から万治元年にわたる二十九年間のもので、作者レンブラント（一六〇六生一六六九没）のエッチング製作の初期より末期に至る多年に及んでゐるのである。展観の際はむろんガラス越しでもあり、自分が未だ和紙について格段の注意を払わなかつた時分であるから、紙質などについて何等語るべきものがないのは甚だ遺憾である。レンブラントのエッチングに日本紙が使はれたことは、近年日本のエッチングの雑誌に誰かの訳文中に説及ぼされてもあつた様な気がする。今憶えてゐない。

（『和紙研究 第一号』、新村出「和紙覚書」、昭和14年1月）

以上からわかるとおり、レンブラントのエッチングに和紙が使われていることを文献で最初に指摘したのは新村出である。しかしながら最後に気になる記述がある。「近年日本のエッチングの雑誌に誰かの訳文中に説及ぼされてもあつた様な気がする。今憶えていない」とあり、昭和 14 年に新村出がこれを書いた以前に、すでに言及されていた「エッチングの雑誌」については調査を続行する必要があるが、手元にある貴田庄著『レンブラントと和紙』のプロローグでは、新村出と寿岳文章を次のように紹介している。

わが国でも、1968 年に「レンブラント名作展」が東京国立博物館と京都国立博物館で、1968 年から 1969 年にかけて「レンブラントとオランダ絵画巨匠展」が東京上野の国立西洋美術館と京都国立博物館で開催されている。

この時の展覧会を見た英文学者であり、和紙の研究家であつた壽岳文章は『和紙の旅時と場所の道』（1973）という著作において、「かれ(レンブラント)が和紙の美しさと特質に心ひかれ、エッチングにスケッチに、いちはやく和紙を使っていることを、最近日本で開催されたレンブラント展で、私はこの自分の目でたしかめた。エッチングだけでも三百点以上にのぼるといわれるかれの作品のうち、用紙の何割がどんな種類の和紙であるかをつきとめる作業は、日本の美術史家に課せられたこれからの興味ある作業であろう」（86 ページ）としたためている。

（貴田庄著『レンブラントと和紙』、八坂書房、2005 年）

貴田庄は、新村出の「昭和七年に当たる一九三二年の六月にレンブラントの由緒の地アムステルダム大学の三百年記念式が挙行された時、それに参列した私は国立美術館の一室で開かれたレンブラント特別展観にも、和紙に摺写した二三の作品を覧たことがあつた」という一文が寿岳文章の記憶の奥底に密かに横たわっていたと考えられると推理し、寿岳もまた 1968 年の京都国立博物館へ勇躍レンブラントの展覧会に赴いたに違いない、と結論付けた。貴田は、この『レンブラントと和紙』を上梓するにいたった心境について、「本書では、寿岳文章がかつて提唱した『日本の美術史家に課せられたこれからの興味ある作業』という言葉に揺り動かされて、レンブラントの銅版画に用いられた和紙について追い求めたことを述べてみたい」と記している。私も貴田と同じように、この度の研究発表「『和紙研究』解説」に取り組もうとしたのは、『和紙研究 第十六号』における寿岳文章の言葉があつたからである。こつこつと読み進め、気に入った論文を紹介、解説できることが幸いした。紙漉き師という立場から見た

『和紙研究』として作者の想いが少し分かった様な気がする。おわりにその寿岳文章の言葉を次に掲げて、この研究発表をまず第一回の「『和紙研究』解説」とする。

「和紙研究の回顧と展望」

寿岳 文章

古都在住の同好者数名が集まり、新村出博士を中心に、和紙研究会を結成してから半世紀近い年月が経過した。その五十年が、長かったとも短かったとも思われるのは、日本歴史始まって以来の曠古の大戦が間にはさまっているからであろう。そして同人の半数以上が不帰の客となった。言わばまわり持ち風に、同人の居宅に集まり、機関誌の編集会議や、持ちよりの和紙談を楽しんだのは、ついこの間のように思われるのに。

会の機関誌『和紙研究』は、名詮自性、純粹に和紙の研究を主要目的とし、それも歴史的分野に目くばりを行き届かせたので、勢い和紙の「過去」がとりあげられることが多かった。しかし現実面では、戦局の苛烈化に伴ない、和紙生産の伝統は、それが残る各地方で分断され、消滅の一手手前まで来ていた。和紙の「未来」のために、この憂うべき「現在」を何とかせねば、との思いは、私の胸を強く打ってやまなかった。和紙へのそうした政策的顧慮が、私の場合、何号か和紙特集号を出した日本民芸協会の月刊誌『工芸』に托される。

戦争は終り、平和がもどってきた。原爆被災というひどい目にあった日本は、当然のコースとして、平和産業に徹した復興の道を歩むであろうとの期待が、内外の有識者の間に大きかったにかかわらず、池田勇人以来、戦後歴代の為政者は、高度経済成長を国是とし、資源が国内に無いにもかかわらず、日本を世界の一大工業国化し、あれよあれよと言う間に、自然環境破壊の一大モデル国に仕立てあげてしまった。戦後の復興を私たちが心から願っていた平和産業の一つ、和紙抄造なども、復興はおろか、根も葉もなくなるほど烈しく吹き飛ばされてしまった、と見るのが正しいとらえ方であろう。その元凶たちは、周知の通り、いま裁判所の門を出たりはいったりしている。

こうした現状をまのあたりにしては、復刊した『和紙研究』も、純粹に研究の分野だけを守っておればよいというわけにゆくまい、というのが私の感想である。文化の本質などまるで考えたことのない浅はかな為政者の、狂暴な政策のあおりを食って、まさに風前のともしびの運命にある和紙文化の担い手の主役、すなわち各地に残存する抄紙家

たちや、抄紙用具の製作者たちと血の通う連絡をとり、和紙文化の伝統を根絶やさぬ方法を講ずることも亦、いやそのことの方こそが、これからの『和紙研究』同人に課せられた大切な宿題のような気がする。老いて病む今の私に、往年の気力は求めらるべくもないが、私の気概を汲んでくれる後続の和紙研究文化顕彰者たちや、その人たちと気脈を通ずる若い世代の和紙抄造者がいることに、私は和紙の未来への望みをかけている。これからは量でなく、質で勝負するよりほかはあるまい。

(『和紙研究 第十六号』、昭和 54 年 12 月)

(附記) 『和紙研究』に発表された論文を十七号まで網羅すると莫大となり全てを紹介できないが、その一部を掲げておく。

『和紙研究』発表論文一覧

和紙覚書	新村出
和紙覚書	新村出
和紙覚書 (三)	新村出
和紙覚書 (四)	新村出
和紙覚書 (五)	新村出
和紙覚書 (六)	新村出
杉原紙源流考 (上)	新村出
梶原紙筋記	堀部正二 新村出 (跋)
和紙の歌など	新村出
越後の小国紙	新村出
和紙自讃他讃	新村出
染紙紀談 (その一)	上村六郎
染紙紀談 (その二)	上村六郎
古染紙の化学的試験につきて	上村六郎
染紙紀談 (その三)	上村六郎
染紙紀談 (その四)	上村六郎
染紙紀談 (その五)	上村六郎

「紅梅の紙」につきて	上村六郎
因州青谷の三椶紙	上村六郎
染紙紀談（その六）	上村六郎
祭と染色（宣命紙について）	上村六郎
名塩の染紙	上村六郎
山の紙漉村を訪ねて [拙註：越中五箇山行]	上村六郎
雪の紙漉村にて	上村六郎
支那古代の製紙原料 附「かぢ」と「かうぞ」について	上村六郎
和紙研究会の歴史（前編）	上村六郎
和紙研究会の歴史（後編） 附・第十六号の訂正	上村六郎
大沢学兄の御霊前に捧ぐ	上村六郎
吉野紙雑考	禿氏祐祥
腰張用の松葉紙	禿氏祐祥
漉返しの技術と実用	禿氏祐祥
紙衣考	禿氏祐祥
白子の紺形	禿氏祐祥
墨流し模様	禿氏祐祥
紙類の用途と製造法の変遷（上）	禿氏祐祥
七夕の行事と五色の紙	禿氏祐祥
和紙風土記を読む	禿氏祐祥
葉袋紙に就て	禿氏祐祥
新撰紙鑑の作者	禿氏祐祥
繪奉書と千代紙	禿氏祐祥
長麻紙に就て	禿氏祐祥
国産紙と輸入紙	禿氏祐祥
橘香果の紙譜	大澤忍
たむきの語原に就て	大澤忍
麻紙に就て	大澤忍
雁皮付斐	大澤忍

茶毘紙に関する研究（其一）	大澤忍
茶毘紙に関する研究	大澤忍
紙の薬	大澤忍
宣紙と禱に就いて	大澤忍
正倉院御物特別展観を拝観して	大澤忍
独逸に於ける紙史研究所	大澤忍
檀紙に就いて	大澤忍
書物の病害とローマの王立研究所	大澤忍
青竹編新撰紙鑑に就いて	大澤忍
百万塔陀羅尼に関する研究（其一）特にその用紙について	大澤忍
百万塔陀羅尼に関する研究（其二）異版について	大澤忍
百万塔陀羅尼に関する研究（其三）特に印刷用の墨について	大澤忍
弘法大師筆「灌頂曆名」の用紙について	大澤忍
ナイル上流のパピルス「パピルスの秘密」補遺(二)	大澤忍
ドイツ紙史研究所の現況	大澤忍
再び弘法大師御請来目録 上表草稿の用紙について	大澤忍
百万塔陀羅尼の研究（六）再び紙質について走査電子顕微鏡による	

大澤忍・谷村英紀・大山昭夫

越前五箇の御留紙等製造記録	牧野信之助
越前五箇の御留紙製造記録（承前）	牧野信之助
麻紙の復活と五箇の漉場を訪ねた畫家達	艸坪 [拙註：牧野信之助]
五箇製紙立地考	小葉田亮
名鹽産紙について	中山琇静
名塩紀行	壽岳文章
紀伊産紙考（上）	壽岳文章
紀伊産紙考（中）	壽岳文章
紀伊産紙考（下）	壽岳文章
『源氏物語』に見えてゐる紙	壽岳文章
『枕草子』に見えてゐる紙	壽岳文章

下京の地紙漉	壽岳文章
『宇津保物語』に見えてゐる紙	壽岳文章
杉原谷紀行	壽岳文章
『榮花物語』『御堂関白記』に見えてゐる紙	壽岳文章
日向の紙	壽岳文章
和紙の創制	壽岳文章
両丹紙漉村紀行抄	壽岳文章
小野晃嗣氏の早逝を悼む	壽岳文章
セレベスのファ	壽岳文章
西鶴と紙	壽岳文章
本邦製紙史料としての地誌	壽岳文章
和紙研究の回顧と展望	壽岳文章
わが紙友抄（一）	壽岳文章
大沢忍学兄の長逝を悼む	壽岳文章
ネリの化学 現在までの諸家の研究について	町田誠之
ネリに関する化学的考察	町田誠之
ノリウツギの名前を巡って	町田誠之
三椶再考 その斐紙とのつながり	町田誠之
ハワイのタバ・手すき紙シンポジウムに出席して	町田誠之
図書の形態と用紙の品種	田中敬
蔵紙の取引と京都への移入（上）猿と紙漉	寺尾宏二
蔵紙の取引と京都への移入（下）	寺尾宏二
島根県高津川上流地域に於ける和紙生産の歴史地理的考察（上）	吉野鉄雄
島根県高津川上流地域に於ける和紙生産の歴史地理的考察（下）	吉野鉄雄
平安朝なかごろの文の様式と料紙	吉川理吉
平安朝なかごろの文の様式と料紙（完）	吉川理吉
紙漉の歌	安部幽香志
支那製紙に関する記録	谷聴泉手記
中世に於ける和紙の贈答	魚澄惣五郎

美濃に於ける徳川幕府の御用紙

紙尽しの献立

東埔寨僧侶の紙漉き

徳川時代大垣領の製紙業

万国博覧会に出品した和紙

羽織仕立の紙衣

熊正文氏の「宋時代に於ける紙の特殊用途」

因州紙から真の日本の紙へ

第五回図書寮展覧会「紙と装潢」出陳本について

宝暦明和年代における国産紙生産販売の経過について

森蘇軒

宮尾しげを抄

角田素江

森義一

田中緑紅

飯田榮助

藪田嘉一郎

宇野東圃

大窪太郎

岸田日出男

〔特別寄稿〕環太平洋地域に拡がるタパ文化

〔特別寄稿〕西安郊外の古代紙を漉く紙郷

〔特別寄稿〕白蓮紙・福建宣紙手漉工程について

中国紙情往来

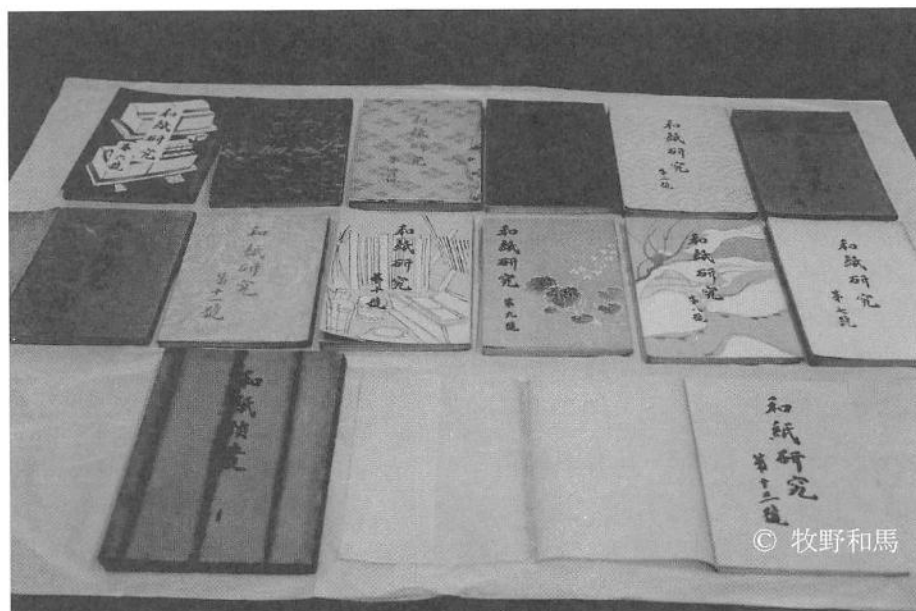
大沢忍同人の追悼

小林良生

久米康生

栗本四郎

『和紙研究』『和紙談叢』原文は旧字体



『和紙研究』『和紙談叢』（向日市文化資料館寄託資料）

【資料1】『和紙談叢』『和紙研究』編輯発行印刷所変遷

『和紙談叢 第一冊』
昭和12(1937)年2月 年四回発行
京都市伏見区桃山町羽栄長吉九番地
印刷人 奥本正人 京都市伏見区瀬戸物町
印刷所 創文社印刷工場
京都市伏見区桃山町羽栄長吉九 奥本内
発行人 和紙研究会
京都市伏見区京町南八丁目 若林内
発行所 澄心堂

『和紙研究 第一号』昭和14(1939)年1月
京都市東山区林下町信重院内
編輯兼発行人 和紙研究会 代表者 藤堂祐範
京都市中京区新町通竹屋町南入
印刷人 便利堂 佐藤濱次郎

『和紙研究 第二号』昭和14(1939)年4月
『和紙研究 第三号』昭和14(1939)年8月
『和紙研究 第四号』昭和14(1939)年12月
『和紙研究 第五号』昭和15(1940)年4月
『和紙研究 第六号』昭和15(1940)年7月
『和紙研究 第七号』昭和15(1940)年11月
『和紙研究 第八号』昭和16(1941)年3月
『和紙研究 第九号』昭和16(1941)年9月
『和紙研究 第十号』昭和17(1942)年3月
『和紙研究 第十一号』昭和18(1943)年6月
京都市東山区林下町信重院内
編輯兼発行人 和紙研究会 代表者 藤堂祐範
京都市中京区新町通竹屋町南入
印刷人 株式会社便利堂 代表者 佐藤濱次郎

『和紙研究 第十二号』昭和20(1945)年1月
京都市上京区上長者町烏丸西入
編輯兼発行人 和紙研究会 代表者 藤堂祐範
京都市中京区新町通竹屋町下ル
印刷者 株式会社便利堂 代表者 佐藤濱次郎

『和紙研究 第十三号』昭和23(1948)年9月
京都市上京区上長者町烏丸西入
編輯兼発行人 和紙研究会 代表者 上村六郎
京都市中京区新町通竹屋町下ル
印刷者 株式会社便利堂 代表者 佐藤濱次郎

『和紙研究 第十四号』昭和26(1951)年1月
京都市上京区烏丸通上長者町角
編輯兼発行人 和紙研究会 代表者 上村六郎
京都市下京区上烏羽村山町一〇三
活版印刷者 有限会社 文功社印刷所
京都市中京区新町通竹屋町南
図版印刷者 株式会社 便利堂

『和紙研究 第十五号』昭和26(1951)年12月
京都市上京区烏丸通上長者町角
編輯兼発行人 和紙研究会 代表者 上村六郎
京都市上京区室町通一條上ル
製作者 綜藝舎
京都市下京区上烏羽学校前
活版印刷者 有限会社 文功社印刷所

『和紙研究 第十六号』昭和54(1979)年12月
京都市下京区東洞院仏光寺上ル(株)森田和紙内
編集兼発行人 和紙研究会
事務局長 森田康敬
京都市山科区四ノ宮 一燈園内
印刷者 燈影舎 代表者 三上皓史

『和紙研究 第十七号』昭和59(1984)年11月
京都市下京区東洞院仏光寺上ル(株)森田和紙内
編集兼発行人 和紙研究会
事務局長 森田康敬
京都市山科区四ノ宮 一燈園内
印刷者 (株)燈影舎 代表者 三上皓史

【資料2】『和紙研究第一号』昭和14(1939)年1月発行時同人及び関係者

新村 出 63歳	寿岳文章 1900-1992
藤堂 祐範 63歳	1924年京都帝国大学文学部選科入学、
禿氏 祐祥 60歳	1927年修了
牧野 信之助 55歳	
上村 六郎 45歳	中村 直勝 1890-1976
大澤 忍 40歳	京都帝大文科大学史学科卒大正9年三高教授、
寿岳 文章 39歳	昭和11年京都帝大助教授兼任
中村 直勝 49歳	
町田 誠之 26歳	町田誠之 1913-2017
奥本 正人 不明	1939年京都帝大理学部化学科卒40年京都工芸
若林 正治 27歳	教授、1947年京都工芸繊維大学教授、
佐藤 浜次郎 45歳	1988年日本・紙アカデミーの発起人会長
藪田 嘉一郎 34歳	
	奥本正人 不明
新村出 1876-1967	1937年「和紙談叢」編輯、『縮写 美濃紙抄製
1907年京都帝国大学助教授、帰朝後に同教授	図説 全』編輯
藤堂祐範 1876-1945	若林正治 1912-1984
1918年京都帝国大学図書館司書となる	昭和10年三高理科(甲)を卒業するが、経済
	的事情により大学に進学せず家業を手伝いなが
	ら古書収集を続ける
禿氏祐祥 1879-1960	
明治-昭和時代の仏教学者、浄土真宗本願寺派	
の僧、高輪仏教大(現竜谷大)卒	佐藤浜次郎 1894-1950
	1919年『法隆寺壁畫集』原色撮影、1927年技
牧野信之助 1884-1939	師長として便利堂入社、1929年『仏畫篇』撮
京都帝大國史研究室に勤務、	影、1935年法隆寺金堂壁画3回目の撮影、和
同大史学科選科卒	紙研究第1号から13号まで印刷人として参加
上村六郎 1894-1991	藪田 嘉一郎 1905-1976
京都帝国大学工学部工業化学科卒、	1925年京都帝国大学文学部史学科選科入学、
同大助手	1928年同大学中退、1934年株式会社便利堂に
	入社、1950年同社取締役役に就任、1951年退
大澤 忍 1899-1982	社、同年、自ら綜芸舎を創立する
千葉医科大学卒業後、京都帝国大学清野微生物	
研究室に入る	

(参考)『和紙研究』『和紙談叢』所蔵一覧

データベース《CiNii Books 大学図書館の本をさがす》<https://ci.nii.ac.jp/books/> による

- ケンブリッジ大学図書館 1-15 談叢
愛知学院大学図書館 1-11
跡見学園女子大学新座図書館 1-17
愛媛大学図書館 8, 15-17
大阪教育大学附属図書館 1-3, 12
大阪樟蔭女子大学 図書館 1-17 談叢
大阪大学附属図書館総合図書館 1-15
大阪府立中央図書館 1-13, 16-17
大谷大学 図書館 1-12, 16-17 談叢
金沢美術工芸大学 附属図書館 1-17
紙の博物館 図書室書庫 1-17 談叢
関西大学 図書館 1-17
関西学院大学 図書館 1-17
九州大学中央図書館 談叢
京都女子大学図書館雑誌室
1-12, 16-17
京都大学吉田南総合図書館 1-17
京都大学文学研究科 図書館 1-9
京都大学附属図書館 1-8, 15 談叢
京都大学人文科学研究所図書室 1-13
京都大学法学部図書室 談叢
岐阜大学図書館 1-9
皇學館大学附属図書館 1-15
高知大学学術情報基盤図書館 16-17
甲南大学図書館 14-15
神戸女子大学図書館 1-17
国学院大学図書館 1-14
国立教育政策研究所教育図書館 1-6
国立歴史民俗博物館図書室 談叢
駒澤大学図書館 1-17
聖徳大学川並弘昭記念図書館 2-17
重山文庫 1-17 談叢
鶴見大学 図書館 1-17
天理大学附属天理図書館本館 1-15 談叢
東海大付属図書館 1-17
東京芸術大学附属図書館 1-15
東京国立博物館 1-11
東京大学 史料編纂所図書室 1-15 談叢
東北大学 附属図書館本館 1-10
東洋大学 附属図書館 1-15
同志社大学 図書館 1-13, 16
独立行政法人 国立印刷局 1-8
名古屋大学 附属図書館 談叢
人間文化研究機構 国文学研究資料館
1-4, 8, 10
新潟大学 附属図書館 談叢
花園大学情報センター 8, 15-17
佛教大学 附属図書館 1-10, 16-17 談叢
宮城県図書館 4, 7-13
武蔵野大学武蔵野図書館 談叢
武蔵野美術大学 12-13, 16-17
明治大学 図書館 1-4, 9-11, 16-17
山口大学 図書館 総合図書館 1-4
横浜国立大学 附属図書館 1-15
龍谷大学 大宮図書館 16-17 談叢
ロンドン大学 SOAS 図書館 1-11

(以上、執筆時現在)

あとがき

京都洛西の小都市・向日市に、NPO「向日庵」が設立されたのは、2017年7月のことでした。以来、地元はもちろん、全国各地の寿岳一家を愛する多くの皆さまのお力を得て、「向日庵」の催しも多彩に広がってまいりました。

この間、2018年までに行われた講演記録『向日庵』第2集をお届けします。

今号の巻頭には、中島俊郎理事長の「向日庵」の設立記念講演が掲載されています。寿岳文章一家の文化的な営みに触れ、法人設立の意義やその方向性について提起していただきました。

さて、今回は和紙研究の講演録を多数収めることができました。兵庫県の多可町からは、寿岳先生の和紙にかけた情熱を受け継ぎ、地域から調査研究と和紙文化の発信をされている活動をお話いただきました。また、寿岳先生が「和紙への私の理解と愛を決定的に不動のものとした」といわれる正倉院の和紙の調査や、和紙の分析についても、それぞれの専門分野から詳細な説明を受けました。いずれも和紙文化への並々な熱意が感じられる講演となりました。正倉院の和紙調査については続編が期待されます。

また、特筆すべきことは、寿岳文章先生の恩師であり、一家と深い交流のあった新村出氏、日本の民芸運動をともにし、やはり終生の交流のあった河井寛次郎氏のお二人の先駆者について、近しい縁者のお二人に講演をいただいたことです。寿岳先生の思索や人間性にもふれることができ、これはきわめて貴重なことでした。

向日庵の文化的な営みをひとつひとつ検証していく活動は始まったばかりですが、中島理事長が設立記念講演で語られている「私たちに託された、寿岳先生から継承する一つの、紡ぎだされた向日庵の糸」の手がかりは出来たと信じております。今後とも、広く会員の皆さま、文化財の保存と活用に理解をお寄せくださる個人・団体の皆さまのご協力を期待したいと思っております。

最後になりましたが、7回にわたる講演会に、講師として快く応じていただき、資料の作成と講演録の校正にもご協力くださいました先生方には、あらためて御礼を申し上げます。また遠方から熱心にご来聴いただいた方々にも、寿岳一家を通じてさまざまな巡り合わせに感謝いたします。そして編集とテープおこし携わっていただきました中島俊郎理事長、事務局の長野裕子氏にお礼を申し上げます。なお、この冊子の発行については「京都府文化力チャレンジ補助事業」の助成を受けていることを感謝とともに明記しておきます。

春立つときに

特定非営利活動法人向日庵事務局 長尾 史子